斉木栗子と斉木楠雄のΨ難

ムラムラ丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「斉木楠雄のΨ難」には様々なパラレルワールドが存在する。

そしてこの世界

「斉木楠雄の女体化の存在「斉木栗子」が斉木楠雄の双子の妹として生まれる世界」

もその一つである。

・斉木栗子が主人公です。斉木楠雄の双子の妹で、仲が悪い設定です。

・原作で主人公の斉木楠雄はここでは準主人公です。

・［］は頭に直接送りつけるテレパシーを使用した会話です。

目次

第1ｘ　斉木栗子のΨ難 ―― 1
第2ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート1 ―― 7
第2ｘ　Ψ低とΨ悪と始業式　パート2 ―― 11
第2ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート3 ―― 14
第2ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート4 ―― 17
第2ｘ　Ψ低とΨ悪と始業式　パート5 ―― 20
第2ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート6 ―― 23
第2ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート5と6（裏） ―― 28
第3ｘ　蛇と幼女とΨ高のおっぱい　パート1 ―― 34
第3ｘ　蛇と幼女とΨ高のおっぱい　パート2 ―― 38
第4ｘ　いい加減友達を作りなΨ ―― 44
第5ｘ　苦手な熱血とセリフΨ多と図書委員 ―― 50
第6ｘ　休日　Ψ出発？リフォーム編 ―― 55
第7ｘ　休日　Ψ登場！鳥束零太編 ―― 61
第7ｘ　分岐点　Ψ登場！鳥束零太編 ―― 67
第8ｘ　休日　Ψ初の恋心？　照橋心美編 ―― 70
第9ｘ　山のΨ奥にある秘湯に行こう！ ―― 76
第10ｘ　もう相ト命にΨ度会う事はないと言ったな？あれは嘘だ　パート1 ―― 85
第10ｘ　もう相ト命にΨ度会う事はないと言ったな？あれは嘘だ　パート2 ―― 92
第10ｘ　もう相ト命にΨ度会うことはないと言ったな？　あれは嘘だ　パート3 ―― 98
第11ｘ　昔の斉木栗子のΨ難……それとG ―― 103

第11ｘ　昔の斉木栗子のΨ難……それとＧ（（裏）　斉木楠雄から見た斉木栗子という存在）　115
第12ｘ　電車に乗るΨのルール　132
第13ｘ　Ψ近の平日の日常風景　前編　141
第13ｘ　Ψ近の平日の日常風景　後編　148
第14ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　1／3　155
第14ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　2／3　161
第14ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　3／3　前編　171
第14ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　3／3　後編　178
第14ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　3／3　分岐点　189
第15ｘ—1　Ψ上級フィレ肉よりもスイーツを　焼き肉編　201
第15ｘ—2　Ψ点結果、気になる？　テスト編　205
第16ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女　その1　209
第16ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女　その2　214
第16ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女　その3　221
第—ｘ　プロフィール　斉木栗子　改定第一版　231
第17ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　前編　241
第17ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　中編　250
第17ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　後編　260

第1ｘ　斉木栗子のΨ難

私の名前は斉木栗子、超能力者だ。

「こいつ誰だ？」と考えているのならこんな小説まがいのものを読むまえに「斉木楠雄のΨ難」を全巻とノベライズもあわせて新品で購入して読破して頂きたい。有意義な時間を過ごせるはずだ。

もう一度自己紹介をすることになるが、私の名前は斉木栗子だ。容姿は薄ピンク色の短髪で、めがねで、基本的に無表情の綾波風の女子高生だ。「よくわからん」と言う方はノベライズ二巻の表紙にいるピンクが私だ。ただ、頭にアンテナのようなものが二つ付いている違いもあるがこれについてはまた今度にしよう。注意して頂きたいのだがノベライズ二巻の表紙を見るその際には、私の他にいる二人の内の一人が超絶美少女の為、目をそらすことが出来なくなる可能性がある為十分に気を付けて頂きたい。

そしてこれまたもう一度言う事になるのだが、私は超能力者だ。「そんな、まさか」とお思いになる気持ちも分かるが、事実である。サイコキネシス、テレパシー、透視などなど超能力らしいものに加えて幽体離脱に、人間をやめた吸血鬼を鼻で笑えるほどの身体能力という超能力？というものまでついている。

確かにこれだけを聞くと「なにそれ、裏山。人生勝ち組ワロタＷＷＷ」と考えるニートの田中君の気持ちも分からなくもないが、よく考えてほしい。例えば君が魔法少女だとしよう。魔法でライフルを沢山作りだしたり、ものすごいパンチを放てたり出来たとしよう。でも世界は平和だ、敵もいない。自分の力を誰かに話しても頭おかしいと思われて終わりだ、更に能力が暴発して制御が利かないおまけつき。どうだろう、ただただむなしいだけだとおもわないか？。それを聞いた田中君も「なにそれワロエナイ、でも転生しておにゃのこになれるならそれでいいいいぃ」と言っていたのでイマイチ理解が足りない田中君の家は爆破しておいたので彼はこれから立派に就職活動を始めるだろう。

後もう一つ重要な話がある。隣で一緒に歩いているこいつ、

私の双子の兄、名前は斉木楠雄、超能力者だ。
彼は……話すのも疲れてきたので簡潔にいこう。容姿は、私の髪の色を濃くして私を男化した感じだ。分からないなら漫画の一巻の表紙を見ろ。ご丁寧に自己紹介してるぞ。そして彼も私と同じ超能力者で、（大変不満ではあるが）私と同じ能力を持ち、同じ力の強さだ。（これまた不満ではあるが）私と同じ考えを持っているようで、恐らく彼も私のように自分語りをしているのだろう。
そう彼は、私の人生の最大の敵となりうる存在なのだ。
私が幼稚園児だった頃は仲のいい兄妹で、よく（超能力を使って）遊んだものだが、プリン争奪戦によってそれは崩壊した。
プリンを手にするためじゃんけんは一時間が経過しても終わらず先生が切れそうになったころ、彼が不意にじゃんけんをやめ出入り口を指さし、私はそれを見て頷いた。私と彼は肩を並べ外に出ると同時に瞬間移動で無人島につくと同時にケンカを始めた。結果、無人島は消滅、勝敗もつかず、プリンも別の子が食べていた。
マインドコントロールであの無人島の存在を消した後私と彼は口を利かなくなった、それでもテレパシーでお互いの考えていることが聞こえてくる、うっとおしいと言うより怒りの感情が大きく「お前の考えていることなんか聞きたくない」とお互い強く念じると彼の考えていることだけが分からなくなり彼も私の考えていることが分からないようだった。
高校生になってからは多少の会話（心の声は聞こえないままだがテレパシーで会話することは出来るようだ）はするものの仲は悪いままだ。

［なぜ僕がお前と肩を並べて帰らなきゃならない］
［肩を並べるのが嫌なら私の先を歩くか後ろを歩くかすればいい］
［僕に命令するな。そう言うお前がそうすればいい］
［私はお前の言うことなんか聞かない］

就業式を終え早めに帰ることができたのに同タイミングで校門を

出てからは最悪の気分だ。それとお互いをお前呼ばわりしているのはお互いほんの少しだけ高圧的なせいなので仕方がない。

［せっかく燃堂と海藤をまいてきたというのに、最悪だ］
［まさか！ともだちか？（笑）］
［ちがう］
［そうかそうか（大笑い）］
［ちっ、くそがっ（殺意）］

そんな愉快な会話（かなり大爆笑）をし、途中車に引かれそうになった犬を助けたりしたが何事もなく家についたようだ、すると家の前にリストラされたのだろうかわいそうなスーツ姿の中年が座ってた。

「おっ！おかえりっ、楠雄く～ん、栗子ちゃ～ん。早かったね！」

機嫌の悪い彼はこれをスルー。真っ直ぐ玄関に向かう。
機嫌の良い私はほんのわずかににやつきながらリストラサラリーマンに返事をする

［リストラか？］
「やっぱりそんなこと考えてたのか！顔に出てるよ！きょっ、今日は早帰りだったんだ！」（本当は会社で定めた一年でたった一日だけの土日祝日以外の定休日だったんだ）
［私に嘘は通じないぞ］
「あぁ～っ！、読みやがったなこいつぅ～！」

女子高生に言葉で攻められてはしゃぐ中年か、気持ち悪い。

［女子高生に言葉で攻められてはしゃぐ中年か、気持ち悪い］
「そう思ってもわざわざテレパシーで送ってこないでよぉ！」

そんな会話（これまた大爆笑）をしていたら、
ガチャッ
彼は玄関の鍵を念力で開け玄関の扉を開けていた。
「あっありがと～楠雄ぉ～またあの鬼嫁に閉め出されてさ～まだなにも言ってないのによくわかったな～」
そりゃ分かるさ。テレパシーの範囲は二百メートルだから父さんの
（早く楠雄か栗子早く帰って来ないかなぁ）
っていうのは聞こえていた。
彼はハァ～ッと、ため息をしてから家の中に入っていったので私と父さんもそれに続いた。

そこからは最近のいつもの光景だ。父さんと家にいた母さんが罵り合い、いつの間にか母さんが父さんにプロレス技をかけ始める。おかげで家の中はどったんばったんおおさわぎだが、私と彼はこれをスルー。真っ直ぐ冷蔵庫に向かう。先を歩いていた彼が冷蔵庫から一パック三個入りのコーヒーゼリーを取りだし、包装を破き一つを自分の手に、もう一つを私に差し出し、残る一つを冷蔵庫にしまう、この行程を流れる用に行う。これには暗黙のルールがある。
一つ、コーヒーゼリーの前では皆平等。
一つ、コーヒーゼリーを巡っての醜い争いは厳禁。
一つ、コーヒーゼリーに感謝を忘れない。
一つ、コーヒーゼリーが三個あったなら残る一つは両親のもの。
このルールが出来上がったのにはある日の彼の過ちが始まりだ。
前に私が買ってきたコーヒーゼリーを彼が誤って食べてしまった。
地球に巨大隕石が落ちてきた事件より数十倍も重大な事件だった。
（隕石はワンパンチで破壊してもよかったがエネルギー弾のグミ打ちで消滅した）
彼にそれは私が買った私のものだと（ジェスチャーで）伝えると彼

は膝をつき土下座をした。彼が開き直りようものなら地球は消滅していたが、彼の反省を見て少しの罪悪感を覚え彼を許すことにした。この事件後私と彼は内容はともかく会話をするようになり私と彼の不仲を心配していた両親は、私と彼の口汚い口喧嘩を見て号泣していた。

そんなことよりコーヒーゼリーだ。やはりこの味は嫌いではない。

コーヒーゼリーを食べながら両親の（母さんの一方的な）ファイトを見ていた。父さんからの

「二人して幸せそうな顔して食ってないで助けてよぉぉ!!」

この叫びを私と彼はスルー。父さんが母さんに投げられ彼にぶつかり、スプーンからコーヒーゼリーが落ちたが、彼が私にアイコンタクト、私は軽く頷きサイコキネシスで空中でキャッチ、口を開けている彼にコーヒーゼリーを放り込む、この間一秒。

「なんでコーヒーゼリーに関してだけ息ぴったりなんだよぉぉ!!それより早く助けてぇぇ!!」

この父さんの叫びもスルー。しかしこれ以上コーヒーゼリーを危険に晒すわけにはいかないためいつも通り両親に強制以心伝心をかけお互いに愛し合っていることを分からせ仲直り。こんなことは稀によくあることなのでこの茶番にはもう飽き飽きしている。

母さんは冷蔵庫からコーヒーゼリーを取りだし父さんに差し出す。

「このコーヒーゼリーを食べて欲しいの。せめてもの、仲直りの印に」

「いいやぼくも悪かったのさ、だからこのコーヒーゼリーは二人で食べよう」

「まぁ、あなたったら、うふふ♥」

「あはは♥」

はいはい、ハッピーエンドハッピーエンド。さっさとこの甘ったるい世界から逃げよう。

コーヒーゼリーを持って椅子から立ち上がると同時に彼もまた立ち上がった。舌打ちがでそうな気持ちをなんとか落ち着ける。コー

ヒーゼリーの前でそんなことしてはいけない。コーヒーゼリーを食べながら自分の部屋に向かう。前を歩く彼も彼の部屋に行くようだ。

春休みが終われば始業式、二年生が始まる。一年生の時のようになにもない素晴らしい一年になることを祈る。

私は春休みをどのように有意義に過ごすかを考えながら私の部屋にはいっていった。

第２ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート１

春休みはあっという間に終わってしまったがとても充実した日々を過ごすことができてとても満足している。テレビ、漫画、読書、それとゲームだ。

双子の兄である斉木楠雄、彼はよく最新ハード機対応のクソゲーをやっているが私から見ればそれは愚策だ。

たしかにテレパシーによってネタバレがあるとは言え新しいゲームを買ってきたワクワク感、更に最新ハードの高画質、ハイクオリティを期待してポイント倍点！なのにクソゲーだと分かって買ったのに想像を上回るがっかりクオリティにそんなに期待していないと思いながらももしかしたらという微かな希望も一気に絶望に堕ちる。

私はそれを三回目でギブアップした。もうあんな気分味わいたくない。彼は先週買ってきたやつで二十作目だ。「希望は前に進むんだ！」とばかりにクソゲーをやり続けるがそのたびに絶望に堕ちているだろう彼はもはや「超高校級の絶望」と呼んでいいのではないだろうか。全く理解出来ない。

しかしこの私、斉木栗子は気が付いたのだ。私がやるのにベストなのはレトロゲーなのだと。レトロゲーを侮ってはいけない。確かに今のゲームと比べると画質もクオリティも落ちるが面白さでは負けていない。ネタバレも今話題のゲームならまだしも古いゲームについて考えている人はあまりいない。私の完全勝利だ！そんなことを考えながら「スペランカー」を一週間続けてプレイした。

今日は始業式だ。私はスペランカーのＢＧＭと主人公がやられた時の効果音が頭から離れずふらふらしながら朝ごはんを食べている。

両親は仲直りしてからずっとラブラブだ。両親が話をすれば隙あらば「愛してる」を入れている。かなりめんどくさいがこれがいつもの風景だ。いちゃつく両親をぼーっと眺めながらご飯を食べ続けていると、母さん（斉木久留美）が父さん（斉木國春）から目を離しこちら、私と彼、斉木楠雄を見て笑顔をを見せる。

「今日から二年生ね。くーちゃん、くりちゃん。今日は特別頑張ってお弁当作ったからね　」

始業式の日は午前で帰れる。そのこと以上に、その卑猥な呼び方何とかして欲しい。いつでも笑顔で優しい母さんにはどちらも切り出しにくい。

「そっか、じぁあ今日からまた勉学に勤しめよ！楠雄！くりちゃ」「今日は始業式だから授業はない。そして二度とその呼び方をするな。いいな」

人指し指にエネルギーを集中させバチバチと音のする玉を作り出しながら父さんを睨む。

「はっはいぃ」

「くりちゃんはこの呼び方、嫌？」

「母さんは今まで通り、くりちゃんでいい」

母さんが悲しそうな顔で聞いてきたせいで思ってもないことを言った。母さんに笑顔が戻り「そうよね、くりちゃんはくりちゃんだもの　」と嬉しそうに笑った。

まだふらつくものの学校へ行く準備を済ませ玄関から外に出る。玄関扉を開けたのは彼、楠雄だ。彼は体を横に向け私からから視線を外さない。私はその後に続く。実は彼と一緒に登校しないと母さんが切れるのだ。「兄妹仲良くね　」なんて笑って言うが彼は私の天敵だ。それは無理というものだろう。

玄関から笑顔で「行ってらっしゃい！」と言いながら手を振っている。本当に元気な人だ。

今彼と肩を並べて登校中だ。もしかしたら「なんで肩並べて並走してんの？実は兄妹仲いいんじゃないの？」と考えている方もいるかも

しれないので答えておこう。答えは簡単、背後を見せたら殺られるかもしれないからだ。私と彼にはテレパシーがある。半径二百メートル内にいる生き物の心の声がばんばん聞こえるのだ。

（あの二人双子かな？すごい似てる）
（あの二人双子に見えるが実はアンテナペアルックカップルだな！ふざけやがって！）
（我は闇黒四天王の内の一匹、シァンディ！）
（あぁ心配だなぁ斉木君と一緒のクラスだといいんだけど、もし違うクラスの時は休み時間に遊びにいこうかな）
（ママ、行ってきますのハグ＆ちゅーをしよ…）

家から二百メートル離れたようだな、父さんはさっさと会社行け。それに隣にいる彼の名前が聞こえたな、友達（笑）か、聞く限りでは普通の生徒だな。このように様々な心が聞こえて来て非常に煩いのだがこれはもはや慣れるしかない。しかしテレパシーにも少なからず利点もある。

（おっ、またまた可愛い子発見っす。……Cカップ、間違いないっす。うへへ、こりゃナンパしない手はないっす。
あの「あのそこの君ちょっといいすか。オレ、鳥束零太っていうんすけど、学校終わったらオレの寺に来ないっすか？守護霊見てあげるっすよ）」

無視☆。
霊なんてものこの世にいるわけないじゃないですか、科学的に考えて。そんな事よりこいつがいい例だ。テレパシーを利用する事で人の有無が分かる上に敵意があるか、ないかが一発で分かるため対処がしやすい。
このゲス野郎が私に話しかける前に（あの）とあるが、人は言葉を発する際には心の中でも同じことを言っている。つまりこの（あの）

というのは例えるなら走り出す前に足に力を込めている段階と言える。決して文章ミスではない。

（無視っすか、それはそれで興奮するっすね。……もしかしたらこの様子だと胸触っても無反応なんじゃ）［触ったらコロス］

「ひっ!?」

目に力を込め睨みつけながら虫のささやき（かすかに聞こえる程度のテレパシー）を送るとゲスくず野郎冷や汗をかきながら私から距離をとった。

［モテるな（笑）］

［黙れ（殺意）］

彼にも睨みを利かせてやったが無表情のままだ。腹立たしい。テレパシーに関しては彼だけ特別だ。テレパシーの送受信は出来ても何を考えているか分からない。そんな奴に背中見せるなんて心中穏やかでいられない。

学校についてからは教室に向かい荷物を置いてから体育館に集合だ。さっさと終わらせて帰りたい。

〈続く〉

第２ｘ　Ψ低とΨ悪と始業式　パート２

「――――であるからして、――――であるからして、――――であるからして」

校長が話し始めて十五分か、まだまだ終わりそうにないな。

「――――であるからして、――――であるからして、――――であるからして」

（「であるからして」多くない？）

（もはや「であるからして」しか言ってないじゃないか？）

（九十八・・・九十九・・・百回突破ぁ！。なにぃまだ増えるというのか!?）

生徒からの不平不満の声がテレパシーにより聞こえてくるが、校長が我々生徒の為に話をしているのだ。蔑ろにはできない。しっかり聞くことにしよう。

それにしても私のクラス、二―三（本当はぐにゃぐにゃした三本のたて線なんだが）は個性の強い人間だらけだった。一人王様が座るような豪華な椅子に座り足まで組んでいる奴を初めとして、中二病（テレパシーで心の声を聴く限り普通のやつだと思っていたのだが）、超絶美少女、恋愛脳、食欲、熱血、元不良、長文（デスノートのＬみたいな目で私を見ていた）、今挙げたのは要注意だ。

しかし最悪なのは最も危険な人物、斉木楠生、彼が一緒のクラスだということだ。この事が分かった時には心底嫌な時に出る顔をしてしまった。横にいる彼も同じような顔をしていた。くそっ、今からでもめがねで統一している☆（五）組に入れないだろうか。まぁ超能力で無理やり出来るが、どうしても目立つことになるので諦めるが。

まぁだが要注意人物だらけでもうまくやれば一年生の時のように平穏学園ライフをすごせるはずだ。私は超能力者だ、やってやれないことなどない。隣で立っている彼（名前の順番で並んでいるためそうなった）は、要注意人物の一人と友達（笑）なため、もはや平穏に生きるのは無理だろう。彼を可哀そうな人間を見る顔で見てやろうと思い隣の彼の方を見ようとした瞬間。

「だーれだっ」

心臓が止まった。

「よう相棒。ひしぶりだなってあれぇ相棒じゃねぇ、アンテナついてるから相棒だと思ったんだがな。おっ」

なんとか心臓を動かすことが出来た。

だが有り得ないだろこんな事。冷や汗が止まらない。知りもしない男に目元を触られた嫌悪感もあるが、このふざけた髪型の不良からは何一つ心の声が聞こえない。人間だれしも何か行動をおこせば多少なりとも心の声が出るはずなんだ。それがある限り「だーれだっ」なんて一生されはずがない。まさかこいつも超能力者か!?

(「おっ相棒そこにいたのか。そのアンテナってはやってんのか?おっなに笑ってんだ?おもしろいもんでもあんのか?それよりなんでオレここにいるだっけ。おっ」)

今のこいつのセリフで解った。こいつ何も考えていない。

心の声は確かに聞こえたがそれはこいつが話し始めた同時だった。普通人は何を話すかを頭で決めてからはし始めるものだが、こいつはそうじゃないようだ。私に「だーれだっ」をしたのは無意識だったとでもいうのか?何も考えず行動するなんてこいつは虫と同レベルということになるぞ。あっ虫のこと考えたらまた冷や汗が……。あまりの衝撃に混乱したが落ち着いてきた。そろそろ彼を問い詰めねばなるまい。

[いつまで笑っている、説明しろ]

[そうだな笑いこらえるのもつらくなってきたところだ]

[全くこらえているようには見えなんだが]

［そうか？（笑）。まぁいいだろう。こいつは燃堂力（ねんどうりき）。解っているだろうがこいつは何も考えていない馬鹿。つまりテレパシーで得られる情報が何もない］
［なぜこんな得体の知らない奴に相棒なんて呼ばれている］
［僕が知るか。こいつが勝手にそう呼んで絡んでくる］
彼はこの化け物が後ろにいると分かった上で平静でいられるのか？彼も彼で化け物だ。
こんなのが後ろにいたんじゃもうまともに校長の話も聞くことなんか出来ない。しかも化け物がこの列にいるということは同じクラスじゃないか！
私の平穏学園生活が崩壊した。そう認識せざる終えなかった。

〔続く〕

第２ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート３

私は校長の話など聞かずに頭の中を整理する事に努めた。校長の話？よくよく聞いたら話の内容が校長の頭のように薄かったので問題ない。

冷静になれ。考えてみたら後ろの化け物が顔の見た目通り殺人を平気でやるようなやつだとしてもだ、背後から日本刀を突き刺し体を貫通する、なんてことはまず有り得ない。

前にこんな事があった。

私の父、斉木國春が下らないこと言いながら私の肩に手をポンッと置いた時（あんな父さんだが嫌いというわけではないので避けたり払いのけたりはしない）。

「えっ、アイ○ンマン?!」

急にわけの分からないことを言い出したと思っていたらどうやら私の肩こりは酷いらしく私の双子の兄、斉木楠雄、彼も同様だった。

両親は肩こりをなんとかしてやろうと試行錯誤してくれた。途中、私の母、斉木久留美が背中を包丁で刺してきたが（母さんに悪意はない。テレパシーで分かる）ガキイィンッ　という金属音を出して包丁は折れ、私の背中は無傷だった。

しばらく奮闘していると、家にいない私の二つ上の兄、斉木空助（さいきくうすけ）が、豪華な椅子を二つ送ってきたので（カス兄は海外留学している）早速座ってみるとピリリとした心地よい痛みとガガガッという激しい音がしだしたので何事かと思ったら高級椅子は実は拷問椅子だった。よく見ると見るとメモが挟まってあり「ママは絶対に座らないでね　」と書いてあった。

父さんは直ぐ様、国際線でカス兄に連絡を取った。

「どういことだ空助ぇぇ!!あの椅子はぁぁ!!」

「あっパパ久しぶり、元気？。あぁあの椅子ね僕の予想だと今頃楠雄

と栗子が座ってダメージを受けるどころか肩こりが完治してるところだと思うんだけど」
「せっ、正解だよ…。というか僕かママが座ったらどうするつもりだったんだよっ！」
「あれっメモ書いたんだけどな、もしかして見ないで座った？ママは絶対座らないデザインにしたし、それに栗子がいればなんとかなるでしょ」
「そりゃそうだけど…」
「あなた変わってぇ？…あっくーくん久しぶりぃ　元気してた？」
「ママ久しぶりうん元気だよ。そうだお詫びにママの好きそうな高級一人用ソファー送るからね」
「まあ嬉しい　」
「あれ？僕にはないの？」
　そんな会話を余所に私は肩がアーマーテイクオフしたかのように軽いことに喜び、隣の彼も同じのようだった。二人同時に（偶然）腕を軽く振ったら家が全壊した。彼が直したからそれはいいのだが。また肩がこってきた頃これまた試行錯誤した結果、私と彼が交互に肩もみをするのがベストだった（けっして仲がいいわけではない）。どうやら私のほうが彼より肩がこりやすいようだがこれについては謎だ。
　とまぁ長くなったが後ろの化け物が刀振ろうがスタンガンを打ってこようが平気な訳だ。そう考えると気が楽になった。ただその時はほんの少しだけ驚くからやめてほしいのだが。
　頭の整理がついたところで後ろからドサッという音がしたので振り返ると男子が倒れていた。立ちくらみだろうか。
「どうしたあぁ!!」
「なにがあったあぁ!!」
　これにはいい意味で驚いた。
　化け物はこういうのを見ると倒れた男子に唾でも吐きかけに行く

のかと思っていたが実際は必死に倒れた男子を熱血と共に介抱しているではないか。

ふむ、これなら化け物から燃堂に呼び方を変えたほうが良さそうだ。燃堂は悪いやつじゃない。私は燃堂に対してほんの少し極々ちょっぴりビビッていた自分をバカバカしく思ったのだった。

〔続く〕

第２ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート４

前に燃堂は悪いやつじゃないと言ったな。あれは嘘だ。
今燃堂は立ちくらみで倒れた男子をマウントポジションを取り「目を覚ましせぇ！」などと叫びながら両の拳で交互に殴り続けている。必死に助けようとする気持ちは伝わるがやっていることはゴミだ、クズだ、最悪だ、下衆の極みだ。やはり燃堂は危険だ。警戒を怠ってはいけない。
だが私はそれを止めたりはしない。面倒だというのもあるが問題は倒れた男子にある。

（ぐっ、普通立ちくらみで倒れたやつを殴るかよ馬鹿が。オレは仮病を使いたいだけだ）

変な頭のクチビルも燃堂とは違うタイプのクズだった。仮病を使って楽出来るならここにいる生徒全員がしている。お前だけが特別ではない。だからいい気味だと思う。隣の彼は別として元不良も気が付いているようで、

（前の学校じぁああんな腰抜けゴロゴロいやがったなぁ。そんな野郎は全員きっちりシめてやったもんだ。懐かしいぜ。）

と、考えながら暖かい目で見ている。
私は燃堂とクズの方を見ながら私の心の中で「イヤーッ！」「グワーッ！」「イヤーッ！」「グワーッ！」とセリフをつけている。カイシャクは私に任せろ。

「止めるんだ燃堂君！どうやらこの方法では目を覚まさないようだぞ！ここは保健室で休ませるべきじゃないかな!!」
「おっ？」

ふむ、爆発四散する前に止めてしまったか。残念だ。
熱血の方も殴って起こすのは正しい処置方法だと思っているらしく、結構長い間燃堂を止めずに「頑張れそこだ！やれるという気持ちの問題だ！」とよく分からない応援をしていたな。

「じぁオレサマが連れてってやるよ」

これに素早く反応した先生が近寄ってきた。

「燃堂一人で行かせるのは危険だ。斉木栗子、お前一年の時保険委員だっただろ。ついていってやれ」
「そうか！燃堂君、斉木さん！気合い入れて保険室に行ってきてくれ！僕はここから応援しているよ！」

最悪だ。斉木楠雄、彼が昔マインドコントロールで「どんな怪我でも自己治癒ですぐ治る」という常識では考えられないことが常識となった。他にもアンテナ、髪の色、ギャグ補正に関するマインドコントロールも行ったようだが詳しくは知らない。（彼が先に行動したせいで私はマインドコントロールを行ったことがない）つまりこの世界を簡潔に説明するなら「斉木楠雄のΨ難」の世界は常識にとらわれてはいけないのですね！」ということになる。
つまり保険委員の仕事などないようなものだと思ったのだが思わぬ落し穴があった。
病気、体調不良には普通になる。
はぁ。私自身忘れていた。私が保険委員だったことを。二年からは図書委員をやろう。私は読書が好きだし苦にならないはずだ。間違いない。
［ほら早く行けよ（再びの笑い）］
［ちっ、分かってるよ］
私はクズの首根っこをバックでも持つかのようにして振り回しながら体育館から出ていく燃堂を追いかけ、後ろから

「富士山だっ!!!」

という理解不能な言葉を掛けてくる熱血の言葉を平常心を保ちながら聞き流した。

〔続く〕

第２ｘ　Ψ低とΨ悪と始業式　パート５

そういえば燃堂に振り回されて首が閉まり気絶しているこいつは高橋というらしい。

こいつが仮病を使って倒れたとき燃堂と熱血以外に二人の男子がこいつを心配して近寄ってきたな。その時「大丈夫か？高橋」と言おうとしたところで燃堂が殴り初めたため絶句していた。しかししばらくすると。

「なぁ高橋仮病じねぇか？」

「ああ、あんだけ殴られてなんのリアクションもないところを見るにどうしても保健室に行きたいらしいぜ」

「高橋だもんな」

「ああ、高橋だからな」

小声で話した後二人は高橋を見捨てた。

そんなこんなで保健室に着いた。

「おっ、お前相棒に似てるなぁ。相棒２号こっからどうすりゃいいんだ？おっ？」

大変不満たが文句を言うのも面倒なので私は無言で保健室に備え付けられているベッドを指差した。

「おっ、そうかサンキュー」

燃堂は高橋をベッドに向かって投げた。見事ベッドを通り越し壁に激突した。燃堂の危険性を再認識しつつこれ以上付き合いきれないので体育館に戻ろうとするとどうやら高橋が目を覚ましたようだ。

そのまま寝てればいいのに。

「うっ体全体が痛てぇ。その上気分が悪りぃ。ここ保健室か？…あっお前！」
「おっ？なんだお礼か？」
「ちげぇよ！お前さんざん殴ってくれやがって！半目にして見てたんだからな！」

どうやら振り回された時の記憶は飛んだらしい。

「まぁいいや。オレが仮病だってこと言うなよ」
「おっ？ケビョウ？」
「仮病だよ！仮病!!全くお前がーーーー」

燃堂と高橋が言い争っているがそんな事よりさっきから気になっているんだが。

（フレーフレーたっかっはっし！）
（負けんなあぁ高橋ぃ！）
（お米食べろ!!）
（なぁ高橋仮病だよなぁ？）
（いや、自身なくなってきた。）
（あいつ仮病じゃなかったのか？くそっ俺のほうが腰抜けじねぇか！ぅ、うおおおぉぉ！フレーフレーたっかっはっしぃ!!）
（やかましくてかまわん。おい俺様は帰るぞ！）

なんだこれは。
テレパシーでたくさんの声が聞こえてくる。気になって目を寄り目にして千里眼を使うと熱血が主体となってほとんどの生徒が叫んでいる。ほんとなんだこれは。
（えー皆さんの高橋君を心配する気持ち大変感動しているのであるか

らして。始業式はまた後日行うのでありまして）
（よしみんな！今すぐ保健室に行くぞ）
（（（（うおおおぉぉ!!!））））

なんなんだ。これは！
今聞こえた情報に半信半疑になっていると。

「おい！そこの女子！お前も聞いてんのか?!」

保健室の出口を向いてつっ立っていた私に声をかける高橋。お前なにのんきにキレてんだ？

「頭に変なアンテナ着けやがって！そういうのを付けんのはオタクでブスって決まってんだよ!!」

高橋はずんずんと近づいて来た。肩に手を置いて振り向かせるつもりのようだ。嫌悪感ｍａｘだ。

（あれっ？合金製金庫？）

今そういうのいいから。まじで。

「お前もオレが仮病だってこと言うんじゃ……」（可愛い…まじタイプだ…）

お前ほんとのんきだな。
そんなこんなでタイムアップだ。保健室の外にいる大柄な男の存在に私は気づいている。

〔続く〕

第２ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート６

私の名前は斉木栗子。超能力者だ。
大事な事だからこれからも何度でも言うぞ。
そして私が災難に有っていることに笑いが止まらないでいるだろうあいつは、
私の双子の兄、斉木楠雄。超能力者だ。

大事な事は言ったのでそろそろ現実を見よう。

「あっあのさ、オレが仮病使ったのできれば言わないで欲しいんだ。そしたらなんか奢るからさ。なっ？」
「オレサマに奢ってくれるのか？へっへっへ、ラッキー！ラーメン食いに行こうぜ相棒を誘ってよう」
「なんでお前みたいなやつにオレが奢んないといけねぇんだよ！お前が邪魔しなけりゃ何事もく仮病出来たんだ。くそっ」

ブサイクが変な顔しながら（恐らくキメ顔していたのだろう）なんか言っていたが口が臭すぎてなに言ってるか分からなかった。
だが後半は燃堂の方を見ていたから聞き取れたが今の発言はウカツだったな。

ガララララッ（横開き戸の音）
「今はっきり聞いたぞお前「仮病」なんだってなぁ、ええっ！高橋！」
「アッアッアッアイエエエエエエェ!!松崎！松崎ナンデ!!」
「松崎「先生」っだろうが！なめてんのか!?」
「アイエエエエエエェ!!」

ひとまず良かった、ＲＳＳ（リアル・先生・ショック）を受けても失禁はしないようだ。

「説明してもらおうか！高橋!!」
「えっえーとそのぉ」（考えろ何か何かあるはずだ）
　チェックメイトだな高橋、覚悟しろよ。私をこんな面倒なことに巻き込んでただで帰れると思うな。
（…そうだ！）
　ん？……そんなまさか。
「そうだ。こいつらだ！こいつらがオレをハメたんだ。オレに立ちくらみのふりをして倒れろって言ったんです。そしたら保健室に連れていったオレ達もさぼれるからってやらなけゃ殴るとも言われました！」（こうなったらヤケだ！オレが助かればそれでいい。ひゃーひゃっひゃ。悪く思うなよ！）
「本当か!?燃堂！斉木！」
　正直この展開は予想できなかった。
　自惚れるつもりはないが高橋は私に気があった。テレパシーで分かる。万が一こんなことになったとしても私は巻き込まれないとふんでいたのに。…あいつはこれからずっとクズと呼んでやろう。
　しかしこの状況どうしたものか。二十通りしか思い付かない。
「おっ、ちょっとなに言ってんのかわかんねぇよ。先生さっきから言ってんだろ」
「何が言いたいんだ！燃堂！」
　松崎先生は平等に生徒を見ている。見た目不良の燃堂でもしっかりと話を聞こうとしている。
「だからこいつは「ケ病」だって！」

「仮病ではなく「毛病」。そう言いたいんだな？「毛病」とはなんだ？」
「おっ？病気だろ？知らないのか先生」
「まっまさか。知っているに決まっているだろ！」
（まさか医療に明るい生徒だったとはな、なめられるわけにはいかん）

松崎先生が考え込んでいる間に燃堂が「オレサマもケ病ってなんだか分かんねえ」とかいっていたが松崎先生には聞こえていないようだ。なんなのだこれは展開が早すぎる。
クズ（高橋）も何がなんだか分からないという顔をしているが私もどうすればいいか…。いや突破口が見えた。私は体温計を見せつけるように持つ。

「そうだぜ熱がありゃあ病気だぜ」
「計ってみろ高橋」
「はぁオレ病気でもなんもないですけど」
「いいから計れ」

ここでパイロキネシスで体温計の温度を上げ…誰か来るな…熱血と元不良だな。

「やぁ高橋君！お見舞いに来たよ！本当は全校生徒で掛け着けるつもりだったんだけどね。皆君が仮病じゃないかって言い出してね！でも僕は信じているよ！」
「オレも心配で…」（本当はこいつのことなどどうでもいいんだ。知りてぇんだオレの目が腐ったのかどうかをな）
「いやオレは脅されて…」ピピピッ

まずい！まだ体温計を熱していない。こうなったら…

ボウッ
「あづぅ!!」

「高橋の脇が燃えた!?」
「早く服を脱ぐんだ！」

体温計を熱するのを諦め体温計周りを軽く燃やした。苦し紛れだが…なんとかなるか？

「やっぱりな高橋。お前は仮病するような腰抜け野郎だったわけだ」ピキ
「どういうことなんだい窪谷須君！」
「こいつは体温計に何か燃えるような仕込みをしてやがったが火薬かなんかの配分を間違えたってところだろうぜ。つまりこいつは重病だと装おうとした。仮病しようとしたんだ！」ピキピキ
「なっ、なっんだってー！」

なんとかなるもんだな。バカしかいなくて良かった。

「おい、高橋お前やっぱり仮病だったんだな。毛病何て言いだすあたり醜悪だ。生徒指導室行くぞ、オラッ！」
「高橋お前後で体育館裏な」
「おっとこんな時間だ！テニスの練習に行かないと！失礼します松崎先生！またね！窪谷須君！燃堂君！斉木さん！」
「おっ？お前らどっか行くのか？オレサマも行くぜ。」

クズが絶望的な顔で引き摺られていく。ざまぁ。というか熱血結構ひどいな。
都合よく馬鹿どもが出て行ったし念のため証拠隠滅しとこうか。私は体温計を握りパイロキネシスで消炭にする。
ボウッ
しまった。出力を間違えて手を炎が覆い尽くしダークソウルの呪術の火みたいになっている。

「おい相棒2号。お前は行かないの…ってすげえ熱じゃねぇか!!」

あっ。

私はなぜか担架で運ばれている。松崎先生が付き添っている。

「　体温計を手にしたら燃えたってどんだけ高熱なんですか。そんなこと初めてだ。一体どんな病気だって言うんですか」

「恐らく毛病だと思います」

「はぁ!?」

本当に意味が分からない。私がそんな高熱なら救急車が来るまで寝ていたベッドも今乗ってる担架も燃えてるはずじゃないか。まだ学校にいた斉木楠雄、彼からテレパシーが来た。

［ざまぁ］

［○ね］

彼が送ってきたテレパシーに怒りを覚える。家に帰ったら彼のコーヒーゼリー食ってやる。

学校初日、今まででここまで災難な日は初めてだ。この一年間生きていけるだろうか。

第２ｘ　Ψ悪とΨ低と始業式　パート５と６（裏）

ここまで第２ｘを読んで頂いた読者諸君、まことにありがとう。見えていないだろうが僕は今百八十度お辞儀をしている。

おっと自己紹介がまだだったな。

僕の名前は斉木楠雄。超能力者だ。

そして、災難真っただ中にいる私に彼は笑いを隠せないでいるだろう、そう考えているあいつは、

僕の双子の妹、斉木栗子、超能力者だ。

今の状況を話す前に重要な話があるため先にそっちから話そう。

栗子は僕を天敵だと思っている。それはもっともだと思う。燃堂のようにテレパシーで心の声が聞こえず僕と同じ力を持っている。これが同じなら僕も栗子を天敵と考えるだろう。同じなら…だ。

少し前…と言ってもこの小説もどきの第１ｘ、つまり初めの話だ。僕が冷房庫からコーヒーゼリーを取り出す時、栗子の前に僕は立っていた。テレパシーで心の声が聞こえないといのはニンジャに命を狙われるくらい危険なのだ。…それなのにおかしいと考えなかっただろうか。それなのにたびたび僕は栗子の前を歩いている。ご察しの方もいたかもしれないが、

僕は他の人間同様、栗子の心の声がテレパシーによって聞こえいる。

そうでなければ背中など見せるか恐ろしい。

考えていることが分かれば一手先に動けるため、危機感がなくなると言っていい。

僕にとって栗子は天敵ではない。むしろ燃堂のほうが天敵と言える。さらに栗子は性格、考え方が僕とほぼ同じなため行動が予測がつきやすく扱いやすい。その点で言えば海藤のほうがうっとうしいし、僕の兄、斉木空助は考えている事は（テレパシー）で分かるが考え方が理解不能で予想がつかないため厄介だ。

切っ掛けはコーヒーゼリー事件、地球に巨大隕石が落ちてきた事件

の数十倍重大な事件だ。（隕石を破壊した後デオキシスがいないか探したがいなかったな）

あの時、栗子のコーヒーゼリーを食べた事を知った僕は土下座をした。コーヒーゼリーの事もそうだが一緒にプリン事件（四歳のプリンを巡ってケンカし、無人島を消滅させた事件）の事もテレパシーで謝った。前々から謝りたかったのだ。だがなぜかテレパシーは聞こえていなかったようだった。やはり怒っているのか、そうおもったが栗子は少し悩んだ後、

［分かった許すよ］

と久しぶりテレパシーが聞こえた後、

（そこまでされると怒れないな）

と心の声が聞こえた。久びさに聞くテレパシーに驚きと懐かしさがあったものの黙っているわけにはいかない。

［本当にすまない。ありがとう］

（まぁ僕は弁償なんかしないがな）

［素直に謝った上に礼を言うなんて思わなかったぞ。まぁ私のためにコーヒーゼリーを弁償してもらうがな］

この時確信した。栗子は僕の心の声が聞こえていない、と。

僕の推測でしかないがプリン事件のことを謝った（聞こえていなかったようだが）僕とコーヒーゼリー事件は許したがプリン事件は謝りも許しもしなかった栗子との差がこの結果を生んだのだろう。「病気は気から」ということわざがあるように超能力者も気の持ちようだ。（コーヒーゼリーは弁償する事にした。気が変わったんだ）

少し長く話しすぎた。話を戻そう。

栗子と燃堂がクズ（高橋の事を指す。栗子がそう呼んでいたから僕もそれに乗ろう）を連れて体育館を出た後熱血こと灰呂杵志（はいろきねし）が叫び始めた。

「皆！何をしているんだい！高橋君を応援するんだ！熱くなれよ!!」
「灰呂がそう言うんだったら…なぁ」
「あぁ俺達もやるぞ！うおおおおぉぉ！」

最初は灰呂と同じクラスだった生徒が叫びだし熱気に当てられたほぼ全生徒が叫びだした。そのため体育館は阿鼻叫喚状態だった。ただはっきりさせたいのだが愛されているのは高橋（クズ）ではなく灰呂だ。高橋（クズ）のクズっぷりが分かれば唾を吐きたい衝動に駆られるだろう。

「私の話を聞いて欲しいのであるからして」

という校長の言葉は無視された。僕だけでも同情しておいてやろう。

「おい才虎！帰ろうとするな！」
「うるさいぞ愚民の分際で。ほらこれを受け取れ」
「行ってらっしゃいませ才虎様」
「ふんっ。」

金持ちの才虎芽斗吏（さいこめとり）が椅子に座ったまま四人の黒服に御輿みたいに担がれ、一人お祭り状態のやつが体育館から消えていった。

この状況では始業式の続行は無理と判断した校長は始業式を中断、灰呂の指揮のもとほぼ全校生徒が保健室に向かおうとする。

このままでは保健室は都会の朝の満員電車のようになるだろう。大量の生徒に押し出され壁に貼り付く栗子の姿が目に見える。

そんなことにさせるわけにはいかない。

栗子は僕を天敵だと思っているかも知れないが、栗子は家族だ。父さん母さんと同じように大事に思っている（ただし空助お前はだめだ）。
それに始業式での並び順が男女混合ではなく男女分けだった場合、栗子ではなく僕が保健室に行くことになっていただろう。そう考えると僕の代わりに災難に有っているというのに僕がなにもしないわけにはいかない。

［高橋、仮病だってよ］
「ん？高橋仮病？」
「え、まじで言っちゃってんの？え、マジなの？」
「クズが！ふざけんなっ。ぺっ」
「アホらし。帰ろうぜ！ぺっ」
「ぺっ」

虫の知らせを使って真実を伝えた。
これでクズは全校生徒が認めるクズになったわけだ。それでも友達でいてくれるやつが二人もいるのだから別に構わないだろ？
後本当に唾を吐くな。ここ体育館の中だぞ。

「高橋君が仮病かもしれないだって!?でも僕だけでも　高橋の応援をしなければ！ネバギバ!!」
「俺もいくぜ灰呂」（情報に振り回されんのは柄じゃねぇ。この目で見たもんだけが真実だぜ、オラッ！）

意思の強い二人は止められなかったか。仕方ないなんとかなるだろう。僕はこの少し前から千里眼を使い保健室を観察している。
「なあ斉木。他のやつらは帰り支度を始めたぞ。…なんで寄り目なんだ？そんな事よりオレはこの一連の騒動をダークリユニオンの仕業だと睨んでいる。だがこのオレ！漆黒のーーーー」

なんかうるさいのがいるが気にするな。
それよりも千里眼とテレパシーでの情報によると栗子は今あまりの展開に混乱しているようだな。この僕が助言してやろう。精々感謝するんだな。

（どうすればいいか…）
［体温計…パイロキネシス］
（いや、突破口が見えた）

栗子は虫のしらせの存在を知っているため細心の注意を払ったが、バレずにすんだみたいだな。これでよし。後は自分でなんとかするだろう。栗子は僕と同じ超能力者なんだからな。

「ーーーーその時異次元世界から現れたオレのドッペルゲンガーが一瞬、いや刹那の時間でーーーーん？斉木行くのか？一緒に帰ろうぜ！」

帰り支度をしていると。救急車が来て栗子が担架で運ばれるのが見えた。訳が分からないよ。いやテレパシーでなにが起きたか理解はしているが。不憫に思った僕は栗子に声を掛けることにした。僕は優しいからな。

［ざまぁ］
［○ね］
（家に帰ったら彼のコーヒーゼリー食ってやる）

怒らせてしまったが僕と栗子の関係はこれが丁度いい。
コーヒーゼリーを奪われる前に僕の方からプレゼントしてやろう。
この災難な一日を少しでもマシなものにしてやりたいからな。
それにしても今回の結果に僕は納得出来ていない。もっとベスト

な形があったのではないかと考えてしまう。後の祭りだがな。まあ次があるなら今度はうまくやろう。

最後になるが某人気海賊漫画の台詞を借りて僕の話を終わろうと思う。

「出来の悪い妹を持つと兄貴は心配なんだ」

「ん、なんだ斉木？なんか言ったか？」

いい事いったつもりだったんだがな。締まらないな。

第３ｘ　蛇と幼女とΨ高のおっぱい　パート1

私の名前は斉木栗子。超能力者だ。
もしかしたら読み飛ばした方もいらっしゃるかもしれないのでもう一度自己紹介しようと思う。私としてはいくら読み飛ばしても流し読みしてくれても構わない。この小説もどきは一応ギャグだ。気楽に見ていって欲しい。
さて自己紹介だったな。名前は言った。私の特徴だが残念ながら普通の女子高生でこれといってない。
しいて上げるとすれば、ダイソーで買ったメガネ、薄ピンクの短髪で後ろの方が少しハネている、いつでも無表情なのだが今日図書委員に立候補したら、
「なんか納得ー」
「分かる。なんか図書委員って感じだよねー」
「図書委員系クール美少女キタコレ！」
と、言われたのでおそらくそうなのだろう。最後のはただただ不快だが。
そしてペロペロキャンディみたいなアンテナが二つ頭に刺さっている。ねっ普通でしょ。
自分の話はこれくらいにして今の状況を話そう。
私は今学校が終わり住宅街の道路を歩いている。少し先に四人の男子高生が歩いているな。ありゃ不良だな、関わらない方がいい。こわいなー。
「おい斉木。後ろにいるのお前の妹の栗子さんだろ？声掛けなくいいのか？」
お構い無く。
白髪の中二病、海藤瞬（かいどうしゅん）が私の双子の兄、斉木楠雄にそう話しかけるが無反応だ。どうせ「気にするな」とか考えているのだろうが、私は彼の心の声を他の人間のようにテレパシーを使っ

て聞くことが出来ない。後ろからでは見えないが涼しいほどに無表情なのだろう。ムカツク。

［なぜ僕の後を付ける］

［この先に行き付けの喫茶店があるんだ。あそこのコーヒーは絶品なんだ］

［そうか僕はこいつらに巻き込まれてラーメン屋にいく予定だったんだが僕もそこに行こう］

［来んな］

［なら僕の後ろを歩くな］

ぷふっ。お友達（笑）とラーメン屋に行くって？（更に笑）。お友達は大切にね（大爆笑）。

ああそれと前の話でさんざん後ろを取られるのはまずいと言ったが、彼の後ろを歩いているのに問題はない。彼と私は十分な距離を取っている上に流石に人前で殺ろうとは思わない。というか別に天敵ではあるが彼に殺意があるわけでもない。

私と彼、斉木楠雄は超能力者。多種多様の超能力を扱える上にハゲ頭のヒーローと同等の力を持っている（これはギャグ小説だ。少しくらい大袈裟に言っても目をつぶってくれ）。お互い危険な存在。天敵なのだ。なるべく後ろは取られたくないのだ。

とは言えだ。瞬間移動でいつでも背後に行けるのだ。本当は二十四時間いつでも危険なのだが、私も彼も面倒なのが嫌いな性格だ。面倒をおかしてまで殺したいとは思わない。だから背後を取られようと殺されるなんて事はない事くらいお互い分かっている。ただ物凄く気分が悪いが。

ふふっ。今は私が後ろを取っている事は事実。恐れ、震え上がれ！ふはははは。

「おっ、ラーメン屋はもう少し先だぜ。あそこのラーメンはマジでうめぇぜ」

アホの燃堂がアホみたいに喋っていると（私も似たような事言ったような気がするが気のせいだ）、さっきから思い詰めていた紫髪の元不良、窪谷須亜蓮（くぼやすあれん）が急に叫びだした。

「瞬！情けねぇ俺を殴ってくれ!!」
「急にどうした!?亜蓮！」
「お？殴って欲しいのかじゃあオレサマが…」
「貴様は黙っていろ！」

海藤はかなりテンパっているようだか、私はテレパシーでなぜ窪谷須がこんな事を言い出したか知っているので驚きはない。

「とっとにかく訳を話せ」
「今日の蛇の時の話だ」
「殺人竜蛇（マーダードラゴラムスネーク）な」
「あ、ああその蛇の話だ。そいつが現れた時、俺はなにも出来なかった。チキッた訳じゃねぇ。ただ蛇を相手取った事がなかった俺はどう動けばいいのか分からなかった」
「ギャハハハ、だっせぇな。おっ？」
「お前気絶してただろ」

そう今日教室にマーダードラゴラムスネークという蛇が入ってきたのだ（私の知らない種類の蛇だ）。それにより教室が騒然となった。その蛇はあろうことか私を狙ってきたので電撃で焼いてやった。その時海藤が私の前に立ってなんか言ってたがそれはどうでもいい。大食い、目良千里（めらちさと）さんが、

「それもらってもいいよね、ね？」

と言った後、家庭科室の方向に蛇を握りしめながら歩いていったが

気にしてはいけない。
話を戻そう。
「あの蛇を倒した瞬、お前に殴って欲しいんだ！じゃねぇと腑抜けた俺を許せねぇ」
「…亜蓮。このオレの封じられた力は強い衝撃で解放される可能性がある。すまない、分かってくれるな？」（友達を殴るなんて出来ないよぉ）
「…！すまねぇ、恩に着るぜ。（そうかパンピー（一般人）はそう簡単に人を殴らないんだったな。勉強になるぜ）…ただ、あれは人様の前で使わねぇ方がいい。気を付けな」（力のねぇ瞬には物（スタンガン）に頼らなけゃいけねぇんだよな。今度鍛えてやろうか）
「ジャッジメント・ナイツ・オブ・サンダーの事か！ああ心に留めておこう！」ニヤニヤ（亜蓮君は認めてくれるんだね！やっぱりボクには…いや、やはりオレには眠れる力が…！）
「おっ、早くラーメン行こうぜ。おっ」
うっとうしいことこの上ないな。
［あれが男の友情ってやつか？］
［僕に聞くな］
しかしこいつらが足を止めて話すもんだから追い抜いてしまった。彼が私の背中を見ている…。ああなんて恐ろしい、身の震えが止まらない！
しばらく冷や汗を流しながら歩いていると泣いている女の子を見つけた。
〈続く〉

第３ｘ　蛇と幼女とΨ高のおっぱい　パート２

「うぇ～ん。うぇ～ん。ひっく」

女の子は膝を抱えて座っていた。四、五歳だろうか？だがこの子の詳しい容姿などはあえて言わないでおこう。もしかしたら読者の中にロリコンが混ざっているやもしれぬ。ロリコン殺すべし。イヤーッ！

私はこの子を無視するような薄情な心の持ち主ではない。私は女の子の近くへ行き、

ナデナデ

頭を撫でてあげた。大人の対応としてはあっているのだろうか？声を掛けてあげた方がいいのだろうが、それはなんとなく嫌だ。

しばらくすると横から四人の不良が近づいてきた。くそっ、はや歩きで離してやったのに。む、武者震いが…。

女の子の様子に気が付いたのか、四人の内の一人が駆け寄ってきた。テレパシーで心の声が聞こえてくるため二人除外される。

「ねぇ君大丈夫？このハンカチを使って涙を拭いて。落ち着いたらお兄さんに何があったか教えてくれると嬉しいな」

海藤、やっぱりそっちが素なんだな。なぜ中二病なんてやってるんだ。謎だ。

海藤は私の存在に気がつくと見るからに驚愕し、お友達が見ている事にはっとした。しっかりと女の子にハンカチを渡した後少し離れてから、

「どうしたのだ人の子よ…。このオレになにがあったか話してみるがいい」

とかなんとかほざきやがった。なにがお前をそうさせるんだ。

「ぐすん。私のウインドがどっか行っちゃったの。う、うえええん」

ふむ。電信柱に犬のリードが結んであるのはそういう事だったか。すると今度は燃堂が近づいて来て女の子の前で膝を折る。嫌な予感がする。

「オレサマがその犬っころを捕まえて来てやるよ。おっ」ニカッ

また心臓が止まりそうになった。

今すぐ記憶から消したい。女の子は泣き止んだ後冷静に防犯ブザーを取り出した。ブザーが鳴るヒモに手を掛けようとするのを止めさせ、抱き締めてあげる。怖かったね。

「おい止めるんだ燃堂！お前の顔は顔面凶器なんだよ！この子も栗子さんも怖がってんじゃねーか」

「おっ？」

いいぞ海藤言ってやれ。いや、わ、私はこ、怖がってねーし。絶対に。

なんなら私が整形してやろうか？整形なんてやった事ないけど。

「よく分かんねぇけど行ってくんぜ」

馬鹿な燃堂が馬鹿みたいな発言をしてから馬鹿にした走りで遠くに消えていった。なんだあの走り方、気持ち悪い。

「へっ、なんの情報も無しに行っちまいやがった。どこまでも馬鹿なやつだ。さて…ねえ君、ウインドはどんなワンちゃんなのかな。お兄さんに教えてくれないかな？」

「うん！あのね、ウインドはねーーーー」

海藤が優しく聞いたおかげで女の子は喜び、ウインドの特徴を話してくれている。窪谷須も感心してるぞ。窪谷須がやったら恐喝みたいになっていただろうからな。
海藤は聞いた情報を元に紙に絵を描き始めた。なかなか考えたじゃないか。海藤は馬鹿ではなかったようだ。

「よし、これを元にビラを作ってばらまけばすぐ見つかるぜ」

海藤が書いた絵は三歳児の方がうまいレベルだった。あやっぱり駄目だ馬鹿だ。

「おっおう。それは瞬に任せるぜ」
「そうか?じゃ、行ってくるぜ!」

海藤も行ってしまった。あれで見つかれば奇跡だ。

「俺は地道に人に聞いて回るぜ。じぁあな」

窪谷須も多分だが無理だ。
斉木楠雄、彼は溜め息を一つ付いた後どこかへと歩き出した。
[お前も行くのか。随分優しいな。らしくないぞ]
[僕は世界一優しい人間だ。お前はその子の面倒を見てやれ]
[最初からそのつもりだった。私に命令するな]
[フンッ、可愛くないやつだ]

まあ彼も一緒になって探すのなら確実に見つかるだろう。

「ねぇお姉ちゃん。お兄ちゃん達が探してくれるからまたウインドに会えるよね?」
コクッ
「そっかぁ!えへへ」

可愛い子じゃないか。子供好きになりそう。
やはり汚ない心の持ち主の大人より子供の純粋な心の声を聞く方が数百倍ましだ。
ここで立って待つのも疲れてしまうのでベンチのある公園に移動する。

「それでね、ウインドはふかふかでね、ご飯をあげるともぐもぐ食べるんだぁ！可愛いでしょ！」

君も可愛いよ。
それに私は犬も嫌いではない。たしかに透視によって短時間でも見続けると肉と骨が見えるしテレパシーによって生意気な声が聞こえてくる。だがそれがなんだっていうんだろう。犬の毛は気持ちいいし、テレパシーも透視も録画すれば悩みは解決する。
私は女の子の話を聞いて頷いているだけだが私は幸せな気持ちで胸がいっぱいだった。そして隣には胸がいっぱいの女がいた。ってうぉい。

「あれ驚かせちゃった？とりま許してねー」

いやテレパシーで人が近づいてくるのは分かっていたが。それよりもなんだあのおっぱいは！私の標準的な胸が小さく見えるほどのビックバスト！…少し取り乱した。私の胸のサイズが負けようとどうでもいい事ではないか。

「いやさ～。この町には人探しで来たんだけど手掛かりが見えなくなっちゃってさ。それでふらふらしながらテキトーに占ってたらそこの子が困ってるって出たからさ。でなんかあったの？」

ふむ。一部疑問点はあるが見た目ほど悪い人間ではないようだ。

見た目は一言で言ってギャルだ。他校の制服を着て胸がはだけている。そして髪は金髪(地毛か染めてるのかどうか分からないが)で、肌を焼いている。化粧はしているがナチュラルメイクというのだろうか、ケバケバしてないあたり人当たりが良さそうだ。

「私のウインドがいなくなっちゃたの」
「りょ。そういう依頼は何回かあるからラクショーっしょ」
「ねえその綺麗な玉で占うの？」
「そだよ。とりま静かにしてね～」

驚いた。最近は驚きの連続だ。
いまおっぱいの頭の中は難解な文字や模様が駆け巡っている。このおっぱいもしかして本物の占い師、いや能力者なのかもしれない。

「せいっ」
ガシャン！
「この割れた水晶の破片がいい感じにこの町の地図になってるのね。それでウインドちゃんはここね」

ハーミットパープルかっ！といかスゴすぎだろ。

「わあ～ウインド会いたかったよ～」
(ご主人私も会いたかったぞ。さあなでろ)

癒される。
ペットが飼い主を飼い主と認める珍しいパターンだ。ビデオカメラを持ってくればよかった。

「とりま良かったじゃん。でも私の探し人は見付かってないんだよね～。あ～あ」
(なんでオーラ見えなくなったかな～)

私達以外の能力者は始めて見たがもう会うことはないだろう。世界は広いな。

［解決したのか。早かったな。どうやったんだ？］

いつの間にか彼が隣にいた。もう驚かないぞ。

「あれ？双子じゃね？うはアタシ初めて見た！しかもベアルックって！マジウケルんですけど！ねえ写真撮って拡散していい!?」

やめろ。

私と彼は同時にスマホを構えるおっぱいに手でスマホのカメラの部分を抑えた。

〔女の子の話と栗子の考えていた事をちゃっかり聞いていた斉木楠雄〕

ロリコンはお前だ

第４ｘ　いい加減友達を作りなΨ

私の名前は斉木栗子。超能力者だ。
私に友達はいないが、その分自分の時間を楽しむ事が出来る。
私の双子の兄、斉木楠雄も超能力者。
彼には友達（笑）がいる。彼の友達が家を訪ねてきた時両親は号泣した。それ以来私にも、

「くりちゃん。二年生になってから友達が出来るといいわね　」

と言ってくる。私に友達が出来る事を今か今かと待っているのだ。母さんには悪いが友達は作らないぞ。
父さんは私に男友達は作るなと言ってくる。何を心配しているんだか。

今日の教室は妙に浮き足立っている。「私の彼氏が」だとか「あの子に告白したらさ」が聞こえてくる。全く呆れたものだ恋愛なんてものは何が楽しいのやら。

「栗子さん。お、俺と付き合ってくれないか？」

高橋（クズ）、お前○んだはずじゃあ？
私は丁寧に全力で首を横に振ってお断りした。

「高橋。なんでいけると思ったんだ？」
「うるせぇ。…グスッ」
「うはっお前泣いてんの？うはは！」
「うるせぇって言ってんだろ！」

はあ、うっとうしい。
ん？

（わぁ楠雄君クールでかっこいいなぁ。貴方から目を離せないの。まるで王子様みたい♥）

ぶふぅっ！

［おｗうｗじｗさｗまｗｗｗ］

［黙れ（激怒）］

これは面白い。また馬鹿にするネタが増えたな（かなり大爆笑）。

恋愛脳もとい、オレンジ色のボブカット、夢原知予（ゆめはらちよ）は彼にアタックを始めたが全て先回りされフラグを折られ続けた。付き合ってやればいいのに（更に大爆笑）。夢原さんは次に何をするのか楽しみだ。

（よーし作戦を変えるわ！まずは楠雄君の妹の栗子さんと仲良くなるのよ！そして、

ホワンホワンホワン

「栗子さんの友達の夢原です！って同じクラスだから分かりますよね？」

「もちろんだよ、知予。栗子と仲良くしてもらってありがとう。もし良かったら僕とも仲良くしてもらっていいかな？ニコッ」

ジャスティススマ～イル

こうなるのよ！完璧だわ！）ウンウン

なぜだ。理解不能理解不能理解不能。

とにかく夢原さんとの友情フラグを折るのだ。

（あれ？なんでうまくいかないの？…まあいいわ。栗子さんは諦めて今は楠雄君よ！）

よしあっさり諦めてくれたな。少し肩すかしだがこれでいい。これがベスト。ふふっ、彼とうまくいくことを祈ってやろうじゃないか。

学校が終わると何故か晴れていた。不思議に思ったが好都合だ。行き着けの喫茶店に行くとしよう。

此処だ。純喫茶　魔美。週に一度。前に彼にバレてしまったので彼と被らないようにここに来ている。ここのコーヒーは絶品で当然コーヒーゼリーも美味しい。この日を楽しみにしていたのだ。だが、

「あれ？栗子ちゃんってああ！」

転んだ拍子にコーヒーゼリーをピッチャーの投球さながらのスピードで飛んでこなければもっと楽しめた。

私は口でキャッチする事も考えたがその考えは捨て、器をまずキャッチしてからコーヒーゼリーに負荷を掛けないように捕球する。

「栗子ちゃん、ごめんなさい！だいじょう…ってあれ？何もなかったように食べてる。なんで？」

まあ早く食べれたと考えて許そう。

「すみません、お客様！お詫びの品をお持ちしますので少々お待ち下さい」（あれ？また食器を割ったのかと思ったが違うのか。なあんだ。じゃあお詫びの品はシュガースティックでいいか）

接客なめてんのか？別に怒っているわけではないのからいいけど。

「さっきはほんとごめんね。私昔っからそそっかしくって」

別にいいんだけどどうせならメジャーリーガーを目指せば？
店長が本当に持ってきたよ、シュガースティック。しかも一本。コーヒーではなくコーヒーゼリーを食べてるのに。
「あの良かったらそれ私にくれないかな。私この店のシュガースティックほとんど食べちゃって、私はシュガースティックを見る事も禁止されちゃってさ。あはは」
この子も馬鹿だったか。私は手の平を前に出して食べるようすすめると喜んで口にサラサラと入れる。少し遅れたがこの子は、大食いもとい、赤茶の髪に二つ結い、目良千里（めらちさと）さんだ。何故大食いかというと、
「栗子ちゃん。私がバイトしてるの黙っていてほしいの。私の家貧乏でこれの他にも新聞配達に…」
そう貧乏が原因である。今も必死に自分のバイト先を言っているがいくつか非合法なものが混ざっている。流石にやめさせるか、元を潰そう、物理的に。
「ねっ？お願いね？」
別に言ったりしても私に利益が有るわけではないので言うはずがない。それよりもいいアイディアがある。
「ねぇ頭に付いてるキャンディ外してどうしたの？もしかして私にくれるの？そうなんでしょ？ねえ！」
違うから、その顔をやめろ。
私は初めてマインドコントロール使う事にした。内容は「ＰＫ学園の生徒がバイトをするのは不自然ではない」だ。これくらいなら危険

なマインドコントロールと言えど問題にはならないだろう。

「ねぇなんで？なんでキャンディ元の位置に戻すの？私にキャンディくれないの？」

後で買って上げるから本当にその顔やめて下さい、お願いしますから。

「…っは！また私失礼なことを！重ね重ねごめんね？っあ、帰るの？また何時でも来てね。ありがとうございました！」

カランコロンカラン

ったく、リラックスしに来たというのに随分騒がしい店だ。だが悪くない気持ちだ。来週また来よう。

（いらっしゃいませー。あら松崎先生）

（頑張っているな。コーヒー一杯くれるか？）

（ありがとうございます。はい、今すぐ持ってきますね。…。はい、コーヒー一杯持って来まってああ！）

（ぐわあああぁ!!）

今のは聞かなかったことにしよう。

次の日

なぜこうなった？

「ねぇくりっち～聞いて～。昨日出会った彼氏が最低で一日で別れちゃたよ～。どこかにいい男いないかなあ」（斉木楠雄の方をちらちら見る）チラッチラッ
「栗子ちゃん本当何時でも喫茶店に来てもいいからね。それで（指をお金のポーズにしながら）これ、お店に落としてくれたら嬉しいなあ」グヘヘ

頭を抱えたい気分だ。両サイドを固められて逃げる事が出来ない。くそっ。

〔あれれー。もしかしてもしかしてその子達はお前のお友達なのかなぁ？（腹がよじれるほどの爆笑）〕
〔黙れ（憤怒）〕

こんなはずじゃなかったんだ。いや違うぞ。この二人は友達じゃないんだ。断じて違う。

〔この日の夕食。斉木楠雄は斉木栗子に友達が出来たとチクった。両親は号泣した〕

第５ｘ　苦手な熱血とセリフΨ多と図書委員

私の名前は斉木栗子。超能力者だ。
そして隣を歩いているのは私の双子の兄、
斉木楠雄、私と同じく超能力者だ。
今は斉木楠雄、彼と肩を並べて登校中だ。仲がいいというわけじゃ決してない。肩を並べるのには理由があるが、これは前に言ったが母さんの命令だ。無視することも出きるが母さんが傷つくのでしない。
今日は服装検査のようで校門に松崎先生が立っている。私の頭にはアンテナのような物が刺さっているが問題ない。斉木楠雄、彼が昔マインドコントロールで「頭にアンテナが刺さっているのはおかしくない」的な暗示を全人類に掛けたからだ。
なので問題なくスルー出来

「おい斉木栗子。スカートの丈が短いぞ。直せ！」

マインドコントロール発動！「ＰＫ学園の女子はスカートが短くても構わない」

「ん？いや問題ないな。すまなかったな」

よし。
［おい勝手に何してんだ］
ナニモキコエナイネー。

時は流れ昼休みの時間だ。
今日は前に図書委員の集まりで聞いていた新しい本が届く日だ。玄関に置いているから二人で協力して図書室まで運んで欲しいという話だったが、バックレたな、あのアゴ。
まあいい、さっさと運んでしまおう。二つの箱を重ね持ち上げた。結構な重量だが私なら軽々持てる。箱を持って廊下に出たと同時に、

「やあ斉木さん。大変そうだね。僕が運ぼうか？」
熱血、赤い髪のツンツンヘアー、灰呂杵志（はいろきねし）が声を掛けてきた。灰呂は困っている人を見ると積極的に手伝う優しく熱いクラスのリーダーポジションの人間だ。だが、
「さあ！ここまでは君が運ぶんだ！出来る、出来る！熱くなれよ!!!」
この様に時々熱暴走する。
「僕は感動している！君一人で図書室まで運べたね！どうだい、素晴らしい達成感だろう!!」
なんなんだよこいつ。最後まで手伝わなかった。
しかもここまでずっとでかい声で応援しやがって。灰呂の熱気にやられた生徒が一緒になって応援しだすし、到着すると拍手喝采だ。目立ちたくない私にとって拷問だ。
「僕も負けてられないね！それじゃ斉木さん、またね！」
ああどっかに行けよ、あっついなあ。灰呂は全く悪意なくこういう事をするから困る。
図書室の中には三人しか本を読んでいる人がいなかった。まあそんなもんだろ。その中には意外にも元不良、窪谷須がいたが、なるほど、不良は「はだしのゲン」を読みに来るもんな。
図書室に入ると三人の内の一人が私に気づき、二ヤつきながら話しかけてきた。
「こんにちは斉木栗子さん、おっとあなたと面と向かって話すのは初めてでしたね。自己紹介しておきましょうか。私の名は性は明智（あけち）、名は透真（とうま）と申します。特徴はこの茶髪とおかっぱ頭

でしょうか。見て分かると言いたい気持ちはお察ししますがお気に入りのヘアースタイルでしてね。口に出して言いたいんですよ。趣味は人の噂を集めることでしてはっきり言いますと斉木栗子さん、あなたにこうして話しかけているのは情報を仕入れたいからなんですよ。所で斉木栗子さん、あなたはその重たそうな箱を持ってきましたね。私が予想するにその中には新しい本が入っている。つまりあなたは図書委員であると推理できます。はは、実は斉木栗子さん、あなたが図書委員に立候補するのは見ていたんですよ。同じクラスですからね。ではなぜこんな回りくどい話をし出したかと言えば私はミステリーが好きだからでしてね。斉木栗子さん、あなたはどうです？少なくとも図書委員に進んで入るくらいですから本が好きなんじゃないかと推理しています。おっとまたやってしまいましたね。ミステリー好きが皆こうだなんて思わないでくださいね。私はミステリー以外も好きですよ。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」と「羅生門」がお気に入りですね。「蜘蛛の糸」は悪人でも良い部分があればチャンスはある、「羅生門」は人は追い込まれると悪の道に走ってしまうそんな話ですね。対極的ですよね。とても考えらされて私は好きですね。と言ってもさっきまで読んでいたのは芥川龍之介でもミステリーでもなく漫画を基にしたノベライズなんですけどね。そうです私は漫画やアニメも見るんですよ。知ってましたか？クレヨンしんちゃんに出てくるしんちゃんの好物「ちょこび」、あれは最初「コア○のマ○チ」だったんですよ。どうです、知らなかったでしょう？所で私って原作でもよく分からないキャラなんですよね。投稿者もどう扱えばいいのか困っていますが文字を埋めることが出来て喜んでいましたよ。それでですねーーーー」

文字、多いな。絶対読者は飛ばすぞ。というか男のくせに「私」っていうな。私とかぶって面倒くさくなるだろ。

明智の心の声は更に沢山の言葉で埋め尽くされているため、読みにくい。

私は指を下にしてちょんちょんっと動かし、ここは図書室だから

しゃべるなとアピールする。

「そうですよね、ここは図書室。静かに話さなければいけませんね。うっかりしていました。」

そうだけど、そうじゃねえよ。

「そうだ一番話したかった内容がありました、いやこれまたうっかりしていました」

そう言うと私に顔を近づけた。明智は目を見開いているから不気味に見える。

「君の兄、くすお君は超能力者ではありませんか？」

…まさかこいつ。

「小学校にいたころくすお君とは同じクラスでした。くすお君はとても不思議な力を私達に見せてくれましてね。今思い返してみますとあれは超能力だったのではないかと考えたのですよ。ああくりこさんあなたとも少しだけ話したことがありますよ。私を覚えていないのも無理はありません。くすお君とくりこさんは仲が良くなくて、くりこさんにくすお君の話をすると怒りだしてそれからは何を言っても無視されるようになりましたから」

そうだ、かすかに覚えているぞ。こいつ。

「ですが今は仲直りしたのでしょう？昔もくすお君とくりこさんは一緒に登校していましたが、今は昔のような険悪な感じではないですから」

こいつよく見ているな。今までいないタイプで危険なやつだ。

「それでどうなんです?あなたの目から見て、くすお君は超能力者だと思いませんか?」

私は黙って横に首を振った。

「そうですか。これ以上仕事の邪魔をしてはいけませんし今日はここまでにします。それではまた教室で会いましょう」

まだ私に疑いの目は向いていないのが救いだな。もうすでに彼に絡んだのかもしれないが一応報告してみよう。

第６ｘ　休日　Ψ出発？リフォーム編

私の名前は斉木栗子。超能力者だ。
そして私には双子の兄がいる。
名前は斉木楠雄。同じく超能力者だ。
ところで私は一応女性だ。読者の中には「お前の女要素って「私」ぐらいじゃないか。フザけるなあぁぁ！」とお考えの方もいらっしゃるだろう。でもこれは仕方ないのだ。
この小説もどきのタグをは見ただろうか。その中の一つ、「性転換」に注目して頂きたい。そう、私は元男なのだ。
あ、転成とかではないぞ。

両親から聞いたまだ私と斉木楠雄、彼がまだ母さんのお腹の中にいた時の話だ。

「なんだこれ？スライムにクリボー？」

お腹の中の赤ちゃんの様子を見れる機械のモニターにはゲームを代表する雑魚キャラの他に、勇者と魔王、ひげのオッサンと亀の王のシルエットなんかが映ったそうだ。
まだ話してなかったが超能力の一つにトランスフォーメーション、日本語で言うなら変身能力がある。これをつかえば動物だろうとポケモンだろうとなれる。もちろん性転換も出来る。変身に時間が掛かるがな。

「故障…ですかね？」
「あら？あはは！今日は変な顔に見えるわ！面白いわね。あなた♪」
「そうだね、ママ♪。…すみません、妻もこう言ってますのでこのままでいいです」
「そうですか？そう、仰るのなら…」

こうしてお気楽な母さんから生まれた私と彼は二人とも男の子だったそうだ（彼は一瞬、女の子だったらしいがトランスフォーメーションは戻るのは一瞬なのだ）。だが、私は、

［君は男の子として産まれたんだね。ならボクは女の子になろうかな。これからはボクじゃなくてワタシだね］

とテレパシーで話した次の日の朝には股のアレはなくなっていたそうだ。

後日談が三つある。

女の子になってから名前が栗子に変わった。男の子のままなら「栗雄」というヒゲオッサンストーリーの初めの相棒と同じ名前になっていた。

次に、私が女の子になって父さんはめちゃくちゃ喜んだそうだ。零歳児の頃から今までテレパシーで理由は分かるが理解は出来ない。

そしてもう一つ。私は本当は男だが、長い間女性だったせいか、男の体になるのに二時間掛かる。この事から私は完全な女性となった事が分かる。

昔話はこれくらいにして休日を楽しもう。さあ気合い入れて「スペランカー」やるぞ！

「クリえも～ん。クスえもんといっしょに模様替え手伝って～！」

なんかこう、さあやるぞ！と意気込んだ後にみずをさされるとクソダルくなるな。

まあいい、それなら私にも考えがある。人差し指と親指をコスコスこ擦り合わせる、俗に言う「おねだりのポーズ」だ。

「え～…。しかたないなぁ、いくら欲しいんだい？」

［おこずかい五千円］
「おこずかいを三千円から五千円にアップってことかい？う～んしかたないなぁ。今回だけだよ？」
［違う。おこずかい三千円プラス五千円。払えばしっかり働いてやるさ］
「えええぇ～～！高いよ!!。…。分かった、分かったよぉもう、その代わりちゃんとやってよね!!」
［分かっている。女にだって二言はない］

よし、これで近日発売のイカゲーの新作が買える。スペランカーも面白いが最新のゲームもたまにはやりたいからな。

「あれ？楠雄はどうしたんだ？」
「くーちゃんはコーヒーゼリーを食べながらテレビを観るのに忙しいって～」
「ったく楠雄は怠け者だなぁ」
［聞こえてるぞ］
「でもこっちにはやる気に満ち溢れた栗子がいるからな！たのむぞ！匠！」

私は緑色の自爆するモンスターではない。
斉木楠雄、彼はこういう事に関しては百円マンとか訳の分からんものにならないとやらないからな。
だが私は金をもらう以上しっかりやる。まずはなにをするんだ？
仕事の内容は離ればなれの夫婦の寝室を一つにして欲しいというものだ。
念力でベッドを軽々浮かせもう一つのベッドのある部屋まで運ぶ。運んでる途中父さんが浮かんでるベッドに乗って遊び始めた。
私は何も口を出したりしないが、はしゃぐ父さんを養豚場の豚を見る目で見ていると、ゆっくりとベッドから降りてから母さんの胸に飛び込んだ。

「ママ。栗子がいじめるよぅ」
「よしよし」

どうした中年、ガキみたいに遊ぶのはもういいのか？
運んだ後も窓から出られないだの、部屋からでられないだの、壁を破壊しろだの、誰が買ってきたのか分からない置物を置いてみようだの注文が多かったがそれを予測しての五千円だ。だがそろそろいい加減にして欲しい。

「う～ん。やっぱり広すぎるなぁ」
「そうねぇ壊す前の方がよかったかしら？」

私は盛大に溜息を吐く。

「栗子。お前さっき壊した壁直してくれ」
[私にはもう無理だ。楠雄に頼め]
「あ～そうだっな。お～い楠雄～。…いや。助けて～百円マ～ン！」

ガチャ
「わあ、あなた！百円マンが来てくれたわ！」

なんだこの茶番。
というかしれっと零が増えて千円マンになってるぞ。せこいな。
「百円マン。…え？千円マンになったって？もうこの際なんだっていいよ！壁を直してくれよ！」

面倒くさそうに千円マンはすたすたと壁のあった所に向かうと手の平を前に向けた。

［壁よ…元に戻れ！］カッ
ビュオッ
「壁がキズ一つなく直ってゆくぞ！」
「わ～い、やったわ！あなた　」
「そうだね、ママ！あれ？ここにあったベッドは？」
［家全体を一日戻した。移動した家具も元通りだ。どうでもいいが千円払えよ］

ガックリとした両親を尻目に千円マン、いや、彼は颯爽と部屋から出ていった。
そうか家全体一日戻ったか。今朝食べたコーヒーゼリーも戻ったのか？確認して来よう。私も部屋から出ようとすると背中から声を掛けられた。

「待て栗子。やっぱりやめよう」
「そうよクリちゃん。今日一日を無駄にしたくないもの」

私はさっき以上の溜息を吐いた。

［これで最後だからな］
「ああ、頼むよ！」

私は手を胸に当て体内時計を五十秒だけ戻す。グンッ
ドオオーーｚ――ン
すると世界全体の時間が五十秒だけ戻る。そこには彼が家全体を一日戻す前の壁の壊れた部屋があった。
私は彼の「物に対する一日戻し」が出来ない代わりに「時の流れに対する計一分戻し」が出来る。私は（一分限定の）時をかける少女なのだ。ぶっちゃけるとこの能力、ジョジョ七部の「マンダム」を元にしている。違いは計一分、つまり六秒、十秒、二十秒と刻んで使った

時合計で一分以上戻す事が出来ないところにある。一日経過するとリセットされ、また計一分戻せるようになる。今回十秒残したのは万が一のためである。

「やった、発現したぞ！」
「わ～い、やった～♪」

戻した後の自分以外の生き物の記憶も基本戻るが、記憶を残すかどうかの調整も出来る。今回記憶を残したのは両親と彼だけだ（しっかりと千円請求されるだろう）。

ふんっ。これで私の五千円分の仕事は終わりだ。後は勝手にやってくれ。さて私は一仕事した後のコーヒーゼリーだ。働いた後では絶品だろう。

第７ｘ　休日　Ψ登場！鳥東零太編

テーテッテテテッテーテテトゥ、テーテッテテテッテーテテトゥ、
テーテテテッテテテトゥ、
タータータータータータトゥ、タータータータータータトゥ、
ズダダダダダダ、
テーテッテテテッテーテテトゥ
タンタンタ、タンタンタ、タン→タン←タン♪
ふむ、やらてれしまったな。しかしスペランカーは興味深い。主人公、スペランカー先生は、強靭、無敵、最強な私とは正反対な虚弱体質でありながら、勇猛果敢に洞窟を進んでゆく。なんというかこういう勇気のある男に惹かれてしまう（恋愛的な意味ではなく人間としてだ）。さあ行こう二週目の金銀財宝は目の前だ！

コンコンガチャ
［おいさっきからうるさいぞ］

どうやら頭の中で流れていたスペランカーのＢＧＭとやられた時の効果音が私が無意識の内にテレパシーで送りつけていたようだ。これは私に非がある。

［分かった今日はもうやめよう］
［ところでそのレトロゲー、面白いのか？］
［後で貸そうか？］
［いや、今やろう。今日は特に何もないし］
「ちょちょちょ、ちょっと待って下さいよ！オレの話聞いてくれるって言ったじゃないっすかー！」

私の双子の兄、斉木楠雄、彼の後ろに誰かいるが知らない人のようだ。

「師匠達にお願いがあるって玄関で話したばっかりじゃないっすか〜」

［何の話だ］

［すまない、昨日手紙が来たんだ。まさか次の日に来るとは］

何なんだいったい。いや紫髪のバンダナが何をしに来たかテレパシーで分かるが。

「改めて自己紹介するっす！オレ、鳥束零太（とりつかれいた）っていうもんっす。前にも会ったことあるっすけどもちろん覚えてるっすよね！」

いや知らない、誰？

「いやぁこうして話せる機会を貰って嬉しいっす。お二人は霊達の間で有名人っすからね。いい忘れてたっすけどオレ霊能力者なんすよ。寺生まれっすからね！」

寺生まれ関係なくね？というか信じられない。

［なに言ってるんだ？こいつ］

［そうだな精神科に連れていこう］

「ひどいっすよ！信じてくれていいじゃないっすか！」

鳥束はこの部屋にも霊はいるとか生まれたときから霊が見えるとか自慢気に話すがそれで信じられるという訳でもない。

本当はこいつが霊能力者かどうかなんてどうでもいい。それは問題じゃない。

「まだまだ霊能力についてはありますが、それよりも！お二人は超能力が使えるんすよね。すごいっす！」

こいつは私と彼を超能力者だと確信している。明智のような「疑い」ではなく「確信」だ。さっき言ってた霊達の間ではってやつか？やはりこいつは霊能力者なのか？

「そこで！超能力者のお二人に、…いや師匠！オレに超能力を教えて下さい！お金のために、そしていやらしい事に使うっす！」

そう言って鳥束は五体投地…ではなく土下座をする。

溜息が出てしまうな。なんと言うかいっそ清清しいやつだ。見てて気分が悪いよ。

テレパシーで心の声を聞く限りこいつは相当エロいやつのようだ。さっきからイスに座るスカートを履いた私を

土下座しながら見上げてくるし。前話で話したが私は元男だが、だからといって見せていいなんて事はない。なんとなく嫌だ。

「出来れば栗子さんにお願いしたいっす。楠雄さんはサブでお願いします」

私はもう一度溜息を吐いた。これには彼も呆れたようだ。鳥束には超能力がどれほどクソか、一つ一つ例を上げて説明する。

「「透視」数秒見続けるだけで肉と骨…。流石のオレも萎え…、いや！一秒でも二秒でも裸が見れるならいいっす！つーか楠雄さん。今栗子さんを見ると裸が見えちゃうじゃないっすか！いいんすか？兄妹で!?」

［子供の頃からずっと見ていると見慣れてしまうもんなんだ］

「そんなのずるいっす！理不尽っす！」

［知るか］

そう私も他人の裸を見ようとなにも思わない。そんなの何時もの

風景だからな。後、彼には裸を見られている訳だがこれも今更だ。
「はあ、超能力ってのもあんまりいいもんでもないっすね」（……）
ん？
「でもオレは諦めないっすよ。それはそうとお二人さん喉渇きませんか？なんかテキトーにコンビニ行って買ってきます！それでは！」
そう言って家から飛び出して行った。
…鳥束はテレパシーについてしっかりと理解しているのだろうか？
鳥束は声が届かない位置まで行くと、なにかにお願いを始めた。すると鳥束は豹変し、「空気抵抗があぁー」などと叫んだ後どこかの方を真剣に見始めたかと思うと急にニヤつき始めた。
私はその様子を千里眼で見て、テレパシーでしっかり聞いた後、俯き続けた。そうか鳥束、お前が霊能力者だって事、信じよう。
その様子を彼も見て聞いたのだろうが、なにも言わない。俯いた私を見てもなにも言ってこない。
鳥束が帰って来た。
「買ってきましたよ。お二人さんがコーヒーゼリーが好きだって霊達から聞いてたんで一緒に…。ど、どうしたんすか？」
私は俯いたまま鳥束にテレパシーを送る。
[…私に何か言うことはないか？]
「な、なにを、い、言ってるんすか？」
私は顔を上げ軽く笑って見せる。

［大丈夫。怒ったりはしない］

鳥束は私の様子を見て何かを感じ取ったのか、冷汗を流し始めた。

「す、すみませんでした!!出来心だったんです!!」

私は溜息を吐く。三回目だぞ、まったく。

鳥束は家を飛び出した後、霊に体を貸す代わりに、あろうことか私のスカートの中の下着の色を聞いていた。なぜ私なんだろうか。銅像じゃだめなんだろうか。

［二度とやるな。私を含め女子に対して同じ事をしてみろ、テレパシーですぐ分かるからな。もしやったら瞬間移動で密室に連れ込んだ後…］

私は立ち上り、今まで座っていたイスを持ち上げ両端を持つと一気にプレスした。

ゴシャッ

{こうなる。いいね？}

「アッハイ」

私は胸に手を当て三十秒時間を戻す。一瞬にして何事もなかったように壊れたはずのイスに座る私に鳥束はビビる。

［鳥束君、今日は帰りなさい］

「しっ失礼しましたっす～！」

急いで家から出ていく鳥束。これで真人間になるといいが、これくらいで心の折れるやつじゃないだろうな。

私は四回目の溜息を吐いた。

〔後日、スペランカーを貸りた斉木楠雄〕

なんだこれは!?クソゲーじゃないか!!（歓喜）

第７ｘ　分岐点　Ψ登場！鳥束零太編

私は顔を上げ軽く笑って見せる。

［大丈夫。怒ったりはしない］

私の顔を見た鳥束はさっきまでの緊張した様子から一転、何時ものへらへらした態度に戻った。

「そっすか？いやー流石は超能力者っすね！どうせテレパシーでバレてるんなら白状するっす。栗子さん、ずっと貴女のことエロい目で見てたっす。ぐへへ」

知ってる。

私は軽く笑いながら話を聞いているが、内心は違う。私が聞きたいのはそんなゴミッカスな言葉ではない。

「それで思い付いたんすよ、この部屋にいる霊なら栗子さんの体の隅々まで知っているんじゃないかってね！」

前に話した通り私は元男（今は完全に女性）だ。つまり精神的には男なのだから鳥束がエロい事を考えるのは仕方がないと許せる。

それに子供の時から斉木楠雄、彼には透視で裸を見られながら生きてきた。だから今更誰かに裸を見られても恥じらいなどない（とはいえ目立ちたくないので周囲の目には気にするが）。

とはいえ…、だ。

「この部屋にいる霊を連れ出して体を貸す事を条件に情報を引き出せたんすよ。いやーそれにしても安物とはいえ白いパンツっていうのはポイントたかーーーー」

そんな私にも限界はある。
理性を捨て、本能で体が動く。

〔斉木楠雄視点〕
空気と化していた僕だがさっきから鳥束のゴミクズ発言も栗子の心情もしっかり聞いていた。僕が動かざるを得ないか、まったく、これは貸しだからな。
栗子は表情はそのままにゆっくりとした動作でイスから立ち上がる。
片腕を上げしっかりと拳を握る。
鳥束は不思議そうな顔で見ているが僕は（栗子にはバレていないが）テレパシーで次の行動が読めている。
シュンッ！シュンッ！
瞬間移動を使い一瞬で鳥束の前に現れる栗子。そのほぼ同時に僕も同様に瞬間移動で鳥束の前に移動する。
ガキイイイン！
栗子が光速で降り下ろしたグーをパーで受け止める。その時普通の人間から出るはずのない金属音が響いてしまったな。ご近所に不信に思われないだろうか。
さっきまでキレた母さんのような鬼の顔をしていた栗子は何時もの無表情に戻っている。少しは冷静さを取り戻したのだろうか。

［お兄ちゃんどいてそいつ殺せない］

どっかで聞いた台詞だな。やれやれだ。

［斉木栗子視点］
［おそろしく速い手刀。僕でなきゃ見逃しちゃうね］

どっかで聞いた台詞だな。…ハァ。

[…手刀じゃないんだがな]
[細かい事は気にするな。それより少しは冷静になったか?僕の目の前でチミドロフィーバーしようとするな。迷惑だ]
[……すまない]
[分かればいい。鳥束(それ)の後始末はお前がやれ。僕は自分の部屋に戻る]

そうテレパシーで言った後、彼は後はなにも言わず私の部屋の向かいに消えた。今回は彼に感謝しなければならないな。彼が止めなければリアルワンパンマンになっていた。超能力でごまかしもやり直しも出来るがあまり気分の良いものではない。
はぁ、あーいかんなあ…こんな…いかんいかん。あまりの事に泡を吹いて気絶している鳥束を見て流石に反省する。
私もここまでするつもりはなかったのだが、鳥束は一切謝罪の言葉を言わなかった。どんな形であれ謝れば許していたのだが何時までもへらへらとした態度に激しい怒りを抱いてしまった。
せめて鳥束を鳥束の寺まで運ぼう、サイコメトリーで服に触ればこいつの寺の場所が分かる。本当は家から放り出したい気分だが、やり過ぎてしまったのは私に非があるからな。
最悪の気分だ。早く鳥束を寺に捨てた後コーヒーゼリー食べたい。

第８ｘ　休日　Ψ初の恋心？　照橋心美編

麦茶はうまい。
夏は麦茶がうまい、なんて言う人もいるが冬の麦茶もうまい。
当然のように今の季節の春だってうまいのだ。
麦茶が切れた事に気付き買いに行こうと家から出た私の名前は斉木栗子、超能力者だ。
そしてテレパシーを使っての居場所の感知が出来ない存在の彼の名前は斉木楠雄、同じく超能力者で私の双子の兄だ。家の中には居なかったな。麦茶買ってこい、と言ってやりたかったのだがな。
我が家では麦茶は家族四人（もう一人いるが家にいない）とも好きだ。麦茶を作って冷蔵庫に入れておけば一日でなくなる。そんな我が家には関係ない話だが麦茶は冷蔵庫で保存する期間は二、三日が目安だ。それと常温で長時間放置するのは腐ってしまうためよろしくない。案外麦茶とは繊細な飲み物なのだ。
麦茶の話はもういいだろう。
私は安物のベルト付きベージュ色ズボンと安物の半袖シャツというやる気の感じられないファッションで外出している。どうせスーパーに麦茶やらコーヒーゼリーやらを買いに行くだけなのだから別にいいだろう？透視のせいで街を歩く人皆スッポンポン状態になる私にはファッションなんてものは興味が湧かない。
人通りの多い道を抜けしばらく歩いていると、車道を挟んだ向こう側の歩道に斉木楠雄、彼を見つけた。彼の格好は私と同じだ。これは恥ずかしい、絶対に合流したくない。どうやら彼が先に麦茶を買いに行っていたらしい。無駄足だったか？いやコーヒーゼリーだけでも買いに行こう。そう思い、気にせず歩いていると。
「やっほ～、斉木君。偶然歩いてるのが見えたから会いに来ちゃった♥。なにしてるの？」（冴えない男に才色兼備、超絶美少女の私が声を

かけてあげる、なんて優しいの？さあ、斉木……えーとぉ……そう！くにお！おっふしなさい!!）

ぶふぅｗｗｗくにおｗｗｗ（心で笑って顔は無表情）。

可愛らしい笑顔で彼の対面に立つあの子は同じクラスの女子、照橋心美（てるはしここみ）だ。とても綺麗な紺色のロングヘアーで、美少女を絵に描いたような顔と容姿をしている。今着ている春物の白のワンピースは美少女っぷりを増幅させている。照橋さんならなにを着ても似合うだろう。どのくらいの美少女かといえば私ですら紹介文がべた褒めになってしまうほど、と言えば分かって頂けるだろうか？

そんな照橋さんに対して彼は、

こくっ

会釈。

当然と言えば当然だ。照橋さんが美少女であろうと透視を使えば理科室の肉体標本に見えて、テレパシーを使えば（彼氏にするなら最低でも年収四千万は稼いで奴隷のように尽くしてくれる人じゃなきゃね♥）なんて聞こえる人間に好意を持つのは難しい。

（はあ!?会釈って、学校の廊下ですれ違った先生にだってもっといい反応するわよ！そこら辺の女じゃなく私が声をかけてあげたのよ、普通嬉しさのあまり嬉し泣きとか嬉し鼻水とか嬉しよだれとかが溢れておっふでしょ、普通！）

普通ってなんだ？後さっきも声の声で言っていたが「おっふ」ての も分からない。

そこからは気を引きたくて何事もなかったように歩く彼にもう一度話しかけたり、もしかしたら彼が自分の幻覚を見ていると勘違いしているのでは？と考えたようで自分が幻覚ではない事を証明するため触ってあげようと奮闘する照橋さんと、それを完全に無視する彼を眺めていた。

端から見ているとこれはかなり面白い。
今だってやけになった照橋さんが両手を振り回し、それを上半身だけで避ける彼は、まるでエドモンド本田が突っ張りをしてそれを避けるマトリックスみたいで笑える。あーあ、私の目に録画機能つかないだろうか。

（いい加減触られなさいよ！……それにしても幻を見るくらい私の事が好きなのね…♥）

普通ならガン無視されて凹むところだが、照橋さんのポジティブさは私も見習い……いや、別にいいや。
彼もここまで照橋さんがしつこいとは思わなかったんじゃないだろうか。……よし。
ここは私が助けてやろう。
ここで貸しを作るのもいいだろう。私は適当な店のトイレに入ってから彼にテレパシーを送る。

［おい、くにお、聞こえるな？］
［誰がくにおだ。今面倒に巻き込まれているのは分かっているんだろ］
［助けてやろうか？報酬はお前の持ってる袋の中のコーヒーゼリーでどうだ？］
［自分でなんとか出来るんだがな。……まあいいだろう。頼もうか］
［よし、まずは人混みに紛れろ。合図は私が出す］
［分かった］

私は目を寄り目にして千里眼を使う。うむ、どうやらちゃんと人通りの多いエリアに入ったな。
そしてその片手間私は家からから「ある物」をアポートする。アポートは遠くにある物を手元に持ってくる能力。デメリットとして

持ってくる物と同価値の物を持っていないといけないが財布を持っている私には問題にならない。
人混みが激しくなって彼と照橋さんが少し離れたな。この時を待っていた。照橋さんから見て彼が人で死角となる一瞬のタイミングで……。
［今です！］

「ちょっとー置いてかないでよ斉木く～ん。あっやっと触れた！やった！……ふふん、これで分かってくれるわね斉木君？私は幻なんかじゃない。本物の照橋心美よ」（うふふ、最高のおっふ、期待してるわ♥）

斉木君？違うな。

「ほらもう一度しっかり見れば幻じゃないことくらい分かるでしょ。斉木く…ん……え？」

今貴女が触れているのはくにおではなーい、この栗子だ！
私が使ったのは瞬間移動とアポートの併せ技、その名も、位置交換だ。瞬間移動を二人同時にするのとは違いなんの誤差もなく自然に入れ替わる事が出来る。それと同じ服を着ていたのも更に自然になったな。位置交換のメリットは瞬間移動よりアポートの面が強いため三分間瞬間移動が出来ないというデメリットがなくなる。デメリットは使い道がほとんどないと言ったところか。

「そんな…たしかにさっきまでくにおの方だったのに。……それに女子のくにこさんが私を幻だと思うはずないし……」ボソボソ

誰だ、くにこって。
ただまあその点も抜かりはない。私は軽く頭を傾げてから、はっ、と思い付いたような顔をしてから耳にしていたイヤホンを外してみ

せる。もちろん演技だ。そう、さっきアポートして持ってきたのはゲームをする時に使っていたイヤホンだ。実は私は携帯もウォークマンも持っていないためイヤホンの先には何もついていない。

（あーそっか音楽を聞いてたから私の何を言ってるか分からなかったのね、会釈も納得ね。……えっじぁなに？女の子に対して男子を誘惑するような事言ってその上身体に触ろうと必至になってたって事？端から見たらかなり痛い美少女じゃない！）

そうだな。ただ本当は男子に対して体を触ろうと必至になっていた訳だがそれでも痛い人に変わらないな。

照橋さんは顔を赤くして俯いてしまった。流石にこのまま立ち去る訳には行かないよな。イヤホン外すふりまでしてしまったし。

（こんなことになったのは全部斉木くにお！あいつのせいよ！……でもなんでくにこさんがくにおに見えたの？うーん……あ、）

ーーーーー（幻を見るくらい私の事が好きなのね…♥）ーーーーーは？

（え？そんなまさか私が？ううんそんなはずない、……でもなんなのこの気持ち）

いいや違うぞ照橋さん。人違いなんて双子にはよくある事だから、あはははは。…首を横に振って否定したい衝動に駆られる。

「さっきはごめんね？私、くにこさんを偶然見つけて、その、少しお話がしたいと思ったの。もしよかったら美味しいケーキが売ってる店があるんだけど、どうかな？」（待ってなさい！今回失敗したぶん、くにこさんから斉木くにおの情報を手に入れておもいっきりおっふさ

せてやるんだから！べ、別に気になったとかじゃないんだからね！）

これ夢原さんと同じパターンだ。なんてこった。

後で「くにこ」ではなく「栗子」だと伝えるとまた謝られた。謝られるのは心が痛むのであまり言いたくなかったのだが今後のためだ。ただ彼の名前を何度も「くにお」と、言っていたが訂正しなかった。ざまぁ。

〔位置交換した後の斉木楠雄〕

くそっ、まさか女子トイレにいたとは…。

第９ｘ　山のΨ奥にある秘湯に行こう！

「なあ栗子。久しぶりに父さんと風呂に入らないか？」
「あなた？」ビキビキ
「うわあぁぁ！ごめんよ、ママぁ！」

ったく、いきなり何を言い出すのやら。
とは言え父さんの名誉のため言うが父さんにやましい気持ちは一切なかった。ただ親子の仲を深めようと考えただけだ。そういえば私の双子の兄の斉木楠雄、彼にも同じ事を言って断られていたっけ。まあ私としては一緒に入ってやってもいいが高校生にもなって父親と風呂に入るのはまずい気がする。
ところで皆さんは風呂は好きだろうか？
私は全然嫌いではない。
申し遅れたが私の名前は斉木栗子。超能力者で同じく超能力者の斉木楠雄の双子の妹だ。
生きている以上誰だってストレスはを感じるはずだ。もちろん例外（燃堂）はいるだろうが。超能力者の私と言えどストレスは溜まる。いや、超能力者だからこそのストレスがある。例えば…、

（わー今日のサイダーマンもおもしろかったなー！ねる前に今日ろくがしたサイダーマンを後十回は見るぞー！）
（ちくしょー！また鮭に殺されてゼンメツだ！次は鮭どもを一匹残らず駆逐してやる！）
（してやったりだぜー！）
（ふーっ……。この一杯のために苦行してる）

このようにテレパシーのせいで常時他人の心の声が聞こえてくる、風呂に入ってる時も、寝る前もだ。
テレパシーがなくなったらいいのに、と考える時もある。だがもしテレパシーを捨てた瞬間突然、「フィーヒヒヒヒ！」とか言いながらニ

ンジャに激しく相互情報循環交換かもしれないと思うと、とてもじゃないがテレパシーを捨てるなんて無理だ。テレパシーがあったらアイサツ前にアンブッシュで爆発四散させるなんて容易いんだが。

だがそんなテレパシーよりもいらない能力がある。透視能力だ。人を数秒見ればグロい肉体が見え、動物を見れば可愛かった外見はどこかへ行ってしまい素直に可愛がれない。極めつけはテレビを見る時である。二秒見ただけで液晶が透けて配線が見える、つまり一秒ごとに瞬きをしないとまともに見れない。くっそ疲れるぞ、試しにやってみれば分かって頂けるだろう。ただ周りの人にドライアイを疑われるから気を付けてほしい。

そんな訳で疲れを癒すにはゆっくりと風呂に入るのは最高だ。服をさっさと脱いで風呂に浸かる。

ザパーン

ふぃぃー。やはり風呂はいいな。疲れが溶け出るようだ。

だがやはりテレパシーによる人の心の声がうるさいな。とてもじゃないが休まらない。…よし今日はこの前探しておいたあの秘湯に行こう。山奥にある秘湯ならば人はいないだろうから久しぶりに静かな時間を楽しめるだろうし、今浸かっているこの水道水を温めただけの狭い家庭用風呂より効能やらなんやらの入った広い温泉の方がずっといいだろう。

そうと決まれば瞬間移動。ヒュン！

パシャ

びゃあ〝ぁ〝ぁ〝ぁきもちひぃ〝ぃぃ〝。

最高すぎて変なことを考えてしまった。それにしても外の空気がおいしい。一メートル先も見えないほど霧が濃いがそれはそれでよし、だ。それに人の気配も……ん？

「あのー今の音なんですかね？」

「てやんでぃ、なにったってそりゃ猿かなんかだろ。バーロー」

!?

先客がいたようだな。だがまだ焦る時間じゃない。
たしかに瞬間移動は三分間のインターバルが必要なためすぐに家の風呂に帰ることなど出来ないし女が裸で、しかも脱いだ服がどこにもないことがバレたら痴女扱いされる。それは嫌だ。
幸いにも霧は濃いし猿だと思われてるようだししばらく大丈夫だろう。ただ念のため透明化しておこう。透明化は完全に透明になるまで一分掛かるがそれまでなんとかなるだろう。

「猿っすか！俺見てきます！」
「おーそういえばお前動物好きだったな。行ってこい行ってこい」

はあ？フラグ回収早すぎるだろ。
これは焦らざるを得ない。まずいぞ、霧で分からなかったが以外と距離が離れていない！これじゃどうすることも……。

「えっ？女の――――」
ずるっ
「あ、足が滑って、ボボボボボ、ボゥホ、ボォ」バシャバシャ
まずいな私を見た後に転んだせいで混乱してすぐに立ち上がれないようだ。これで溺死なんかしたら完全に私のせいじゃないか。すぐに助けなければ。暴れる腕を掴み無理矢理立ち上がらせる。生きてるか？

「…う、うーん。あ、さ、さ、さ、さっきの！……ガクッ」

何故か気絶してしまった。私も今テンパっているからなテレパシーを聞いている余裕がなかったせいでなぜこの人が私を見て気絶したのか本当に分からない。とりあえず温泉から出て寝かさないと。まずは肩を組んで…。

「おーい！どうしたってんだべらんめい！あっ」

やっと来たか江戸っ子。早く手伝え。

（あっしは生まれて三十年間彼女が出来たことのねぇパーフェクトチェリーボーイよ。そ、そんなあっ、あっしが若いお、女の裸なんて見たら……）

馬鹿なに考えてる。お前の相方気絶してるんだぞ。

「この娘、エロいからっエロい！」鼻血ブーッ

ザパーンッ！

いい大人が鼻血なんて出すなよ！

くそっ、今肩を組んでいるこいつを早く助けたいが、かと言って江戸っ子を助けるために移動するのは時間が掛かりすぎる。よしここはあの能力の出番だ。

バイロケーション！（分身能力）カッ

助けるべき人が二人いるなら分身して二人になればいい。常識だな。

［頼むぞ］

［わに任せへぇ～（私に任せて）］

分身が超能力者としての力を遺憾なく発揮し秒で助け起こしたな、これでよし、だ。

分身はオリジナルの私と同じ能力を持ち、命令にも素直に従ってくれるが、栗子Ｂに限るがどこの方言か分からない言葉を使うため意志疎通が難しいというデメリットがある。

ここで少しメタ発言をするが原作では頭のアンテナ（制御装置）を外してからバイロケーションを行っていたが、私はアンテナを外さずにバイロケーションを行った。これは原作ではバイロケーションを

行った理由が火山の噴火を抑えるためなのだが、実はアンテナを外さなくてもバイロケーションは使えたのではないか、と、投稿者は考えたわけである。もしそうでないとしたらこの小説もどきの私、斉木栗子はバイロケーションが得意だった、そう考えて頂ければ幸いだ。うまく説明出来たか分からないし説明が長くなってしまったな。別に読み飛ばしても良かったんだぞ？

よし二人とも温泉の外に出して楽な姿勢で寝かせる事ができたな。このまま放置するのはまずい。ここは山の中だ、熊、野犬、ニンジャなんかが出るかもしれない。ここはこの二人が目を覚ますまで見ていないとな。ただ少し冷えるな。

［おい栗子B、悪いが私の服とタオルを数枚、後何か飲み物を持ってきてくれ］

〔わがっだ、んだば行ってくるじゃ。へばな（分かった、それじゃあ行ってくるぞ。またな）〕

ヒュン！

少し心配だが、まあ大丈夫だろう。

［斉木楠雄視点］

ん？栗子が帰ってきたようだな。瞬間移動で秘湯に行っていたはずだがまだ五分も経ってないぞ。…気になるな。僕は今自分の部屋でテレビを見ていたのだが、千里眼で様子を見てみるか。

（うーん瞬間移動は三分間のいんたーばるが必要だはんでなー。なるべくはえぐ戻るためにもう一人分身っこ作るが）

どうやら向こうで何かやらかして家に分身を寄越した、と言ったところか。それにしてもこの栗子B、津軽弁使ってないか？うちの家族全員青森に行った事なんてないぞ。我が妹ながら理解不能だ。

［はいそーれ、ばいろけーしょん！］カッ

［うわあ！私裸じゃないですか！恥ずかしいよぅ］
［んだばわが水っこ用意するはんで、なはタオルっこと服っこ用意してけじゃあ（それじゃあ私が飲みものを用意するから、お前はタオルと服を用意しておけ）］
［なに言ってるか分からないですよ。それより早く服着たいです。恥ずかしくて死んじゃうよぅ！］

大丈夫なのか？この分身。
栗子Ｂはどうやら冷蔵庫の麦茶とスポーツドリンクを取りに行くようだ。裸で。

「おー栗子風呂からあがったか。早かったなってうおおぉぉい！」
「くりちゃんはしたないわよ～。めっ」
［んー今急いでるはんで、ごめんな］
「え、なにそのしゃべり方？」

栗子Ｂには羞恥心なんてもなのはないみたいだな。代わりに羞恥心の塊みたいな栗子Ｃはすごい勢いで着替え終わったな。というか分身に個性ありすぎだろ。
栗子Ｃは脱衣場にいるため用意する物が近くにあるおかげで暇そうにしているな。
ふと考えたのだが栗子が困っているのなら助けやるのもやぶさかではない。それを口実にコーヒーゼリーを買ってこさせれるからな。

（まだかなぁ）
〔おい栗子Ｃ。ものは相談なんだが――〕
［え、楠雄兄さん!?ひぇー！殺さないでー!!そんな事言って心臓抜きするつもりなんでしょ！キルアみたいに！キルアみたいに!!］

これにはさすがに僕もショックを隠せない。

［おぐれでごめんなぁ。スポドリながったから自販機まで買い〝に行ってだはんでな～（裸で）］
［早くそれ渡してください！こんな殺人鬼（仮）のいるところなんていられません！私は逃げます！］ヒュン！

……。

［な〝んがあったの？］
［……いや］
［…んだが］

［斉木栗子視点］

［持ってきましたよってうわぁ！この人！裸！］カァァ
［？。そうだが？それよりタオルは要らなかったな。こいつらの荷物に入ってたから先にこいつらの体を拭いといた。それよりこいつらに服を着せるぞ。体を冷やして風邪でもひいたらいけない］
［そんな！無理ですよ！男の人に触るなんて恥ずかしいです！］
［??。そうか、なら栗子Cは待機してろ］

やはり分身の分身となると制御が効かなくなるのかもしれないな。男の裸なんぞはいつも透視で見ているだろ。
まずは江戸っ子の方からかな。こいつらの荷物から替えの服を取り出してっと、始めにパンツからだな。
あ、やばい。
「う、うーん。てやんでぃ、やっぱりこんなところに若い娘がいるわけぶー！」鼻血大量出血
うっわ、汚な。

［再び斉木楠雄視点］

［やっぱしりんごがいっちばんめぇんだわ！…あ、栗子Ａがらテレパシーだぁ～］

［結構距離があると思うのだがテレパシーが届くのか］

［分身同士だどどれだけ離れでもだいじょぶっていう設定だぁ～］

設定とか言うな。

正直今僕は一人になりたい気分なんだ。なんで栗子Ｂは僕の部屋にいるんだ？しかも裸で。

［んでな、内容なんだんだけんどもそのまんま言うはんでな。「鼻血で死にそうなやつが一人、今すぐ、くす…彼にこっちに来て一日戻しをさせるように言え」だどさ］

［分かったすぐに行こう。全く面倒くさいな］

［……ふふっ］

［…なんだ？］

［なんでもねーべや楠雄のにっちゃ。はえぐ行げへ］

なんなんだいったい？まあ、ほんの少し頼られて嬉し…いや、なんでもない。

瞬間移動してすぐに栗子Ｃに悲鳴をあげられた。栗子Ａは栗子Ｃに同情の目を向けていた。…なんて日だ。

〔後日談〕

よっさん（江戸っ子）のブログによってあの秘湯に長蛇の列が出来た。なんでも若い裸の女の幽霊が出るとか。

それに目をつけたゲーム会社が、ブラウザゲーム「山娘コレクション」を発表。これが大成功。この人気が世の男達を沸き立てた。世はまさに大秘湯時代！男達はまだ見ぬ秘湯を求め山を登る。

…もう秘湯なんて懲りごりだ。

第１０ｘ　もう相ト命にΨ度会う事はないと言ったな？あれは嘘だ　パート１

ドーモ。サイキ・クリコです。
そして右斜め前の席に座っているのが双子の兄のサイキ・クスオ＝サンだ。
アイサツは大事だと古事記に書いていると聞いて実際に読んでみたが、無かったと思う。
言い忘れたが二人ともエスパーニンジャだ。
嘘だ。ニンジャってところがな。

「うわ～転校生って誰だろ～。え、女子？…ふーん。……あ、そうだ昨日テレビで六神通がね～」
「イエス、イエス！転校生は女子だぞぉぉぉ！」
「また転校生か…」
「二年に入ってから初じゃね？」
転校生か…。一年の時は数名の転校生が来たが全員他のクラスだったな。周りのクラスメイトは浮き足立ち、ワクワクしているが(主に男子)、私は全くワクワクしていない。いや私が女子だからとかじゃなくてテレパシーで転校生がどういった人物か分かっているからだ。…はぁ、面倒な事になったな。
がらがら
「よっしゃあ！待ってました！」
「お前らさっさと席に座れ！」
「うたく、くそ男子どもが」
全員静かに席についたな。全員が注目している。さっきはあんな風に言ってた女子も内心気になっているようだ。そしてゆっくりと転校生の顔が…。

「嬉しいな先生を待っていたのかい？」ハアハア　ニタアッ
「ちっげえよケダモノ！」
「そうだそうだ。ケダモノはノケモノなんだよ！」
「そんなー」ガクッ

まぁ、そうなるな。
今入って来たの井口工、（いぐちたくみ）先生だ。二五歳と若く、とても生徒想いのいい先生なんだが、顔がとてもいやらしい。そのせいで未だ生徒からの人気のない可愛そうなうちのクラスの担任だ。
そんなエロイ…ではなく井口先生には前に悪いことをしたな。
あれは始業式の次の日、そう私が救急車で運ばれた次の日だ。朝教室に入るとほぼ全員に心配された。いい人達なのは分かるが目立ちたくない私としては最悪だ。救急車で運ばれたが体に何の異常もなかったと、伝える前にあの井口先生が教室に入って来た。

がらがら
「おや？大丈夫なのかい、斉木栗子さん。ハアハア。ふふっ先生、名前も住所も暗記したんだぞ～。ニヤァ～。先生は栗子さんが心配で心配で栗子さんを想うと夜も眠れなかっんだ」ニタニタ～
「セ、セクハラですよ！先生！栗子さんは体が弱いんですよ!?」
「大丈夫？栗子さん」
「えぇ!?なんかごめんな！」ニヤァ～

変態から体の弱い女子を守る正義感あふれる集団という構図が出来上がる前に、私から昨日病院に行ったけど体に問題はなかった事と先生に気にしないでいい、的なことを伝えて事なきを得た。私は体が弱いどころか究極完全体（パーフェクトシーイング）栗子だからな、病気にも船酔いにもならない自信がある。
そんな訳で少しは反省し…いや、よくよく考えると私、悪くないんじゃないか？そうだ。私は悪くない。

話を戻すぞ。

「今日は…もしかしたら皆もう知ってるんじゃないか？転校生がこのクラスの仲間になるんだ！さあ入っておいで」ニヤァ

「ちーす」

（（（（（ギャルだ…））））））

入って来たのがギャルと分かると半分が落胆し、もう半分がおっぱいを見て唾を飲む。私は後者だ。何を食べればあんなにおっきくなるのか知りた…いや、今のなし。なにも言わなかった、いいね？

「うっわ！ドーテーくせー奴ばっか……あー!!この前のペアルック双子じゃん！バイブスぶち上がり～！おひさ～！元気してたー？」

「友達がいたのかい？先生自分の事のように嬉しいよ」ヘラァ

私はぶち下がりだわ。

そうこのおっぱいとは前に会っている。迷子の犬を占いで探し当てたのだが、その時確信した。このおっぱい、超能力者だと。

「いやあ～前に占った時はこの町いることしか分かんなかったけど、この学校にいるって絞り込めれてさ！もうそれが分ければ前の学校なんて秒で即去りだかんね！」

「気になる話だけど先に自己紹介をよろしく頼むぞー」ハァハァ

「りょ」（こんな感じの顔の客よく店に来るんだよね～）

変態とギャルの絡みを見て周りのクラスメイトが引いてるんだが。

カッカカッカッ（黒板に名前を書く音）

「アタシ相ト命（あいうらみこと）！テキトーにミコちゃんって呼んでよ。趣味は占いとーーーー」

「えええぇ！占い!?」
「ん？一番ドーテーくさい君、占いが好きなの♥？」
「ひいえっ!?ち、ちげーし、ど、童貞じゃねーし！」
「ふーん？」

童貞が許されるのは小学生までらしいぞ。童貞という言葉の意味は知らんがな。
それにしても意外だな、海藤が占いに興味を持つなんて。

「えー！みことちゃん占いが好きなんだ～。私も好きなんだよ！それとさ、さっきの話、この学校に絞り込めたってもしかして…？」
「ん？もしかして気づいた？鋭いじゃん。そ、アタシがこの学校に来たのは運命の相手を探すためっしょ♥」
「キャー！ステキー!!くりっちもそう思わない!?」

どうでもいいな、心底。
だが、どうでもよくないのが相トの占い能力だ。相トに占なわれたら即超能力者だとバレるだろう。絶対に避けなければ。

ここからは途中までほぼ原作通りに進むぞ。仕方ないだろ、投稿者が話を思い付かなかったんだ。ほんとクズだな。
その途中までの話を一応確認するぞ。（一番いいのは原作コミック16巻を買って読むのがベストなんだがな）
相トの運命の相手、イニシャルがS．Kでピンク髪だと言う。斉木楠雄ではないかと察知する
←
超能力者バレを防ぐため学校を休んで様子を見る（一応私も念のため）
←
相トのオーラを見る力が戻り、オーラの大きさ、質を見て運命の相手を探す

←
観念した斉木楠雄、彼は、相トの後ろに瞬間移動（この時私は自分だけは超能力者だとバレない作戦を必至になって考えてた）
←
オーラが見えなくなったと狼狽する相ト。彼（と私）のオーラが大きすぎて逆に見えないと分かる
←
相トはS・Kを頼りに運命の相手を探す。彼はこそこそと逃げ回る（こそこそと逃げ回る姿はお笑いだったぜ）
←
相トは学校の屋上に手当たり次第にイニシャルがS・Kの人物を呼び出すがどいつもこいつもハズレだった
←
ここから話を始めるぞ。ん？（）の部分を入れて話を書いたら途中までとばす必要なかったんじゃないかって？…それは面倒くさ……それは話をスムーズに進めるためのいた仕方ない処置だ。理解してくれると助かる。

「さっきのも違ったかー。オーラが見えりゃぱっと見でわかんだけどなァ」
がちゃ
「みこちん帰ーえろ！今日はくりっちも一緒なんだよー。くりっちったら聞き上手なんだから！恋バナしながら帰ろーよ！」
相ト、お前のあだ名ニコチンみたいだな。
「おーす、ちよぴっぴ。…いねーよ、運命の相手」
「運命の相手ってイニシャルS・Kだっけ？意外とこの学校にたくさんいるんだねー！知らなかったー！……斉木君は？」
「えーと…サイキッくんは…まだ…調べてない…かな？」
「ふーん。……もしかしたらライバルになるかもだね」ゴゴゴゴゴゴ

（っべーはマジで！・オーラ今視えねーはずなのに一瞬ヤバいオーラ視えた気がしたわ…）

私にも視えた気がした。どす黒かったな。

「ガッコーだとオーラ視えねーんだよな～。ガッコーの外とか放課後のガッコーならたま～に視えっけど～。この学校って特殊な電磁波とかあんの？」

「そんなの聞いたことないよ。ね、くりっち」

コクッ

適当に首肯いとくか。

それにしても特殊な電磁波…か。意外といい線いってるな。答えはすぐ目の前まで来てるぞ、文字通り。まさか私がでかいオーラを出してるとは思うまい。

相トが探しているのは私ではなく私の双子の兄の斉木楠雄だが私がなにもしないでいる訳にはいかない。私の兄が超能力者だと分かれば私にも注目がいくはずだ。なんとしても誤魔化さなければ。

「…もしかしてなんだけどね。みこちんの運命の相手のオーラがちょービックで他のオーラを隠しちゃってるんじゃないかなーって」

「それだわ!!もしそうなら超絶怒涛のヤバオーラじゃね!?まじイエェェーイ！だわ！」

「よーしそれならここで校門を見張ろう？あそこを通ってオーラが視えるようになったらその人が運命の相手よ！なんてロマンチックなの～♥」

［はい気づいた～。どうする？また観念して超能力者だと告白しに行くのか？］

［その必要はない。僕にいい考えがある］

［それ失敗フラグだろ。…ちゃんと説明しろよ］

［分かってる。まずーーーーー］

「ちよぴっぴサイコー！まじリスベクトだわ!!」
　ぎゅっ
（おおぅ、パーフェクトバスト…）

［ーーーーとこうなる訳だ。分かったか？］
［え？……あ、ああ了解。完璧な作戦だな、うん］
［…まあいい、実際に動くのは僕だからな］

いやしっかり聞いていたからな。だけど目の前で胸が……今のもなし、いいね？

「ねーくりっちも運命の相手探し手伝お？こんな機会滅多にないよ？」
　コクッ
「本当に!?ありがとーサイキッちゃん。サイキッちゃんもリスベクトだわー！」
　ぎゅっ

［なぁ提案なんだが］
［なんだ］
［超能力者だってバレないように付き合うというのはどうだ？そうすればこのおっぱいはお前の物にーーーー］
［今のは聞かなかったかった事にしてやる。いいな？］
［アッハイ……少し頭を冷やすか…］

〈続く〉

第１０ｘ　もう相ト命にΨ度会う事はないと言ったな？あれは嘘だ　パート２

急に抱き付かれたからだな、あんな血迷った事を言ってしまったのは。あのおっぱいは占い能力よりも危険だ。この私を堕落させるとは、きっとあのおっぱいは悪魔に取り付かれているに違いない。去れ！マーラよ！

何を下らない事を考えているんだ私は。戒めるため軽く頭を振る。

（分かる。分かるよ、くりっち！あの巨乳は反則だもん）

［全く理解出来ないな。馬鹿なのか？］

くそっ、ほんの少し前に聞かなかった事にするとか言ってただろうが。だがしかし斉木楠雄、彼の方が正しいため言い返せないのが悔しい。さっさと作戦を始めろよ、馬鹿。

「あっ！早速誰か…って斉木君だ♥」

「ピンク髪でＳ．Ｋ…確率爆高じゃん！やっぱアイツが運命の相手!?」

それはどうだろうな。

「……どう？オーラ見える？」ゴゴゴ

「ダメ……でした…よ？」

「よかったー！ところでなんで敬語？」

また視えたぞ、どす黒オーラ。

視えなくて当然だ。彼は行ってしまったが私がいる。相トのオーラを視る能力がまだ使えないのは当然だ。

……おい。

［ちょっと待て、まさかそのまま帰ろうとしてないか？見えない位置まで行ったら戻って来て一緒に見張るんじゃなかったのか!?］

［聞いてたのか？女子同士が抱きついてるところを涎を垂らして見ていたから僕の話なんて聞いていないものだと…］

［垂らしてないし聞いていた。ふざけるな］

［どっちにしろ見張りなんて一人いれば充分だろ。僕は家に帰ってコーヒーゼリーを食べる。しっかり見張ってろよ］

馬鹿野郎ーっ!!お前、何を言っている!?ふざけるなーっ!!

テレパシーでしか基本的にしゃべらないという自分ルールを破って叫びたい気分だ、くそっ！

〈数時間経過〉

「…もう誰も通らないね。まだ見えない？」

「視えねーわ、まったくな～」

相トは完全にだれている。おい、足を開いて座るな。見えるぞ、まったく、なんでそんなスカート短いんだ校則違反じゃないのか。……私のせいだったなそういえば。

無駄な時間を過ごしたな。何か起こるはずないのに何かが起こるの待つ時間ほど無駄な時間はない。どうせもう誰ももう来ないと分かっただろ。私は先に帰るぞ。

スッ

「あ、くりっち帰るの？」

「こんな時間まで付き合わせてマジメンゴな？今度なんか奢るわ～」

すたすた　　ガチャ　　バタン

瞬間移動で家に帰ってコーヒーゼリーを…いや長い時間座っていたせいか……腹が、減った。先に晩御飯だな。
シュン

「んーじゃアタシ達も帰ろ……視えたー!!」
「えぇ!今ぁ!?…でも誰も通ってないよ?」
「やっぱでけーオーラって考えが間違ってんのか?いい線いってんと思ったんだけど。…うん?」
「?。どうしたの?私の顔見て。あーそうか、私のオーラ視てるんでしょ!どおどお?私のオーラ!」
「えっと、オーラはハート型で別におかしくはないんだけど、オーラと一緒に視えてるもんがヤバイっつーか……アンタ、死相出てるんですけど」
「死相?……えぇ!?死相!?ちょっ、ちょっと待って落ち着かせて!」
ヨロヨロ
「ふぅ。なんでもいいから物に寄り添うと落ち着くんだよね。で、でも死相なんていってもすぐ死んじゃうわけじゃなーーー」バキッ
「えっ?」
フワッ
「うわあああぁぁ!!」ガシッ「はあ、はあ、足掴めた…まじファインプレー…。ってちょぴっび!大丈夫!?」
「……」白目
「なに?気絶してんの!?…やばい、まじでやばいって!!どうすりゃーーーーあ、ああ??」
(え、えぇ?どうなってんの?アタシなんでさっきまでいたところに立ってんの?そんなことより柵が壊れて屋上から落ちそうになってたちょぴっびが、なんで目の前で立ったまま気絶してんの?ついでに柵もなんともないし…)
ふらっ

（あ、）
ヒュン！　スッ
［おい、僕が手を貸す前に目の前で倒れそうな人がいたら支えてやれ。……なんか格言みたいに言ってしまったな…］
「え、は？……はあ??斉木楠雄??もうさっきから意味分かんないんだけど！ちょっ、ほんと混乱してんだけど。アンタ何したか答えろよ!!」
［別に。瞬間移動してこっちに来ただけだ］
［瞬間移動って何!?それもだけどさっきの変な現象？もアンタなの!?］
ヒュン！
［いやそれは私。モグモグ。時を十五秒戻しモグモグ］
「サイキっちゃん!?サイキっちゃんも急に現れ…つーかなに片手に茶碗持ってメシ食ってんの!?ついさっき帰ったばっか…いやもうアンタ達なんなの!?」
［別に。ただの超能力者の兄妹だ］
［そういうこゴックン］

完食した。アポートで食器を家に返しておこう。
それにしても死相か…。そのなものまで視えるとは相トの能力はやはり侮れないな。私には予知夢があるがあれは狙って見ることの出来ない欠陥能力だからな。今のように命に関わる事故が起きても私の計一分時戻しなら対処が出来るが、死相のようなものが分かれば早く対処出来るだろう。早ければ早いほど計一分をあまり消費しなくて済む。
「つーかずっとアンタら口動いてないんだけど…超能力？ありえないって…」
［テレパシーで脳に直接話してるんだ。私がな］
「いやスゲーけどそれよりサイキっちゃんそんな話し方だったんだ…。大人しい娘だと思ってたわー…ショッキングなんですけど…」

大人しい…か。しゃべらないだけで大人しい性格と判断するのは早い。内心でどう思っているかなんて人それぞれだからな。動物もしゃべらないが結構ヘビーな考えを持ってるやつもいるからな、それに似ている。

「いやいやいやでも手品とかでしょ？超能力だっていうなら証拠は!?」

［そうか…手品といえば騙せたか…］

［いやもう無理だろ］

［それもそうか。いいぞ証拠だな、私が見せてやるよ］

そう言ってから手にアポートでスプーンを取り寄せる。

「なに？スプーン曲げでもすんの？そんな手品の代表見せられてもーーーー」

私は手にしたスプーンを握りしめる。

ドジュゥウ

「は？」

手を開いて見せるとそこにはパチンコ玉のような塊がある。

［スプーンに熱を加えた。信じられないなら触ってみるか？触れると燃える温度だからオススメしないが］

［前にも言ったが僕達は目立ちたくないんだ。写真をとってネットにあげるなんて馬鹿な事はやめろ］

相トはスマホを取り出そうとしてやめた。やれやれ。

［おい、これ直しておけ］ポイッ
［自分でやっておいて僕を頼るな。ちっ仕方ないか、このままだとカレーが食べられなくなるからな］パシッ
ギュン！
「！。戻った…。わーったよ、超能力者って認めるし、超能力はショナイね。……んーっ、そのかわりーっっうか、頼みがあんだけど」
［分かっている。夢原さんの事だろ。その為に私は食事中にも関わらずここに来たんだ］

そう言って彼に支えられたままの気絶中の夢原さんを見る。超能力者にかかれば死相もただの思い過ごしになるだろう。

〔続く〕

第１０ｘ　もう相ト命にΨ度会うことはないと言ったな？　あれは嘘だ　パート３

「あー！くりっちー、待っててくれたの？ありがとー！」

夢原さんは笑顔で斉木栗子、つまり私に話しかけるが、対照的に相トは微妙な顔だ。

（サイキっちゃんは超能力者…。なんか前みたいなノリもう無理なんですけど…）「えっと、じゃ三人で帰ろっか…」

そんなこんなで女子高生三人で下校中だ。一人は超能力者、もう一人が占い能力者で、最後が死ぬかも知れない人。何の変哲もない日常的風景だな。

斉木楠雄、彼は遠い離れた位置からのバックアップだ。大抵の事なら超能力者が一人いれば充分だが、命に関わるとなれば慢心は出来ない。死相というものがどれ程に危険なレベルなのか詳しくは聞いていないが超能力者が二人いる以上安心していい。泥舟に乗っても昼寝をしていいくらいに。

今日死ぬかも知れない夢原さんはお気楽に話しかけてくる。

「ねー聞いてーくりっちー。くりっちが屋上から出てった後ね、私立ったまま寝てたんたよ～。ちょっとヤバイよね～。それでね、その時夢を見てたんだけどその内容がね、みこちんが私に死相が出てるって言ってきてね、そしたら私屋上から落ちちゃったんだよ！。でもさ、夢の中で死んじゃうのってたしかいい意味があるんだよね。そう考えるとテンション上がっちゃてさ～」

ポジティブか！

夢原さんはテンション高いのかも知れないがこの話を聞いてる相

トは暗い顔してるぞ。どうすんだこれ。

「あ～ほんと目の前で寝始めたからまじ仰天したわー」（今もちよぴっびに死相出てるんだろうけど確認出来ねー…大丈夫なのか？不安だわー…）

大丈夫だ。私がいる。

（…それにしても、アイツが運命の相手かー。見た目ボッチ陰キャの冴えねーモブ野郎だけど、なんかSっぽい性格だしMなアタシ的にポイント爆上げ。なきしもあらず…ね♥）

［やめとけ！やめとけ！。斉木楠雄、十六歳、彼女いた歴なし。学校では無口で何事もそつなくこなすが今ひとつ情熱の足りない男。だが内心ではSを通り越えて帝王気取りの男……］

「うおお、きもっ!!」

「ええっ!?ど、どうしたの？」ドキッ

「えっと…ゴキブリが走ってたから…。アハハ、ゴメンね」

おい、ゴキブリとかいうな。会いたくなくて震える。

なにがキモかったんだ？心を読んだ事か？それともセリフか？それか帝王気取りのとこか？

そういえばテレパシーについて詳しく説明していなかったな。

［言っていなかったか？テレパシーは言葉を送るだけではなく相手の心の声を聞くことも出来る］

（ちょっ、それ早く言えよ！…いやまだ良かったか、遠くにいるサイキっくんには聞かれてねーだろーし）

［当然聞こえている］

（うっわまじかよめっちゃハズい。……！）

［あのおっさんが気になるのか？別に構わないが後ろを見ろ］

（気になるっつっても男としてじゃなくて……）「って、ちよぴっび!?

どったの!?」

夢原さんが倒れた。顔色が悪く腹をおさえている。

「お…お腹が痛い…多分、お昼に食べた千里っちのグロい魚にあたったかも…」

あれか。私もその場にいた。目良さん見事な包丁使いだったが保存や毒抜きについての知識はなかったようだ。私も食べたぞ。グロいわりに美味かったぞ。当然私も目良さんも毒を食べた事になるが私は超人だから大丈夫だとして、目良さんは…うん、大丈夫だな、多分。

［毒にあたったな。おそらく救急車を呼んでも間に合わないだろう。それに私にも治せないな］

「なにのんきな顔してしゃべってんのさ！アンタにも治せないって…どうすりゃいいんだよ!!」

［大丈夫、私に治せなくても］フッ［僕なら治せる］

「はあ??斉木楠雄??一瞬でサイキっちゃんから入れ替わった…」

［一日に同じリアクションをするんじゃない。それよりもう治したぞ。僕はもう行くからな］ヒュン！

「あれもうなんともない」

「えー…？」

（いや良かったんだけども、なんかあっさりしすぎてるっつーか。そうだ死相どうなった!?もう消えてんじね？）

クルッ「なんだったんだろ？なんかゴメンねみこちん！」死相

（駄目だわまだ消えてないわこれ。どうすんだよ、今サイキっくんもサイキっちゃんもいねーよ。まじどうする!?）キョロキョロ

「どしたの、みこちん？」
「いやなんでもね…うわあトラック!!」
暴走トラック「ブオオオオ！」バキバキ！
「なに？トラックが好きなの？」
（ちよぴっびって結構天然なところある…じゃなくて！。あのトラックの運転手寝てるし！しかもさっきの死相の出てたおっさんじゃん！やばいってこのままじゃ……止まった…なんで？）
［お前がおっさんを視たところを僕も見ていたらな。瞬間移動でトラックに乗ってブレーキを踏んだ。だが車は急に止まれない、だから］
［私がサイコキネシスでトラックを少し浮かせた。ったく歩道が空いてるからってそこを行こうとするなよな。車道側に寄せるぞ］スイー
［いいんじゃないか？このへんで］
［ＯＫ］ズンッ
「トラックってあの止まってるやつ？まさか運転手がタイプとか！。そんなわけないよね、おじさんだもん。あれ、みこちん顔赤いよ？え、まさかほんとに!?」
（二人とも死相が消えてる…。後トラックにいたサイキっくんも消えてる。あれがアタシの運命の相手…スゲー男だ…これ完成にガチ恋だわ…。斉木楠雄…いや、くすお♥）
家に着いて早々、彼は嫌な顔している。愉悦。
（あ、心の声聞かれてるんだっけ。まいっか！。そだ、くすおとサイキっちゃん後でＬＩＮＥやろーよ。サイキっちゃんはくすお情報ちょーだい。仲良くしよ？）

こうなるから嫌なんだよ。彼に絡むのは。

第11ｘ　昔の斉木栗子のΨ難……それとＧ

［お前が上、私が下だ］
［命令するな、っと言いたいところだがまあいいだろう］
［そうだそうだ、それでいい。物分りのいい人間は好印象を持たれるぞ］
［ムカつくやつだ。好印象なんて持たれなくていいし、それに物分りが良すぎる僕ら超能力者は逆に反抗したくなる、そうじゃないか？］
［ふんっ。さっさとしろ］

今のは掃除をどっちが一階でやるか二階でやるかの会話だ。それ以外にないだろ？
両親はさっき出かけた。友人の結婚式に行くとかいってたな。あんなドロドロとした感情渦巻くところに嬉々としていくなんて、と思ったがテレパシー能力のない両親には上っ面だけの幸せを見るだけで済むんだよな。
それにしても時間ギリギリまで結婚式に行く準備をしていたとはいえ散らかりすぎだ。掃除や片付けなど超能力を使えば全く苦ではないが、どうせやるなら小遣いをせびりたかったな。だが汚い部屋で住ごすのは私も嫌だからな。早く掃除を始めよう。
まずは雑誌をまとめておこうか。フワッ

カサカサ

虫の仕業ですな。
これが気を失う前に頭の中で考えた最後の言葉だった。

私は夢を見ていた。昔…幼少期頃だろうか。
そうあれはまだ私が四歳の頃、そしてあのプリン事件の後の記憶だ。
そうだな、まずはプリン事件の話も軽く話そう。
プリン事件の起こる前までの私達双子、私とくすお（この時期はそう呼んでいた）とはゼロ歳の時から仲良しで、盗んだバイクを二人乗りで走り回ったりもしたそうだ。隠し事もない時期だったからかテレパシーで心の声　を聞いても特に嫌な感情もなく、むしろ面白いからと永遠とテレパシー会話を続けていたそうだ。
そんな仲に亀裂が走ったのがプリン事件だ。プリンジャンケンでは決着が付かないので無人島に瞬間移動してケンカで勝敗を決めようとした。これが大きな間違いだった。今まで兄妹でケンカなどした事などなかったが、ポカポカという音がでそうな軽いパンチやキック（プロレスラーを大怪我させるレベル）で済むと考えていた。だが予想に反してくすおは完全にガチで来た。
確かにあの時、
［まけないからね！プリンはわたしのだもん］（でもけがとかはしないようにね）
と、言った私に対してくすおは
［うん！］（プリンプリンプリンプリンプリン）
と、適当な返事とプリンしか頭になかったくすおに危機感を持たなかった私も悪かったのだろう。
本当は認めたくないのだがハッキリと言おう。怖かった。
全力で襲いかかるくすおを全力で迎え撃つ。やられっぱなしは嫌だからな。暫くケンカを続けると業を煮やした、と言うより早くプリンを食べたい彼は飛び上がり巨大なエネルギー玉を作り、無人島を消滅させた。今でもトラウマものだぞ上からエネルギー玉が落ちてく

るのは。まあ当たっても軽い火傷で済むのだが。
何より怖かったのはあのプリンの為なら私が怪我してもいいという姿勢だった。今回はプリンが原因だが今後は？もし今後なにか彼を怒らせるような事があればケンカで済むのだろうか？。考えは悪い方へ悪い方へと傾き続ける。そうだ今まで考えてこなかったが彼と私は他の人と違って凄く強いのだ。大抵の事じゃ怪我なんてしなかったが彼なら私に傷をつけられる。
くすおはとても危ないんじゃないか？ここまで考えた私はゾッとした。
仲良く遊んでいたくすおは、テレパシーでお話していたくすおは！ゼロ歳から一緒にいたくすおは!!天敵！天敵なんだ!!
くすおは自分がケンカで勝つと（私はこれ以上続けたくないので降参はしたが負けたつもりはない）急いで幼稚園に戻ったがプリンは食べられなかったそうだ。他の子が食べてしまったのだ。後から私も瞬間移動して幼稚園に着いたがくすおの機嫌が悪いのがすぐに分かった。顔色や雰囲気だけでなくテレパシーでもそれが伝わってくる。いろいろと心の中で悪態をついていたが、

（くりこがさっさとまけてればぼくがプリンをたべれたんだ）

これには私もキレてしまった。くすおが危険な存在だということは忘れて言い返すとくすおもまた言い返す。口喧嘩になってしまったが本当のケンカはしない。もう無人島は消し飛んだし次に何を消滅させるか分かったもんじゃないしな。
その後家に帰ってからも私もくすおも悪感情を残したままだった。お互い負けず嫌いな性格もあってか謝るという選択肢はなかった。相手の感情が分かるということがこんなにも辛いことだとは今まで思わなかった。お互いの悪口や苛立ちにはお互い参ってしまったのだろう。ついには、
「お前の考えてる事なんか聞きたくない」

とテレパシーを使わずに言った。テレパシーを使わかったのはテレパシーでお前と話なんかするもんかという気持ちの表れだ。するとどうだろう？くすおの心の声が聞こえないではないか。これには凄く喜んだものだ。もううざったい彼のテレパシーは聞こえてこないのだと。これで安心して熟睡出来る！

それからはくすおを避ける日々が続いた。くすおがお祭りに行きたいと言えば私は行かないと言い。次の日お祭りにくすおが行かないと言えば私は行くというふうに徹底にな。ただ出店の人にメチャクチャ警戒されたんだがテレパシーで（ピンク髪の子はヤバイ）と聞こえてきた。くすおが何か超能力でしでかしたのだろう。腹立たしい。

お祭りの件もそうだが幼い頃のくすおは人前で超能力を普通に使う。だが私は超能力の恐ろしさに気付いてしまったが為に超能力を使う事を躊躇っていた。くすおは危険な存在だがそれは私も同じなのだから、と。現にくすおが様々なところで超能力を使ったせいで情報が出回り、テレビの取材やら父のブログ炎上やら、遂には某国の諜報機関に追われるに至れば超能力を使いたくもなくなる。某国は滅んだ。くすおが単身乗り込んでボコボコにしたらしい。やはりくすおは危険なやつだと強く思った。

この頃の私は完全にくすおを敵視していたが同じくくすおが嫌いという存在がいた。二歳年上の兄、斉木空助だ。

空助兄さんは一言で言うなら超の付く天才だ。何をやらせてもすぐにマスターして飽きてしまうような人だ。そんな天才は三歳にして挫折を味わった。私とくすおが生まれたことによって。天才であろうと超能力者には勝てない、それを認めたくないという理由で何度も勝負を挑まれたが何度も返り討ちにした。私が小学校に通うくらいからだろうか、空助兄さんに、

「栗子。楠雄とケンカしてからずっと仲が悪いね。なら僕と組んで楠雄をギャフンと言わせてやらないか？。知ってるだろうけど僕は楠

雄が嫌いだし。栗子よりもね。で、どうする？」

と、言われた。少し悩んだが頷いて了承した。超能力というものを見つめ治してから考えていたのだが、超能力を使って天才の空助兄さんを打ち負かすのはズルいんじゃないんだろうか。例をあげるなら空助兄さんがテストで全教科百点を取るが、くすおは先生を脳操作して九億点をとったりするのだ。（私はテレパシーで聞こえてくるカンニングを無視して全教科約九十点代だった）

それでも超能力を頭脳でもって勝とうとする空助兄さんを応援したくなったのだ。何よりくすおをギャフンと言わせるというのはとても魅力的に思えたのだ。

それからは空助兄さんと組む事になったのだが二対一で勝負するという訳ではなく、私を元に超能力を研究する事でくすおに打ち勝とうという作戦だ。それでも空助兄さんはくすおに勝てた試しはないのだが。私は陰ながら空助兄さんを応援していた（実際に応援していると伝えたりはしない。絶対に気を悪くする）。

小学生のいつ頃だったろうか。心の中でのくすおの呼び方が彼に変わった。心の中だろうと名前で呼ぶのが嫌になったのだ。

空助兄さんが中学生になってからは超能力の研究が活発化した。頭に変な機械を付けられたりもしたが、ずっと苦しんでいたサイコメトリー（物に触れるとその物の記憶が読めてしまうクソ能力）を、極薄の手袋を作ってくれた事で見たくない記憶を見てしまう悩みを解決してくれたのだから文句を言ったりはしなかった。

ある日いつものように頭の研究が終わり目を覚ますと体と頭に機械がついていた。

［なんだこれは］

「うーん？あーそれね、爆弾。おっと変に手を出さないでよ？外そうとしたり分解しようとしたら即爆発するようになってるから」

私は絶句していた。私は空助兄さんを信じていた。空助兄さんは

手を組むと言い出してから私に勝負を仕掛けた事はない。確かに内心では私に対しても嫉妬や劣等感を感じていたが、それでも空助兄さんの頑張りは知ってたいから、信じていたかったのに。

「知りたいよね、何でこんな真似をしたのかを。一言で言うなら、栗子はもう用済みなんだよねー。理由は二つ。一つが脳の研究の結果、超能力を弱体化する方法が分かったんだ。それで今栗子の頭に付いてるそれが超能力制御装置なんだ。これで楠雄にようやく勝てるよ。今まで研究に付き合ってくれてありがとう、ほんと感謝してるよ。そしてもう一つの理由。栗子、君は楠雄よりつまらないんだ」

［あぁあ!?］イライラ

「怒った?・まあ最後まで聞いてよ。楠雄は張り合いがあったんだ。うっとうしがりながらも勝負には手を抜かないんだ、そう超能力を使ってもね。でも栗子、君はどうだ?・超能力はズルい?はっ、馬鹿にしてるのかって話だよ。本当につまらない。だから僕にとってもう必要のない栗子には消えてもらうよ」

そうだった、空助兄さんは彼に負けるたびに段々と心境が変化していったんだった。小学校低学年の頃は

「くそっ!・また負けた!」

と、普通に悔しそうだったのに中学年には

「あーまた負けたー。次はどうしてやろかなー」

となり、高学年になる頃には

「あ〜〜また負けた〜〜〜〜。やっぱり僕に勝てるのは楠雄だけだよ〜〜〜（恍惚）」

と、残念になっていった。僕に勝てるのは楠雄だけっていうのには反論しそうになったがこいつに絡まれるのは嫌なので黙っていた。

つまり空助兄さんは、変態ドＭで今まで協力してきた私に爆弾を付けて処理しようとするトチ狂いカス兄だったという訳だ。

「そうだ忘れるところだった。栗子の体に付いてる爆弾は後二分以内

に時速百キロの速さで走らないと自動的に爆発するから。時間が経つと徐々に制限速度が上がっていく仕組みでね、十時間ぐらい走れば外れるよ。じゃ、頑張ってねー」

「……ハイクを考えておけ」

「俳句？本当に栗子は理解不能だね。まあ、楠雄より頭悪いし仕方ないかもねー」

私は捨て台詞の後、家を飛び出し走り続けた。時速百キロで走るなど超能力者には楽勝なはずなのに体が重く感じていた。それが頭についた機械、制御装置のせいだと気付いたのは走り始めて一時間後、時速二百キロで走っていた頃だった。制御装置を外すことで何か問題が起こらないだろうかと不安だったが特に問題なく外れた事で元の力が戻り、十時間、最高速度時速六百六十六キロで走り続ける事が出来た。その結果、超高速で走る少女「ターボロリ」の都市伝説が世界中で広まった。（当時の年齢は十一歳）

走っている間ずっと怒りの感情が支配していた。どうやってカス兄を再起不能にしてやろうかとか、やはり人は信用してはいけないんだとか、時間はあったから色々と考えを巡らせていたが、まさか十時間経っても爆弾が解除されないとは思わなかった。しかも

「ノコリ十秒デ爆発シマス」

と聞こえる始末。もう腸（はらわた）が煮え繰り返るどころの心境じゃなかった。決心した私は時速六百六十六キロの勢いのまま宇宙へ飛び出し宇宙空間で爆発した。威力は凄まじかったが結果的には服は吹き飛んだが体は無傷。

そして気付いた、超能力者は爆弾なんかでは死なない、と。

もっと早く気付くべきだった。何の為に十時間も走ったのだろう。これぱかりはカス兄の私は頭が悪いと言う言葉には肯定せざるを得ない。まあ基本的には私は頭がいいんだ。ミクロ単位で少しだけ抜けているというだけで。

さて、殺るか。

「あれ？生きてたんだ。まあ知ってたけどね、あれくらいの爆薬じゃ超能力者は殺れないことくらいね。それにしても爆弾が解除されないと最後まで気付かないなんてやっぱり頭が悪いね。でもいいデータが取れて良かっ――――」

［ドーモ、サイキ・クウスケ＝サン。サイキ・クリコです。カス、殺すべし］

「はぁ？意味分かんないんだけど。ていうか体動かないんだけど。やめてくれない？」

［ハイクを読め］バチバチ

「俳句ってもしかして辞世の句の事？。え、もしかして本気で殺ろうとしてる？は、はは、一旦落ち着こうか」

［イヤッ――――］

手に溜めたエネルギーを放出しようとしたところで誰かが肩に手を置いた。斉木楠雄、彼だった。

彼は真剣な目で黙って首を振った。私に殺しは止めろと言いたいのだろう。

まあ殺すつもりはなかったんだがな。致死量のエネルギーをぶつけたらすぐに時を戻すつもりだったからギリセーフだろ。

私が手のエネルギーを納める。彼は一つ頷くとまっ裸だった私の着ていた服が元通りになり、十時間走った僅かな疲れが消え去った。復元、私は一日戻しと読んでいるがそれをしたのだろう。

正直ムカついた。なに急に気安く肩を触ってるんだと、なに偉そうに諭してるんだと。怒りは収まらないが下手に暴れて昔のようなケンカになるのは避けたかった。

まだ肩に手を置く彼の手を払いのけ、イライラしたまま自分の部屋に戻って不貞寝した。

一年後、カス兄はイギリスに留学しに行った。まあ、私と顔を会わせる度に手とか目とか腹とかにエネルギーを溜めて射出準備をされたら居心地が悪いだろう。

……いやそれが原因じゃないか。エネルギーを溜める度に息を荒

くして興奮してたし。二度と帰ってきて欲しくない。
カス兄はいなくなったがまだ彼がいる。カス兄と一緒に何処かへ行ってしまえば良かったのに。
確かに小学校高学年頃には昔のように超能力を見せびらかすような真似はしなくなったしケンカの時からずっと私に危害を加えるような事もなかった。それでも天敵には違いはない。何時気が変わってジェノサイダーになるかも地球破壊爆弾を作りだすかも知れないんだ。
私は今までそうしてきたように彼には注意を払い観察を続けた。あの事件が起きるまでは。

時は流れ、私が中学三年生になって二、三ヶ月後、私にとって人生三度目の大事件が起きた。彼が私のコーヒーゼリーを食べていた。
超能力を使用を制限しているとは言え自動的に発動するテレパシーと透視などはどうしようもなく、それ故の疲れやストレスが溜まっていた。それに加え彼という危険人物が近くにいる環境では心も休まらない。そんな私の救世主がコーヒーゼリーだった。子供の頃はずっと甘い物だけが正義だったが中学生になるとコーヒーという伏兵、いやそれ以上の存在に気が付いた。そしてコーヒーゼリー。前までは甘いプリンの隣にある理解不能な存在に鼻で笑っていた。そんな自分を過去に戻って殴りに行きたいくらいに美味だ。更にそのままで美味しいコーヒーゼリーに元々好きだった甘いもの、ホイップクリームを足せば犯罪的な美味しさに涙が出る程だ。
ここまで言えば私にとってコーヒーゼリーが大事かが分かって頂けるだろうか。不本意だが同じくコーヒーゼリー好きの彼が、その彼が私のコーヒーゼリーを食べたのだ。これは戦線布告か?なら戦争だろうが!。
殺気立つ私を見て彼は不思議そうにしていた。もしかしたらそれが私のコーヒーゼリーだと気づかずに食べているのかも知れないが、馬鹿にしているだけかも知れない。意外にも答えは前者だった。
彼にそれは私のコーヒーゼリーだとジェスチャーで伝えると(意地

でもテレパシーは使わないと決めていた）すぐに土下座した。今現在なら嘲笑ってやるところだが、当時の私はただただ戸惑っていた。あの彼が？あの超危険生物が？腹立たしいムカつく彼が？素直に謝った上に土下座!?……人生で一番の衝撃だった。

私は彼を許した。何故？と聞かれたら答えに困るが、一つ挙げるとするならこれ以上彼の情けない姿を見たくなかったんだと思う。それにしても彼にテレパシーで許すと伝えたのだが、十年ぶりに彼と会話をしたんだ。どこか清清しい気分だったと素直に思う。

後日、彼がコーヒーゼリーの弁償だと言って彼が買ってきたコーヒーゼリーを投げつけて来た。投げた事に関しては憤りを感じたが、まさか本当に弁償するとは思っていなかったんだ。彼の印象が変わったような気がした。

それからはある程度は彼と話すようになった。彼は私が思っていた程悪い人間ではないと認めよう。それでも天敵であることは変わりがないのは事実。そこで交渉を持ち掛けることにした。正直に言おう、びびっていた。彼の逆鱗に触れる可能性がある以上平気ではいられない。

［おい、提案がある。真剣に聞け］

［…なんだ］

［お互い自分自身の危険さは十分に理解しているだろう。そこでだ。「お互い何があっても危害は加えない」これを誓って欲しい］

この時の私はポーカーフェイスを完璧に作り、体の震えは一切なかった為、内心ビビりまくっている事を覚られずに済んだようだ。

［…分かった。元々僕は面倒な事は嫌いなんだ。わざわざケンカの種をまくような真似はしない。誓おう、絶対にお前に危害を加える事はしない］

［良かった。私も同様に誓うぞ。……ところで私はコーヒーゼリーが食べたいんだ。買ってこい］

［何故そうなる］
［契約とは別に、私が上、お前が下だ。そうだろ？］
吹っ切れたんだ。もう彼は恐怖の対象ではない。
［ふざけるな。兄が上、妹が下だ。依然変わりなく。コーヒーゼリーが食べたいならお前が買ってこい。ついでに僕のも買ってこい］
［私に命令するな］
［僕に命令するな］
それからは暴言のオンパレードな毎日。天敵が近くにいるにも関わらず、それなりに平穏な日々をすごし今に至る。

長い上にやたら説明臭い夢を見た。
ダルい体を起こすと自分のベットの上にいる事に気付く。私は一階で気絶していた筈だが…。いつの間に瞬間移動したのだろう？
あくびをしながら二階から一階に降りてリビングのドアを開ける。すると彼がソファーに座ってテレビを見ていた。ふむ、面白そうな番組じゃないか。
［おい、なんで隣に座る。向こうのに座れ］
［私に命令するな。ここが一番見やすい］
くどいようだが彼はとても危険な私の天敵。だが契約を受けいれた以上は安全な存在。彼は一度した約束事は守るタイプの人間だ。反故にするなんてことはありえない。それでも後ろに立たれると今

でもゾッとするがそれ以外の場所なら安心すら出来る。

［ふん、勝手にしろ］

［そうさせてもらう］

ガチャ

「ただいまー！わあ！家がキレイだ！」

「くーちゃんとくりちゃんが協力してお掃除してくれたのね！ママ感激だわ♪。そうだ引き出物で貰ったのーこのチョコ、あっ」

ぱらぱら

じょーじ。

私は意味不明な言葉と共に意識が再び飛んでいったのだった。

第11ｘ　昔の斉木栗子のΨ難……それとＧ（（裏）斉木楠雄から見た斉木栗子という存在）

（虫の仕業ですな）ドサッ

ん？なんだ、近くに蟲師でもいるのか。

どうやら違ったようだ。千里眼で一階の様子を見るに掃除もせずに栗子が寝ているのが確認できた。サボっている…とは考えにくい。父さんならまだしも栗子はそんな真似しないだろう。恐らく虫を見て気絶したと言ったところか。……放っておくか…。

まあそうも言っていられないので一階に移動する。プレ○ターが付近にいるレベルで警戒しながらな。目標を発見、とりあえず安全な場所まで運ぶ……！。

栗子の体の上を走る黒い生き物　カサカサ

ヒュン！場所　アメリカのどっか

……あまりにショッキングな現場に流石の僕でも耐えられなかった。あまりの出来事に体が震えてしまってる。こ、こんなの残酷すぎる！。酷すぎる、栗子が何をしたって言うんだ！

……落ち着いて冷静になるんだ。あれは逃げちゃダメな場面だった。今も栗子はあのおぞましいアレと一緒の部屋にいるのだから。

瞬間移動をした後の三分間のインターバルが終わるのを待つのには慣れていたが今回ばかりは苦痛だった。ものすごい罪悪感に襲われたのだ。

……行くか。

ヒュン！　自宅　一階

よし、時間も経ったからなやつは栗子の体から離れたようだ。一先ずは良かった。

行動は早い方がいい。十分に警戒しつつ栗子に近づく。出来ることなら瞬間移動で運びたいところなんだが瞬間移動はついさっき使用してしまっているので三分間使用出来ない。

ならどうするか、栗子の背中と足を支えるように持ち上げる、いわゆるお姫様だっこだ。栗子にしてみれば屈辱的だろうが僕だってあまり気が進まないんだ。このまま安全な二階に移動しよう、音速でな。

……これで一先ず安心だ。適当な地べたに栗子を放置してもいいんだが……流石にな。今の僕は罪悪感で一杯ではち切れそうなんだ、これ以上の罪は重ねられない。栗子の部屋のベットに寝かせておくとしよう。出来る限り丁寧にな。

この後燃堂が家に来てやつを退治するのだが、これは今回の重要な話じゃないから省略する。別にいいだろ。

手がめっちゃ汚ない燃堂を追い出した後、掃除の続きを始めた。二階の掃除が僕の担当だが栗子が気絶した以上全て僕がやらなければならない。これは貸しに…と思ったが今回は…うん、いいかあんな事があったし。嫌な…事件だったな。

掃除済ませくつろいでいると栗子が夢を見ている事に気が付いた。それは懐かしい記憶の夢だった。

僕が子供の頃を一言で言うなら「子供らしい子供」だった。テレパシーが原因で二歳で人間に絶望したりもしたが基本的には純粋無垢だったように思う。そう、その純粋さ故に栗子を傷つけたと言える。

僕と栗子の仲が悪くなったきっかけ、それがプリン事件だった。今にしてみればたかがプリンのせいでこんな事になるなんて馬鹿馬鹿しく思う（コーヒーゼリーならまだしも）。

昔の僕は栗子以上に負けず嫌いだった。一度プリンの為にケンカを始めたならたとえ仲良しの栗子だろうと負ける気はなかった。とにかく勝ちに行く、そう超能力の全てを使ってでも何がなんでも勝つ。その必死さが栗子にトラウマのようなものを植え付けてしまっていた事に当時の僕は気付く事が出来なかった。

判定勝ちした僕は急いで幼稚園に戻った。わくわくしながら出入り口の戸を開けると、そこには美味しそうにプリンを食べる遊び友達の姿があった。この時の気持ちを何と言えばいいのだろうか。敗北感？虚脱感？挫折感？。今まで感じた事のない感情に僕は穏やかではいられなかった。

子供の時とは言えこの僕だ、泣き叫んだりはしない。食べられてしまったものはどうしようものないと理解出来る。ただどうしてもこんな風に考えてしまうんだ。

栗子が負けていれば僕がプリンを食べれたんだ、と。

気が付くと後ろに栗子が立っていた。僕の心の声を聞いたのだろう。とても傷付いた、そんな顔をしていた。…その表情は今になっても思い出せる程に印象的だった。

すぐに表情はうって代わり怒りの表情になり僕に反抗的な言葉を投げ掛けてくる。当時の僕に取り敢えず謝るという選択肢はなく、売り言葉に買い言葉で口喧嘩は両親が迎えに来るまでずっと続いた。

この時から約十年間栗子とはずっと仲の悪い状態だったのだが両親には特に迷惑をかけた。両親は本気で心配してくれて頻繁に僕達を仲直りさせようと奮闘してくれた。少し…いや、かなりうっとうしかったが素直に感謝している。

家に帰ってからも口喧嘩は続いた。テレパシーで伝えるまでもなく心の中の悪感情は相手に伝わる。今考えてもあれで仲直りなんてとても無理だろう、そう思うな。

栗子がある決意と共に僕の元へやって来た。言いたい事があれば

テレパシーを使えば近付いてくる必要はない。つまりそれが決意の表れ。ならば僕もそれに応える必要経費がある。
ここで引いていればまた結末は違っていたのだろうが何度も言うが僕は負けず嫌いなんだ。間違ってもそんな事はしなかっただろう。
「お前の考えている事なんか聞きたくない」
この言葉をお互いに同時に言うとそれから一切の栗子の心の声が聞こえなくなった。始めのうちは喜んださ、清々したーって感じにな。しかし月日が経つと徐々に徐々にゆっくりとだが、淋しい、そんな感情が溢れ出てくるのを確かに感じていた。
子供の頃の僕はとにかく自由だった。お祭りに行けば超能力で景品という景品をかっさらい、ゲームセンターに行けばモグラ叩きゲームを破壊した上にクレーンゲームの景品をワンコインで全部持っていった。
クレーンゲームはヨーヨー釣りや金魚すくいの感覚でやったので興味のない景品でも構わずにやったので、いらない景品はほとんど父さんにやっていた。父さんは気持ち悪いほど喜ぶのを冷ややかな目で見ていたのを覚えている。そして大漁の景品を持って帰る僕もまた冷ややかな目で見られていた。栗子にな。
ケンカ後の栗子は今現在と同じように超能力を人前で使う事を自粛するようになっていた。そんな栗子を鼻で笑うように僕は人に見せつけるように超能力を使う。
幼稚園の友達や小学校（低学年の時だけ）の友達なんかには超能力を自慢気に使っていた。結果的には某国に拉致されたり（某国は潰した）、最近になって小学生の時の同級生に超能力者なんですか？なんて聞かれる始末だ。今にして見れば間違いだったなと分かるがそれでも超能力を使い続けた。
もうご存知だと思うが僕には兄がいる。斉木空助、天才なんて呼ばれてるやつだ。僕はとにかくこいつが嫌いなんだ。

あいつは僕の天才的頭脳で超能力に勝って見せるだなんて下らない考えの持ち主で、何かと勝負を仕掛けてくるうっとうしいやつだ。
そんな空助の行動に対する僕の行動はたった一つ。絶対に勝たせない、だ。
鬼ごっこを挑まれれば瞬間移動に透明化、空中浮遊に体に帯電して触ると感電するようにしたりなんかもしてとにかく勝たせたりなんかしない。他にはあいつが作ったコンクールなんかに出せば確実に優勝出来そうなロボットを自慢してきた時などは僕の空き箱ンガーZのミサイルパンチで空助ロボの首を三百六十度回転させて破壊したりもした。
あいつを負けを認めざるを得ない状態に追い込んで半泣きで捨て台詞を吐いて逃げ出すのを見るのはとても楽しかったな。いい思い出だ。
ある日を境に空助が超能力の能力限界を理解しての勝負が増えた。理由はすでに知っている。あいつと栗子が手を組んだからだ。
あいつは栗子を元に超能力の把握、研究、観察、実験、超能力成長率の測定などをしていた。確かに厄介だがそれで僕に勝てるはずもなくあいつは僕に全敗した。それでも僕に勝負を挑み続けるのだが、徐々に負けた時の思考な表情が気持ち悪いものになっていった。ほんと迷惑極まりないな。
そんな事より問題は栗子があんなやつについたという点だ。別に構わない、僕と敵対するってならそれで。栗子にとって僕が天敵であるように僕にとっても栗子は天敵なんだ。やろうと言うのなら僕は全力で叩き潰すだけだ。
小五の時の休日のある日、空助はニヤつきながら僕の方へ近寄ってきた。
「おはよう！楠雄。今日はいい天気だね。と・こ・ろ・で、楠雄の大嫌いな栗子は今どうしてると思う？」
［知るか。どうでもいいな、あんなやつの事なんて。……！］

あいつはニヤついたままわざとらしく僕が朝起きる前の出来事を思い起こす。テレパシーによって自動で聞き取ってしまう。
――いつものように研究すると騙して寝ている栗子の体に二つの装置を取付ける――
――　一つは超能力制御装置。これを着ければ赤子同然だ――
――二つ目は速度感知機能付き爆弾。走り続けないと大爆発を起こす僕の対超能力者用の発明品。今栗子は世界マラソン中――
内容をまとめるとこんな感じか。所々に自慢が入っていて鼻に着いたのでカットした。

「どう？感想があるなら聞かせて欲しいな」
［頭イッちゃってるな］
「フフ、そう？残念だなー楠雄も栗子の事嫌いでしょ？きっと喜んでくれると思ったんだけどなー」
［…そうだな］
「フフフ、そう言うと思ってたよ。そんな楠雄に朗報だよ！。実はあの爆弾は超能力者を殺るには火力不足なんだけど制御装置を着けた状態では話が変わってくるんだよねー」

！。…まさか！こいつガチで頭狂ったんじゃないか？

「アッハッハッハ！やっと気付いたかい楠雄。このままだと栗子は大火傷を負うことになるね。アッハッハッハ！」

爆死はしないんだな。…いや大火傷も十分不味いだろ！

［制御装置を外せばいいだけの話だろ］
「そうだね。でも制御装置を外すと脳に刺激を与えて体を動かせなくする機能をつけちゃったんだー。まあ数秒だけだろうけど。でも体の爆弾が爆発するのには十分な時間だよ」
［……クソ野郎が］

「んっん～どうしたのかな楠雄君。もしかして栗子ちゃんを助けたくなったのかな～？でも助けに行くにしても栗子の居場所を探すのに時間がかかるんじゃないかな」

栗子をテレパシーで探す事は出来ない。だがテレパシーで爆走している小五女子の情報を集めたり千里眼を使って虱潰しに探す方法もある。だがこいつの言う通り時間がかかる。

「僕の計算だと栗子が制御装置を外した方が速く、そして楽に走れると気が付くのには後五分と言ったところかな。それまでに頑張って探してみるのも悪くはないとおもうけど…、一つ提案があるんだ。楠雄、この制御装置を付けてくれないか」

［は？何故そうなる］

「実は制御装置にもう一つ設定を付けてあってね、二人の超能力者が制御装置を付けると、外す時に脳に刺激を与える機能を停止させるんだよ。…それで？付けてくるよね？」

つまりこいつは僕に制御装置を付ける為に栗子を出しに使った、と言うわけだ。ほんと性格悪いな。まあ栗子を不憫だと思わないでもないが僕に敵対したんだから自業自得だろう。

こいつの言う通りにするのは癪だがここは黙って従おう。僕はこいつから制御装置を受け取り頭に刺す。体に溢れていた力が弱まったのを実感した。

「大好きな栗子の為なら素直に従う、思っていた通りに運んで良かったよ」

［勘違いするなよ。別に栗子の為なんかではなく制御装置を付けたのはおねちょ（寝ている間に無意識にしてしまう超能力）を治す為だ］

「そんなのどうだっていいよ。僕にとって大事なのは、楠雄が制御装置を付けた今なら楠雄に勝てる確立が大幅に上がったて事だけだからね！まずは一発食ら、へぶぅ！」ヒューン　ドゴーン！

僕に勝てる確立が上がったって？確かに零から一京分の一くらいにはなったんじゃないか？
ビンタして壁まで吹っ飛んだが、あいつは結構元気そうにしてた。まあまあの強さでやったんだがな。やはり弱体化しているな。

［たとえ今の僕が赤ん坊の時と同じレベルの能力まで下がっても余裕でプロレスラーを破壊出来るくらいの力はあるんだ。残念だったな］
「うへへへ～やっぱり楠雄は強いな～。そんな楠雄をいずれ倒して見せるぞ～」（恍惚）
［うっわ、きっも］
「さーて次の手を考えるかな。あ、今栗子の制御装置から通信が来てたんだけどなんの問題もなく外れたってさ。爆弾の方もまだ爆発してないみたいだし。うんうん、一安心だねー」

…まだ？。と言うか元凶が何言ってるんだ。
栗子は元気にマラソン中だが火傷の心配がない以上助ける必要はなくなった。
正直な話、栗子の所に直接行って助けると言うのは嫌だったりする。瞬間移動で近くに行ったりすれば警戒して攻撃を仕掛てくるかも知れない。僕はこの時はまだ栗子の心を読めないからな。僕にとっても栗子が恐ろしい存在であることには変わらない。
僕は栗子の事なんか忘れて超能力で物を吹き飛ばす事のない現状に感激し、そして満喫していた。
それから九時間後キリングオーラ全開の栗子があいつの前に現れるのだった。

（く、く、くす、楠雄！栗子が僕の元に殺りにやって来た！このままじゃほんとに殺されるかも！助けて!!）

ふむ、いい気味だな。よし、ギリギリで行こう。それにしてもあいつの悲痛な叫びを聞くのは気分がよかったな。
そろそろヤバそうだ、行くか。ヒュン！
バチバチバチ！
瞬間移動するとそこには赤黒のオーラが見える気がするほど激怒して腕にエネルギーを溜めている全裸の栗子とイスに座ったまま微動だにしないで固まっている空助の姿だった。
このままだと空助は真っ黒コゲになるだろう。流石にそれは不味いので栗子の肩に手を置き止めさせる。
だが肩に置くのは失敗だったな。置いた瞬間すごい勢いで肩が上がった。かなり驚かせてしまったがそのおかげで赤黒キリングオーラが消えた。
それでも怒りは完全に消えた訳ではないようで苛立ちながら僕の方へ振り返る。栗子が僕の顔を見るのを確認して僕はゆっくりと首を振る。それを見た栗子は怒りが増したようだが腕のエネルギーを収める。
どうやら僕の言いたい事は伝わらなかったようだ。実はこの時に、

［全殺しは流石に不味い。せめて半殺しにしとけ］

とテレパシーで伝えていたのだが無視された。それが無視ではなく聞こえていなかったと栗子の夢を覗き見ている今現在知った。
僕は栗子に復元を使い全裸（おそらく爆発で吹き飛んだのだろう）から服を着た状態に戻す。僕に気をつかわれるのが嫌だったのかまた苛立ちながら部屋から出ていった。

「相変わらず嫌われてるねー。まあ、今回しでかした僕も同じくらい嫌われたかな」
［礼も言わずにまず言う事がそれか。まったく呆れるな］
「あーそうだね、ありがとありがとーっと。そんな事より栗子としたいんでしょ。仲直り」

[…別にそんな事はない]
「ふーん、そう。僕としては楠雄と栗子が仲直りしてくれた方が都合がいいんだ。今回の出来事が仲直りのきっかけになったりすると踏んでいたんだけど、僕もまだまだだね」

やはりこいつの思考回路は読めない。やり方は酷いが僕達の事を考えてくれているのか？

「フフ、協力する二人の超能力者に打ち勝つ。なんて甘美で素晴らしい響きだろう。いつか成し遂げて見せるぞ～。ウフ、フフフ」(とろけ顔)

そんな事はなかった。
一生来ない未来に思いを馳せる空助を置いて僕も部屋から出た。

仲直り、か。

一年後空助は海外留学すると言って家を出た。行き先はケンブリッジ大学だそうで高校を飛び級したそうだが、義務教育はどうしたんだよ。天才だから成せる事なんだろうがあんなやつが天才として生まれるなんて世の中どうかしてるな。

さて問題は栗子だけになったな。
正直な話この仲の悪い関係をいい加減にうんざりしていた。前々から栗子には警戒され家にいる時や登校中(母に学校が一緒なんだから二人揃って行きなさいと怒鳴られた)なんかは僕が下手な行動をしないかとガン見してくる。そのせいで

「もしかして栗子ちゃんってお兄さんのこと好きなんじゃないの」コソコソ
「えーそんな感じの顔してないよ？」コソコソ

（うわーあんなに見られてら。もしかしてヤンデレってやつ？コワイ！）
（羨ましいぜ！俺もあんなヤンデレ妹が欲しかったぜ！）
などと勘違いされて目立つ毎日だ。栗子も聞こえているのだろうが目立うことより僕の警戒の方が重要なんだそうだ。
だめだこいつ…なんとかしなければ…。
でも言ってしまうと僕より栗子の方が危険度は高いぞ。
栗子は僕より感情を溜め込みやすい傾向にある。そして溜め込んで爆発するタイプだ。理性が働かず殺っちまう可能性もある。
僕か？僕は適当に超能力を使ってガス抜きするぞ。ムカつくやつに永遠と、今では懐かしいタラコのＣＭ曲を頭の中で流したりしてな。今現在の栗子もそんなガス抜きはするようになったが昔は超能力を使わないようにしていたからな。
それと栗子は思い込みが激しいところもあるな。僕の印象が悪い上に数年間会話がなかったせいか僕を悪人かなにかだと思い込んでいる。
残念だが的外れだ。確かに人に嫌気がさして滅ぼしてやろう、そう考えた時期が僕にもありました。そうしなかったのは温厚で穏やかで優しい母の影響が大きい。母に迷惑はかけたくないのだ。後なんか人類を滅ぼそうって考えが中二病っぽいし。
母とついでに父が一番に気にしている栗子との不仲をなんとかするのも一つの親孝行だろう。
だが世の中そううまくいかないものだ。
栗子にテレパシーを送っても何の反応もない。僕は完全に無視を決め込んでいると思っていたのでへそを曲げてしまったな。どうしてもの場合は目の前で頭を下げて気は進まないが口に出して「あの時は、ごめん！」なんて言おうと思ったが、僕のほんの少しだけ高いプライドが邪魔して行動に移す事が出来なかった。
そのままずるずると時は流れて中学二年の六月頃、僕にとって失態とも転機とも言える事件を起こす。

栗子のコーヒーゼリーを食べた。食べてしまった。
自分でも最低な事をしでかしたと思う。だが気付かなかった。まさか黒いコーヒーゼリーの入った容器の側面に黒いペンで名前を書いていたとは…。
ある日学校から帰宅して麦茶でも飲もうと冷蔵庫を開けるとコーヒーゼリーが一つあった。きっと両親が買ってくれたのだろう、そう考え早速食べ始めた。
後から来た栗子は僕を見て驚愕の表情をしたと思えば次は真剣な顔つきで僕を見る。
何だ、僕が何かしたか。心当たりのない僕は困惑するしかない。
栗子は真剣な顔つきのままコーヒーゼリーを指差し、次に自分を指差す。察した。次にする僕の行動は早かった。
土下座。
言っておくがもう二度とやるつもりはない。人生で最初で最後だ。こういうのは本来は父の役割だ。
考える前に行動していた。僕みたいな超能力者にだって悪は分かる。今回ばかりは完全に僕が悪だ。
土下座しながら思ったのだがこれはいい機会じゃないだろうか？この僕がわざわざ土下座までして謝るなんて今後一切ないんだ。ならあのプリン事件の事も一緒に謝ってしまおう、そう考えた。誠実さに欠けるような気がしないでもないが謝りたい気持ちは確かにあるんだから別にいいだろ。

［栗子のコーヒーゼリーを食べてしまった事は本当に申し訳ない。反省している。……それといい機会だからもう一つ謝りたいんだ。もう十年も前になるか。あのプリン事件の事ずっと謝りたかったんだ。僕が悪かったんだ、謝らせてく――――］［許してやる。だから土下座はもういい］

僕がまだ喋ってる途中でしょうが！せっかくこの僕が謝ってるっ

ていうのにその高圧的態度はなんだ!?
当時の僕は怒りを顔に出さないように心の中で叫んだわけだが、今にしてみればそれが僕のテレパシーが届いてなかったんだと分かっているからな、納得だ。
これが切っ掛けで栗子に対してテレパシー能力が使えるしオートで心の声も聞えるようになったのだが、何故か栗子は僕の心の声が聞こえないようだ。
詳しい事は今でも不明だが原因は栗子にあるのではないかと考えている。何故そう考えたか、僕がいくらテレパシーで話かけても反応しないのに、栗子が始めて僕にテレパシーを使ったら普通に通じた上に僕もテレパシーで話せるようになった。つまり栗子が原因。単純な推理だが栗子のせいだと言っても間違いではないはずだ。
原因が栗子にある以上栗子が僕の心の声が聞こえない理由は分かる筈がない。でもそれはそれでいいじゃないか。僕にしてみれば一人でも心の声が聞こえない方が静かでいいんだ。
この事件が切っ掛けで栗子は僕に少しは気を許したようで必要最低限の会話をするようになった。例えば

［風呂空いたぞ］
［分かった］

だとか

［コーヒーゼリーあるぞ。食うか］
［食う］

なんてクソつまらない会話だがケンカ中は基本無視だったんだ。どうしてもの場合は両親に代わって言わせてたからな、ずっとマシになっただろう。
そんな会話でも両親には仲直りしたのが分かったのか号泣して「よ〝か〝っ〝た〝よ〝か〝っ〝た〝」などといいながら肩をバシバシ

叩いてきたりしてうっとうしかったが、まあ僕もよかったと思ってるし一回目は許してやった。二回目は許さなかった。

会話するようになったとは言え、どこかぎこちなさがあった。栗子にしてみれば心の声が聞こえない僕はまだ危険な存在なんだとか。心の声が聞こえる僕としても危険人物と思われているのが分かっていながら気軽に話しかけれるほど馬鹿じゃない。

そんなところに栗子からのあの契約の持ち掛けだ。契約内容は「お互いに危害は加えない」。元々僕は人に迷惑をかけるのがいやなんだ。そんな契約を持ち掛けなくても危害を加えるつもりはなかったんだがな。とは言え僕としてもこのまま栗子に怯えられたまま暮らしていくのも居心地が悪いからな。それで不安が消えるのなら願ってもない話だ。ただそれが原因で余所余所しくなられても良くないのだが……そんな予想を裏切っておもいっきり高圧的に来た。もうこれで恐れる心配はなくなったんだそうだ。……ふふ、まあそれも悪くはない。それでこそ僕の妹だ。それくらいの方が僕もやりやすくて助かる。

それからは平穏に暮らせてる。何度か栗子が暴走しかけそれを止めたりもして面倒な事も起きるが、反省した栗子がお詫びにコーヒーゼリーを渡してくるのでむしろプラスだ。

栗子の夢を覗き見ながら自分の過去を思い馳せていたがどうやら栗子が目を覚ましたようだ。

僕は誤魔化すようにテレビの電源を点けてソファーに座る。まだ心の声が聞える事がバレる訳にはいかないんだ。

リビングに入った栗子はテレビを見ると言って僕の近くに座る。

少しうっとうしさを覚えるがまあそれだけ僕を信頼したのだろう。悪くはない。
少しして友人の結婚式から帰ってきた両親は家がキレイになっているのに気付き二人が協力してえらいぞ的な事を言って誉めたが、実際に掃除をしたのは僕一人で栗子は寝てたぞ。まあ面倒な事になるからわざわざそんな事言ったりしないのだが。

「そうだ引き出物で貰ったのーこのチョコ、あっ」

母さんはチョコを落とした。そう、あれはチョコだ。形があれに似てなくも…いやどう見てもチョコだ。それ以外にない。

（じょーじ）

おいやめろ！今ゴキブリ宇宙人の鳴き声を聞かせるんじゃない！……よし、なんとか乗り切った。下手したらパラオ辺りに逃げてたかもな。
だが栗子はダメだった。まあ頭に落とされたら気絶しても可笑しくないか。

「まあ、くりちゃん大丈夫!?」
「おいおい気絶してるじゃないか！。お、おい楠雄、救急車だ！。えーと１１１９だっけか!?」
［一つ多いぞ。落ち着け、たかが気絶だ。すぐに目を覚ます。それに気絶なんて小説や漫画でよく見るから珍しくも何ともないだろ］
「そ、そんなもんなのか？」

そう、一応ギャグ小説だからな。十中八九大丈夫だ。
だが現実には気絶なんてそうあるものじゃないからな。本当は救急車を呼ぶのが正しいからそこのところは覚えいって欲しい。

［僕が栗子の部屋まで運んで寝かせてくる］
「…楠雄、お前、兄らしくなったな…。感動して涙が」パリィン「ちょっなんで眼鏡割るの！」
［下らない事を言い出すからだ］

いい加減泣くな、学習しろ。余計な時間を使ったが今日二回目の俗に言うお姫さま抱っこをして栗子を運ぶ。

「パパ、私もお姫さま抱っこされたい♥」
「ああいくらでもしてあげるよ、ママ♥。でもちょっと待っててね今散らばった眼鏡の破片を寄せるから」
［僕が直してやろう。感謝しろよ］復元
「いや最初から壊さないでよ！」

やれやれだな。

さて、そろそろ締めに入るか。
そうだなタイトル詐欺にならないように僕が栗子をどう思っているかについて語って終わろうか。
前にも言った気がするが両親と同じくらいに大事に思っている。家族だからというのが一番の理由なんだが、そうだな、心の声が聞こえない時期は仲の悪さをなんとかしたいと思いつつも、やはり僕でも警戒してしまっていたな。だが心の声が聞えるようになってからは、流石双子の妹と言ったところか、僕と考え方、行動、何かに対する感情なんかがほぼ一緒なんだと改めて気付けた。だからだろうか、なんか放っておけない。それと栗子の心の声を聞ける分僕の方が有利に動けるからには何かあったら助けるのが道理なんじゃないかと思うしな。

栗子は今でも僕をまだ警戒している。マシにはなったがな。
確かに人類上たった一人の天敵かも知れないが僕が人類最強の味

方だって事も知ってもらいたいものだな。

第１２ｘ　電車に乗るΨのルール

私の名前は斉木栗子。超能力者であり、同じく超能力者の斉木楠雄の双子の妹だ。

……もう１２ｘ目で話の総数で言えば２３話になるが、そろそろ私の名前やなんかは覚えて頂いた頃ではないだろうか。それでも挨拶は大事だからな、これからも言い続けるぞ。

突然だが「いらない超能力紹介のコーナー」だ。

私の超能力は無駄に種類が豊富だ。だがほとんどが使い勝手が悪い能力ばかりだ。それでも使いようによっては役立つ時もあるんだが、全く使用用途が見つからない能力があるのでそれを紹介していきたいと思っている。

それでは早速紹介しよう。その名も「創造」。物を作り出す能力だ。「それ、ヒロアカの八百万のパクりじゃないか？」と、考えた貴方は、僕のヒローアカデミアのファンか、もしくは斉木楠雄のΨ難の二十巻を読んだかのどちらかだと予想出来る。

残念だが、この「創造」という能力、欠陥しかないんだ。

正直、今からする話は投稿者の勝手な妄想に過ぎないがまずは聞いて欲しい。原作で斉木楠雄が記憶消去をする際に使った「バールのような物」がそれ、つまり「創造」に当たると考えている。「のような物」とついている通り、それは「バール」ではない可能性があるのだ。つまりアポートで取り寄せた物ではなく、「創造」して作り出した、バールのようで本物とは違う物と考える事が出来る。

…またうまく説明出来たか自信が持てない…。なんとなくで分かってくれ。

私の兄、斉木楠雄、彼はバールと制御装置を外した時に限るがマトリョーシカのみ創造出来る。……バールはまだしもマトリョーシカは使い道はゼロだな。

そう、創造のデメリットは作り出す物が限定されるところにある。

そして私の場合はバールもマトリョーシカも創造出来ず、別の物を

創造出来る。実際にやってみよう。
手のひらにエネルギーを溜めてから念じる。
「創造」！　バッ
そして出来上がった物がこれになります。
材質は鉄、手のひらサイズで平べったい、刃が四つで真ん中に穴が空いている。創造だけに想像出来ただろうか？
そう、手裏剣だ。ある人にしてみれば手裏剣ではなくスリケンなんだそうだがどうでもいい。はっきりしているのは平和な世の中でこれは全く使えないという事だ。前に私はニンジャではないと言ったが、これでは自信なくなってくるぞ。
ついでに制御装置を外して創造を使ってみたら知恵の輪が出た。まるで意味が分からんぞ。
さて、お遊びはここまでだ。作り出した手裏剣と知恵の輪はいらないから消滅しておこう。ジュワ

今日は休校日だ。この日を機会に行ってみたい店があるんだ。
一旦話を置いといて皆さんの中には「急に休校日なんて横暴だ。原作でもやってないんだぞ！」と言いたい方もいらっしゃるかもしれないが、許されるんだなこれが。知っているか？頭にギャグと付くものは大切な日だろうと話の都合で変えられるんだ。例をあげるなら、こち亀で大原部長に誕生日プレゼントをあげようみたいな回があったんだが、注意書で、大原部長の誕生日は作者の都合で変えられます、的な事を書いてあったんだ。つまりはそういう事だ。
よし、話を戻すぞ。行ってみたい店というのはコーヒーゼリーの美味しいカフェなんだが……まあ読者も予想通りだろうな。前々からテレコミ(テレパシーで聞こえた口コミ)で噂になっていたからな、これは行かざるを得ないだろう。
そんな訳で現在、目的地に行く為に電車に乗っている。
瞬間移動を使った方が早いんだが、折角の美味しいコーヒーゼリーだ、更に美味しくいただきたい。その為に無駄に時間をかけた方が期待値と満足感が増す事だろう。

それにしても平日とはいえ、朝からそれなりに乗客がいるな…これは疲れそうだ。私にはテレパシー能力があるからな、今だって

（あーだっる。朝出勤だっる）
（こい…こい…ＳＳＲ（エスエスレア）キャラ武器！…こい！……が、ダメ！目の前のスマホに映るのはＲ（レア）武器キャラなし。…はっきり言ってゴミ……これが現実……圧倒的ガチャ運の無さ……！）
（この大規模作戦の時期は一分一秒無駄に出来ねぇ…が、中破か…どうする…進撃か、撤退か…！）
（なんかしゃかしゃかうるせぇな）

このように心の声がうるさくて敵わないのだ。ふむ、最後のやつが心の中で言ってたしゃかしゃかは目の前のＤＪ風の男だな。ヘッドホンから音漏れしているようで、周りからうるさいという心の声がうるさい。なので私としてはどうでもいいがこの迷惑ＤＪをこらしめてやるとしよう。
サイコキネシス。スマホからイヤホンを抜く。ブッ

『――――リキュア！二人は、プリキュアー！』

…初代かよ。
まあ別に何聞いてもいいが公衆の面前でこれは恥ずかしい……なにぃ！こいつ…微動だにしていない！。しかも平常のままだ！

（眉一つ動いてねぇ…こいつは真の漢だ！。迷惑だけど）
（こんな状況に俺がなったらセプクも辞さないぞ。なんて肝の座ったやつ！。迷惑だけど）
（こんなのに痺れも憧れもしないが…カッコいいぜ。迷惑だけど）

乗客もこの威風堂々たる姿に関心している。迷惑だけど。
次の駅でＤＪ男はプリキュアソングメドレーを垂れ流しながら颯

爽と消えていった。……なんだったんだろうか…。
空いた席をおばあさんに譲ってあげた。私にとって立ち続ける事はなんの苦にもならない。
しばらく電車に乗っていると雑談が聞こえた。二人組の男で、私服だが若いところを見るに、私と同じＰＫ学園の生徒かもしれない。

「さっきからやってるそれ、なんてゲーム？」
「これ「山娘これくしょん」ってゲーム」
「は？パクりじゃね」
「タイトルはね。でもなんか許されてるっぽいし、結構面白いよ」
「ふーん。どんな内容？」
「妖怪とか幽霊とか都市伝説とかを題材にした女の子と仲良くなって山の悪霊と戦う、って感じかな」

ふむ、悪くはないゲームのようだが、基本的に私は実機のゲームをやるだからそのゲームをやる事はないだろう。

「あー、内容聞いて思い出したぜ。あれだろ、悪霊を倒すと秘湯が解放されて女の子と混浴出来る、てアレだ！」
「そうそうそれだよ！僕もそれ目当てでやってる！」

人前で話す内容じゃないな。声も大きくなってきたし注意するべきか…いや、それだと目立ってしまう。

「どんなキャラがいんだよ！見せろ見せろ」
「いっぱいいるんだけど、僕の一番好きなのはこの「ターボちゃん」かな」
「おま、ロリっ娘じゃん！イイセンスだ！。あれだろ都市伝説のやつだろ」
「うん。都市伝説「ターボロリ」がモデルなんだ。あまりの速さに誰も目で追えないんだってさ」

「俺も知ってるっつーの。目撃者も何人か居て「幼い女の子だった」とか「あまりの速さで服がボロボロだった気がする」とか言ってたんだろ」
「うんうん。そういった証言から「ターボちゃん」もそういう面が反映されてて、プラスどじっ子属性までついてるんだ」

今のはおそらく昔世界中を爆走してた私の事なんじゃ……。いや、他にいたんだろう、めちゃくちゃ速く走れる女の子が。

「それでね、これが「山これ」の看板キャラだよ」
「あーこの娘ね！この娘ならどっかで見た事あるわ」
「やっぱり人気なんだね「ピンクめがねちゃん」」

え？……偶然だよな？偶然私と同じ特徴ってだけなんだろ？

「わりと最近出来た都市伝説「秘湯の若娘」がモデルなんだ。有名登山家のよっさんって呼ばれてる人のブログから広まったんだ。秘湯に浸かっていたら若い裸の女の人が表れ、突然の事に気を失ってしまったよっさんと連れの人は、その女の人が介抱してくれた、って話からその秘湯に裸の女の人が見たいって理由で行列が出来るほど人気になっちゃってね、今では旅館になってて予約が一年先まで取れないほど繁盛したんだ。今では「秘湯の若娘」は第二の座敷わらし的存在になってるんだ」

これ完全に私だ。くそっ。

「「秘湯の若娘」の実態は不明でね、連れの人が言うには透けて見えたらしくて幽霊なんじゃないかっていう反面、よっさんには透けて見えるどころかくっきり見えて、よく思い出してみると角のような物が生えていたきがしたらしいから鬼とかの妖怪なんじゃないかっていう説もあるんだよね」

「面白い話だが俺が気になっているのはそこじゃねぇ」
「なに？」
「そのゲームの「ピンクめがねちゃん」。言うまでもなくピンクの髪だ。ピンクは淫乱。その娘は淫乱？」
「ｅｘａｃｔｌｙ。その通りでございます」
「気に入った～！俺もやるぜ「山これ」！」
「ようこそ、（エロい）男の世界へ」

前言撤回だ、クソゲーだこんなもん。
不愉快だ。腹だたしい。むかつく。よっさんも、山これ制作会社も、この二人組も。
注意しようにもさっきの会話で話が終わったのか黙ってスマホを睨んで山これやり始めやがって。むしゃくしゃする。

降りる駅までは後、二十分くらいか。長いな。
今回停まった駅では乗客が降りるより乗る割合が高かったのかかなり混んでしまったな、やれやれ。心の声がうるさすぎるな、まったく。

（ぐへへ、こんだけ混んでりゃ触っても平気だろ…）

はぁ、なんでこんなうるさい中でクズの言葉を聞き取ってしまったんだろう。気付いた以上助けてやるが、いったい誰が標的に……
（くくっ、こういう地味な子の方が抵抗しないからやり易い……ピンクの髪に角のようなヘアピン…もしかして「ピンクめがねちゃん」のまねか？オタクは更にやり易いぜ。へへっ）

私かよ！
あーよく聞いたら後ろから心の声が聞こてくるよ…はぁ…。何故私なんだろうか。銅像じゃだめなんだろうか？

まあ私を狙うというならそれはそれで対処しやすくて助かるが。

（次に社内が揺れたらどさくさに紛れて触ってやるぜ……今だっ!!）

さわっ

（は!?硬い！かっかっちゃぞ!!）

勘違いしないで頂きたいが私自身を硬くした訳ではない。する事も出来るが、それだと触られる不快感は残る。なので硬くしたのは服だ。更にサイコキネシスで肌と服の隙間に空間を空ける事で不快感は一切ない。

だから言ったろ、銅像じゃだめなんだろうか？ってな。

（こいつ！服の下に鉄板でも入れてんのか!?くそっ、こうなったら抱きついてやる！）

なにが、こうなったら、だ。変態の考える事はよく分からん。

まあ、いいさ。超能力者を襲おうとしたらどうなるか、見せてやろう。

私は混雑してる中、無理矢理振り返って後ろにいた変態に私から近付いていく。

（ん？なんだこいつ、自分から抱き付いてくるなんて、もしや痴女…）

「って、ぐわあぁぁぁ、痛い痛い痛い!!」

あれ？どうした、しんだのか？おかしいな、ただハグをいただけなんだがな。

いや、生きてるな、ぎりぎりだが。変態の悲鳴と体の骨が折れる音で電車内が阿鼻叫喚だな。まあこのままだと私は刑務所行きだが、斉木楠雄、彼には出来ない私だけの能力があるからなんとかなる。

私は人に注目される中、ゆっくりとした動作で自分の胸に手を置

く。そして体内時計を十五秒だけ戻す。カチッ

ドーーーーz――――ン

(な、なんだ何が起きた!?私はさっきあの女に抱き付かれて……いやっ、夢だ、夢に違いない!そうでなければ体がなんともない事も車内が騒然となってないのもさっきのは夢だからだ!)汗だらだら

ところがどっこい。現実でした。(過去形)

超能力　計一分時戻し、だ。十五秒だけ世界は巻き戻り、先ほどまでの出来事はなかった事になった。乗客も先ほどの出来事の記憶は当然ない、が、私と変態のみが記憶を受け継いでいる。

だめ押しいくか。

私はもう一度同じように振り返る。

(ひいいいぃ。…いいや、さっきのは夢だ!現実ではあんな事起きるはずないぃぃ!!)

幻覚!私を地上最強の生物に見えるようにした。

幻聴!「そんな俺を抱き締めたそうな顔しやがってよお。いいぜやってやるよ。エフッエフッエフッ!」

「うぅぅぅぅうわあああぁぁぁぁーーーー!!!!」

そんなに私を見て叫ばなくてもいいだろう。フフ。

何事かと大声で叫ぶ変態と私を周りの乗客が見ている。よし、次は十秒戻しだ。

ドーーーーz――――ン!

もう一度世界は巻き戻る。

(なんなんださっきから。なにが起きている…!。俺はいったい何回

悪い夢を見れば気が済むんだ……！）

ここまでやってまだ抱き付こうとするほど馬鹿じゃない事を祈るよ。

次の駅に着きそうだ。後ろの変態はいつ私が振り返るかと気が気じゃないようだ。それならばご期待通りに、振り返る…フリをした。

「俺の側に近寄るなあぁぁ！」

丁度よく開いた扉から勢いよく飛び出す変態。周りの乗客は不思議そうにしているが、後ろを向いていた私には何が起きたか分かるはずがないな。フフフ……少しやりすぎたかもしれないな。だがこれだけやれば二度と痴漢しようなんて考えないだろう。

それから会社の金を落とした自殺志願者が線路に飛び出す、なんて事もなく目的の駅に到着した。ふむ、電車もいいものだな、気分がいい。よーし、このいい気分のままコーヒーゼリーを食べに行くぞ！

「Ｎｎ，１人気のコーヒーゼリー？それ来月からなんですよ。ごめんなさいね」

がーんだな。

テレコミを頼りにしすぎて実際に調べるのを忘れてた。そうだよな、いい気分のまま終わるはずがないよな…。はぁ…。

第13ｘ　Ψ近の平日の日常風景　前編

朝。私、斉木栗子はいつものように聞こえるダルいだの仕事行きたくないだの気だるい心の声と共に目を覚ます。いつも通りの最悪の目覚めだ。

常人のメガネをする人間は寝る前にどこかに置いたメガネを探す作業をまず始めるのだろうが、目に異常のある私はメガネをしたまま寝ているのでその手間を一つ省(はぶ)く事が出来る。目の異常というのは例によって超能力なんだがこれは後で説明しよう。

メガネをしたまま寝るなんて危ない、なんて言う意見もありそうだが……（あくび）1ヶ月くらい寝た後起きたくらいに寝覚めが悪くて頭が回らないな。説明が面倒だ。メガネをしたまま寝てても超能力を使ってどうにかこうにかしている。これでいいだろうか？

制服に着替え、一階のリビングに向かう途中、

「おはよう!!栗子！今日もいい日になるといいね！フワッフゥウ！」

朝からうっとうしい中年男が馬鹿みたいにデカイ声で声をかけてくる。

一礼してから横を通る。

「なんで父親に他人行儀!?」

そのテンションに付いていけないからだ。

毎朝毎朝やかましい上にちょっとバリエーションを変えてるところにイラっとする。父さんにはいい加減そういうノリに付いていける性格してない事ぐらい理解して欲しい。

リビングに入ると、決まって既に私の双子の兄、斉木楠雄、彼が食卓について先に朝御飯を食べている。毎朝恒例だ。

もう慣れたものだが昔は本当にムカついた。何故ムカつくかって？私がリビングに入ってくる度に「今頃起きたのか」と言いたげな顔

でこっちを見てくるんだぞ？殴りたくないか？どれだけ早く起きても彼は平然と食パンをかじっている。それが六時でも五時でも四時でもだ。

自棄になった私は一回だけ寝ずに食卓に居座り続けた事があるが、六時半にリビングに来た彼は「こいつ馬鹿か？」という顔をしたので、私自身も馬鹿らしくなった。それ以降は朝恒例のどや顔パンかじり野郎は気にしないようにした。

「あ・な・た♥この目玉焼きあなたの事を想いながら作ったの。おいしい？」

「もう最っ高に美味しいよ！ママの愛情のおかげで何十倍も美味しさが増してるんだね！」

「まあ、あなたったら♥」

目玉焼き焦げてるんだが。何十倍も美味しさが増したところで焦げてるんだが。……指摘しないでおこう。

登校中。瞬間移動を使えば一瞬で学校に着くが、人の多い学校ではそんな事してバレない方が難しい。なのでわざわざ歩いている。

いつものように何考えてるのか分からない顔をしながら隣を歩く彼。もはや慣れた。小学生の時からずっと登校中に隣に危険人物いるんだ。それが当たり前になっている。そのせいで図太い性格になってしまった。

そうだ、読者の皆さんの中には「兄に対して辛辣すぎじゃね？オレも妹いっけど嫌われてっから読んでて辛れーわ」と言う鈴木君のような意見のある方もいらっしゃるだろうが、

いいんだよ、これで。

どうせ彼も彼で心の中で私に対して罵詈雑言の雨あられに違いないのだからな。心の声を聞けない以上確かめる術はないが、私達は双子だ。それも性格ほぼ一致の。私が彼を警戒すれば、彼も私を警戒するに違いない。私が彼に辛辣な事を考えれば、彼も私に辛辣な事を考

えている。だからこれでいいのだ。
それに何を考えたところで彼も私の心の声は聞こえないのだ。恐れる必要はない。
それと鈴木君には悪いが妹と言うのは基本的に兄を嫌うものなんだ。残念だが受け入れて欲しい。
とまあ隣に彼がいたところで会話はほぼ零だからな。暇な時間は適当な事を考えたり景色を楽しんだりしている。これはこれでいいものだ。平和だ。
だがそんなピースフルタイムは長くはない。

「相棒と相棒の妹じゃねぇか。どこ行くんだ。お？」

普通に学校だが。恐らくこいつは別の場所へ向かっているのだろう。
それにしても朝からこの顔はきつい。

「おーそういやーオレッチもガッコーだった！奇遇だな。お？」

ぶん殴りたい。…落ち着け、流石にそれはまずい。
それにしても、心の声と行動が読めない燃堂に後から話しかけられても対応出来てしまっている。いい気持ちは全くしない。
そもそもの話、燃堂の家は私の家とは学校から別方向にある筈なので、本来なら後ろから声をかけられるなんて間違ってもあり得ない。これはただの予想だが、燃堂は通い続けて二年目の学校の位置を忘れこの町をさまよっていた可能性がある。馬鹿すぎる。
燃堂の馬鹿な話を無視しながら学校に着いた。途中「帰りに相棒の妹もラーメン行こーぜ。お？」とか言い出した時だけは首を横に振った。それは相棒の役割だろ、私をまき込もうとするな。

授業中。黒板に書かれた内容をノートに書き写すだけの時間だ。高校二年の学習内容は全て頭に入っている。わざわざ授業を真面目

に聞く意味がない。
　ああ、すまない、もしテストの点数が低い高校二年の読者がいたなら怒らせてしまったかもしれない。ただ一つ言っておきたいが私は天才ではない。現に今こうして授業を聞いて知識を吸収している。「意義あり！今の証言は矛盾している！」と言いたい気持ちはわかるが最後まで聞いてくれ。
　私は確かに授業を聞いている。だがそれは耳ではなくテレパシーで、二年のではなく三年のだ。多くの心の声から三年の先生や授業の内容を理解している三年の生徒を聞き分けるのは至難の技だがこいうのは慣れだ。その内容をノートか何かに書くのは不自然なので出来ないが問題ない、しっかり頭に入っている。そうだ、さっき意義を唱えた読者もしくは弁護士はペナルティだからな。
　今は数学の授業で地理の勉強中なんだが…授業を聞かずに別の事を考えてるやつが多いな。授業聞けよ、まったく。
　特に海藤。見た感じ真面目にしているが頭の中では漆黒の翼とやらがよく分からないセリフをはいている。海藤それでいいのか？この前テストの結果を見て、（この点数じゃママに叱られちゃうよう）って心の中で叫びながらガクブルしていたが授業をまともに聞いてないからじゃないのか？
　別に海藤のテストの点数がどうなろうと知った事ではないし、妄想するのは勝手にすればいいが…

（
「予想通りノコノコとやって来たな！ダークリユニオン!!お前らがこのＰＫ学園へ近づいて来ているのはこのオレっ漆黒の翼の地獄耳（インフェルノイヤー）で既に勘付いていた。そのおかげでこのオレの右腕に住み着く暗黒龍（ブラックドラゴン）の力を引き出すには十分な時間だったぜ。これが何を意味するか解るか？フッ、貴様らは終わりなんだよ!!」
「すごい…！これが瞬の、いや盟友の真の力なんだ…！」↑目のキラキラした斉木楠雄
）ニヤニヤ

プ、ププッ、ブフッ、……笑うな…いや笑うだろ、あん、あんな、プ、ブブフッ。
海藤の妄想の中の情けない顔した彼はメチャメチャ面白い。笑いを抑えようと頬が膨らみまくっていて今にも決壊しそうだ。この愉快な顔を晒し続けるのもマズい。机に突っ伏して収まるまで耐えよう。ププ、フ。
……なんとか収まった、が、数学の先生がさっきまでの私の一連の様子を見られていた。これは恥ずかしい。ひきつった顔で私を睨み、難解な数式を書くのに必死になっている。数学教師は怒らせてしまいましたが右斜め前の彼には笑ったのがバレなかったので問題ありません。まあ、バレたらバレたで更に笑ってやるだけなんだが。
海藤に限った話ではないが、私には妄想の中の彼は鉄板で笑ってしまうからマジでやめて欲しい。あの、プ、情けない、プフッ、彼は、ブフハハ。

「おいぃ斉木栗子ぉ！お前ちゃんと授業聞いてんのか!?聞いてたらこの問題が解けるはずだぁ!!」（お前にこの問題の答えが「X＝y＋1」だと解るまい）

私が悪いんだろうか。悪いのは海藤と彼なんじゃないだろうか。…流石にそれは違うか。
私は特大の溜め息を吐いた。

「なんだその態度は!?お前のようなやつにこの問題が解けるわけがな……ああ、正解だ…」

十分（じゅっぷん）の休憩時間。トイレを済ませたり、友達と昨日見たテレビの話やらなにやらで時間があっという間になくなるあれだ。
この時間特になにもする事がない。だがそれがいい。この短いながらも自由な時間が私は好きだ。……いや、

「ねえくりっちさっきなんで先生に怒られてたの？あーいいよいいよ言いたくないよね。それより聞いてー、前の彼氏がよりを戻そーってうるさくてさー。彼もいいところもあるんだよ？優しいいし、顔もけっこうイケてるし、後――」

この弾丸トークの恋愛脳、夢原さんがお喋りに来なければな。

夢原さんは毎日のように私の休み時間を潰しにやって来る。

それはそれで困ったものなんだが、三日に一度の頻度で話す夢原さんの元彼の話が特にめんどくさい。簡潔に言えば、元彼によりを戻そうと言われ悩みながらもそれを断る、元彼はいい人だがそれ以上に欠点が多すぎる、…毎回内容は同じだ。実にめんどくさい。

夢原さんも夢原さんだが元彼元彼だ。なぜフラれたくせに懲りずにまた告白しに行くんだ？それも三日に一度のペースで。

今こうして私は（頭の中で）話をしているが未だに夢原さんは元彼の話を続けている。別の言い方をするのなら私は今、夢原さんの話をシカトしている。今に限らずいつもしている。え？夢原さんに悪いと思わないのかって？。思わない。

夢原さんと（不本意ながら）友達付き合いをして分かったのだが、夢原さんは自分が話をする時相手が話を聞いていようと聞いていなかろうと関係ないのだ。現に私は夢原さんのほうを全く見ていないが夢原さんに気にした様子もなく話続けている。恐らくだが話す相手がハムスターだったりしても関係ないのだろう。

毎日のように私に恋ばな（一方的に）する夢原さんだが、そもそも私に話をしに来るのは私の兄目当てだった筈なのだが全くその事に触れてこない。彼の事を聞いてきたら「コーヒーゼリーをくれてやれば一発で好きになるチョロいやつだよー」と答えようと決めていたのに。

「――でね、――なんだけど、――ほんと――でしょ？――って前の彼氏が言うから――前の彼氏なんかよりいい人が――――。――――。

――――。――――。――――。――――。――――。――――。

――。――。――だと思わない?」

ゲームなんかでよくある話が長いせいで主人公が寝ちゃうやつ止めろ。

キーンコーンカーンコーン

「えーまだ途中なのにー!でも仕方ないよね。じゃあくりっち、また後でね!」スタスタ

また後で…だと…。

[妹が兄の僕に対して辛辣すぎる件について]

〔続く〕

第13ｘ　Ψ近の平日の日常風景　後編

突然だが二回目の「要らない超能力紹介のコーナー」だ。前後編となんの脈絡もなく始まるが気にしないで欲しい。べ、別に文字数稼ぎとかじゃないんだからね！勘違いしないでよね！……自分でも気持ち悪く感じる女アピールを挟みながら早速紹介していこう。

今回紹介する要らない超能力は「時間加速（ヘイスト）」だ。この超能力は私の双子の兄、斉木楠雄、彼の「復元（対象を一日前の状態に戻す能力）」と逆の作用、私が触れた物の時間の流れを一時的に速くする能力だ。どうだろう、凄い感じはするがいい使い道が思い付かないだろう？

ただ、私の超能力の一つ「計一分時戻し」と組み合わせれば何かが出来そうな気がする。気がするだけで具体的な事はまだ何もない。それ以外にも使い道がありそうな感じはあるが現段階では「時間加速」は要らない超能力扱いのままだ。

昼。皆大好きご飯の時間だ。……だが私には少し憂鬱だ。

「よーし、皆！お米食べろ!!」

「アハハ、灰呂に言われなくても食べるよ」

「そうかい？考えてみればそれもそうだね！」

アッハッハッハ!!

なんだこの雰囲気。ついて行ける気がしない。

だが憂鬱なのは灰呂が原因という訳ではない。灰呂のテンションには疲れるが、関わらなければいいだけの話だ。いいやつなのは確かなんだ。

さて、問題の憂鬱の原因と言うのが…

「栗子ちゃん、一緒にご飯食べよー」

大人しめ女子の目良さんだ。そんな目良さんが何故憂鬱の原因なのか。後で詳しく説明しよう。

「それじゃ食堂に行こ～」

ここで一つ説明を挟むが、私も目良さんも弁当派だ。わざわざ食堂になど行かなくても教室で食べればいいと思うのだが、目良さんは食堂で食べたいんだそうだ。

食堂

「ここにしよっか」

食堂に入り自然な流れで食べる席を決める。

何気ない行動に見えるが実は違う。鋭い嗅覚でいい匂いのする元（カレー、ラーメンなど）を特定し素早い判断力と行動力でもってベストな位置を判別している。一連の行動は本能によるものだ。

「いっただっきま～す！」

そう元気に言って弁当のフタを開けるとその内容は日の丸弁当ですらなく梅干し一個、日の丸のみ弁当である。

「ああ気にしないで！今お金貯めてるからお米買えるお金がないの。お父さんがプエルトリコにいるってみこちゃんが占ってくれたから会いに行けるように頑張って節約しなきゃいけないの。本当に気にないで栗子ちゃんは食べていいからね」（頂戴頂戴頂戴頂戴頂戴、お弁当ちょっと頂戴頂戴頂戴頂戴）

……食べづらい。目はギラついているし私に向かって心の中で念を飛ばし来てくる。止めろ、その攻撃は私に効く。

「なんだって！今、お米を食べる事が出来ないと聞こえたぞ！お米食べろ!!どうして食べないんだ!!!」

うるさい。

「！。はいっ！今言ったの私！お金がなくてお米が食べられないの！」

「それは大変だ!!僕のお弁当でよかったらお食べよ!!」

この流れどっかの幼児向けアニメで見た事あるな。

それにしても良かったな目良さん、カモ（灰呂）が釣れたぞ。わざわざ食堂に聞こえるように通る声でアピールした甲斐があったな。

「はいっ！これが僕のお弁当だよ！さあ半分あげ」

「ありがとう、ご馳走さま！」

「ははっ気が早いなぁ目良さんは、まだ食べてない……え？……」

超能力者の動体視力を持っていらっしゃる方は恐らくいないと思われるので何が起きたか分からない方がほとんどだろう。

察しがついている方もいらっしゃると思うが、目良さんはもの凄いスピードで灰呂の弁当を平らげたのだ。正確に言うなら「ありがとう」と「ご馳走さま！」の間の「、」の間にだな。

「ええっと、その僕の分は」

「ほんとにありがとう！今日一日を梅干しで乗り切るつもりだったんだけどこれで放課後のバイトも頑張れそうだよ～」

「ああ、うん、よかったよ、力になれて…」

いつものテンションはどうした灰呂。ん？

余談だが今回は灰呂が弁当をあげたが、ここ一週間ずっと私の弁当は目良さんに食われてた。いや別に構わないんだ本当は私は十年く

らいなにも食べなくても生きてられる超人だから弁当くらいくれてやってもいい。が、昼は普通に食べたいというのが本音だ。今日は食べられそうでよかっ――

「ああでも、家族にもご飯食べさせたかったなー。うちの家族なら時間の経ったお弁当でも喜んで食べるんだけどなー。……頂戴頂戴頂戴頂戴、お弁当全部頂戴頂戴頂戴頂戴（小声）」

……露骨になった。

〔斉木栗子は黙って自分の弁当を差し出した〕

「起立、例」

「「「「「さようなら」」」」」

「さようなら。近頃は不審者も多いから皆気をつけて帰ってね」ニタァ

「不審者のお前が言うな」

「せ、先生は不審者じゃないぞ！」ニタァ

アハハハ！

いつもの先生いじりか。最近はこういったやり取りが多くなったな。担任の井口先生は顔がエロいせいで最初こそ誰しも変態教師だと決めつけていたが、顔の割りにいい先生とクラスの中で警戒心が薄れてきている。けっして先生に人気があるという訳ではないが。

放課後。うちばきから外用の靴へ履き替え玄関扉を通り抜け外の空気を全身に浴びる。この時の解放感は悪くない。実際にはまだ解放された訳ではないのだが。

背後から声だけで美少女だと分かる声が投げ掛けられる。

「あ、栗子さん。斉木君…は一緒じゃないみたいね。てっきり仲がいいから帰りも一緒なのかな～って思ったんだ～、アハハ。えっと、斉木君に渡したいプリントがあったんだけど…もしかして帰っちゃったかな？」（…今思ったけどもしかして斉木くにおが私におっふしないのって重度のブラコンだからなんじゃ…）

長くなるが全部ツッコミ入れてくぞ。

何故彼と仲がいいと思われている？心外なんだが。

本当に渡したいプリントがあるなら彼の妹の渡せば良くない？

心の声を読んですまないとは思うが…彼がブラコンとかマジでないから！気持ち悪い。もしそうなら自害も辞さない。

計三つツッコミ所はあるが口には出さずぐっと飲み込む。

それで、なんだったか……。ああ、彼の居所だったか。どうせ燃堂から逃げようと一目散に学校から出たが結局捕まり何となくラーメン食いに行く流れになる、大体そんなところだろ？それに海藤と窪谷須が（またラーメンか？）だの（今回は間違いなく美味いらしいが…）だのと言いながら後からついて行っていたし、ほぼラーメン確定だな。

「そうなんだ～燃堂君とラーメンを食べにね～……。プリントは明日渡そっかな、急いで書かなきゃいけないようなのじゃないから。それじゃまた明日ね、栗子さん。今日は都合が悪いから無理だけど今度またスイーツ食べに行こうね！」

照橋さんはそう言って軽く手を振って歩いていった。その間ずっと照橋さんは考え事をしていた。

（斉木くにおはブラコン……うーん。……考えれば考えるほどそうなんじゃないかと思えてきたわ。もしそうなら……だめよ！認められらないわ！法律的にも私的にも！。ここは私が斉木くにおを正しい道に戻してあげないとね。私の魅力に気が付けば栗子さんへの想い

も断ち切れるはず。よ～し、そうと決まれば斉木くにおを見付けて今度こそおっふさせてやるんだから！うふふ、やっぱり私って優しい。それもそうよね、だって私は完璧な美少女なんだから！）

長い事葛藤していたようだがやる事はいつもと変わらないようだ。楽しそうだしわざわざ止めるまでもないか。

正直な話彼と照橋さんは付き合って欲しい。そうなるとあれだろ？照橋さんの妄想の中のおっふしてる愉快痛快な彼をリアルで見れるって事だろ？そんなの抱腹絶倒間違いなしだ。是非とも見たい。

まあ彼と付き合うのが夢原さんでもいい笑いのネタになりそうだが、あいつだけはダメだな。そう［今後ろにいる占い師なんかはな］

「あーやっぱ超能力者後ろから声かけてびびらすとか無理あるよなー」

［まあ百％無理だな］

このギャルギャルしい金髪は相ト命、その見た目とは違い本物の占い師だ。そして私が超能力者だと知っている数少ない人間の一人だ。

「いやさ、ホントは楠雄とイチャついて帰るつもりだったんだケドさ～今日ずっとストーカーしてたら激おこぷんぷん丸になっちゃてさ～。んでひさしぶりにサイキッちゃんと帰ろうと探したらゲロマブガチ天使の照橋さんと話しってかっらそこの物陰でスネークしてたワケよ。女の私でもホレる照橋さんに話しかけるなんておそれおおいカンね。で、いざサイキッちゃんに話しかけようとしたんだケド……これビビらせるのワンチャンあるんじゃね？と思ったワケ。そんで今ここ」

［説明乙。そんじゃ私はここで即サリするわ］

「ちょっ待ってって。今日はお互い好きな男の話で夜までしゃべくろうよ～」

［クソ興味ない話題すぎて吐きそうだ。家帰る］

「だから待てって！そだ、この前なんか奢るって言ったじゃん？今日

はアタシの奢りでなんか食べ行こ？」
［おっけー全然行く。場所どこ］
「ミスドでいー？」
［いい］

久しぶりに行くな、ミスド。楽しみだ。
ミスドに着いてからは彼の魅力について話す相トに「アイツはないわ」的な話をしたり、相トが恋愛について話していると何時の間にか夢原さんが平然と話しに入ってきたり、ドーナッツを食べようとした矢先に目良さんが現れたりした。……やっぱり帰ってればよかったな。

と、まあ私の日常は大体こんなものだ。こんな日々だが、悪くはない。それなりに満足した毎日を送っている。
明日からも災難な日常は続いていくが、まあ気楽にやっていくさ。

第１４ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　１／３

原作タイトル　第３７ｘ　Ψ恐！松崎先生
小説もどきタイトル　第１４ｘ―１　栗子Ｂの微笑み

僕の名前は斉木楠雄、超能力者だ。
僕は今学校の外階段に身を潜め、一つ下の階の高橋グループの様子を伺っている。僕には男をストーキングする趣味はないんだがな。……当然だが女性をストーキングする趣味もないぞ。

「あのウザ崎を無様な姿を見る作戦うまくいきそうだな」
「おう、オレの自信作の偽ラブレターを下駄箱から見つけた時のエロ崎の様子を見りゃ間違いねえぜ！」
「それはそうだけどよお、内容が……ぅおえっ…」
「何だよ完璧な内容だっただろ!?これで中庭にクソ崎が来たらオレの今は亡きゴリラビットも浮かばれるってもんだぜ！」

説明しようとする前に中途半端な説明ありがとう。
詳しく説明するぞ。
この高橋グループのしょうもない計画を始めたきっかけは、今日の休み時間に高橋が巷で人気のストラップ「ゴリラビット」を見せびらかしていたところを松崎先生が発見し没収、しかし松崎先生の握力と腕力によって無惨にもゴリラビットは頭部分がもげて、ゴリ／ラビットになった。ナムサン。だがまじめに先生として仕事を真っ当する松崎先生を非難する事は出来ない。
その後松崎先生に恨みを持つ高橋グループは、さっき高橋が言ったように偽ラブレターを仕掛けその内容に騙され中庭にノコノコとやってくる松崎先生を高見から見物してやろう、そんな魂胆なんだそうだ。
結果から言うと松崎先生は中庭に登場、それを見た高橋共は大喜び

だ。
勿論だがこのままにしておくつもりはない。松崎先生には日頃からお世話になっているからな。ここは一つ恩返しをしたいところだが、
［飽きた。見ていて面白いものでもなかったな。私は帰るぞ］
僕の隣で様子を見ていた僕の双子の妹、栗子は恩返しなんて微塵も考えないような薄情者のようだ。
テレパシーを使って僕に帰る意思を伝えてきた栗子は階段を上がっていく。階段を下りれば近道だがすぐ下の階に高橋グループがいるから遠回りで玄関に向かうのだろう。
［ならさっさと帰れ］
［いつも言っているだろ、私に命令するな］
栗子はゆっくりとした調子で階段を上がる、が急に足を止める。何か考えでもあるのか思いを巡らせている。その内容はテレパシーで読む事は出来るが残念ながら今は半分ほどしか読み取れない。
［……やっぱり私がこの下らない問題をなんとかする。お前は手を出さなくても結構だ］
そう伝えてくるとまた階段を上がっていった。
［お前そのまま帰る気じゃないか？言っている内容とやっている事が矛盾している気がするんだがな］
［私は最初言った通り帰るぞ？だが私が問題を解決する。お前はそこで黙って成り行きを見ていればいい］
栗子はそのまま階段を上りきり学校の中へと消えていった。

しばらくして松崎先生に動きが見られた。組んでいた腕をほどき「来たか」と小さく呟く。下の階にいる高橋共もその様子に気付いたらしく「なんだ」「おいどうした」などとざわついている。
そんな松崎先生のもとへ軽く走りながらやってくる女子が一人いた。見慣れたピンク髪に制御装置、そして髪が短い癖に後ろをゴムで留めたあいつは栗子B、栗子の分身だ。
栗子は分身の事を［私］と呼ぶ。さっき栗子が言っていた［私がやる］とは［分身がやる］という意味になる。かなりややこしい。
栗子Bは松崎先生の前までくると軽く頭を下げる。

「お時間を割いてしまいすみません」
「いや、構わん」
「わだっきゃ……じゃねくて、……私、先生が来てくれて本当に嬉しいです」

栗子Bはテレパシーではなく口で言い、微笑んだ。……やはり栗子とは別人のように見える。いや、見た目や身長などは一緒なんだが性格がまるっきり違う。
この展開に下の高橋グループはパニックになっている。

「おいなんで栗子さんが来るんだよ」コソコソ
「オレが知るかよっ」コソコソ
「……考えられるのはあれか？どっかでオレ達の作戦を盗み聞きしたとか？」コソコソ
「だとしてもなんで松崎にチクんねえんだよ」コソコソ
「おい嘘、だろ？ドッキリかなんだろ、なぁ！」
「てめぇ静かにしろよ高橋」コソコソ
「あーあれだもんな、高橋前に「オレ栗子の事、照橋さん並みに好きだ

ぜ。へへっ」ってきもちわりー事言ってたもんな」コソコソ
「おいマジかよ、ならこの状況……うっわきっつ」コソコソ

ふむ、高みの見物も悪くはないな。
もう一度栗子Ｂの方へ意識を向ける。

「手紙でも私の気持ちをお伝えしましたが改めて言わせて下さい……」

もじもじとして頬を染め、本当に栗子が松崎先生が好きなように見える。が、テレパシーで心の声を聞いてみればその様子とは裏腹に心の中は平常である。

「おい栗子さんこのまま告るんじゃねーか?」コソコソ
「もしかしたら高橋が下駄箱に手紙を仕込む前に栗子さんが松崎に手紙を渡していたのか?」コソコソ
「おいおいマジかよ……なー高橋はどう思うよ?……高橋?」コソコソ
「あ、……ああ、……ああ、あああ」

これは、まずいかも知れないな……。

「私、松崎先生の事が、す――」
「ぎゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」ばたっ
「た、高橋ぃー!」
「こいつあまりのショックで泡吹いてぶっ倒れやがった!……死んでる……!」

んなわけないだろ。気絶してるだけだ。

ドタドタドタ！
「おいいぃ何があったぁぁ!!」
「ま、松崎…先生」
「高橋どうしたぁぁ目を覚ませぇぇ！」ドカバキドゴ

デジャブ。

「むぅぅ、目を覚まさん。また俺の知らん病気かもしれん。おいお前ら高橋を見ていろ、俺は救急車を呼んでくる！」
ドタドタドタ！
「……なんか哀れだな、高橋」
「ああ、こんなやつだけどここまで来ると同情しちまうよな」
「ご冥福を祈ろう」
「アーメン」

だから死んでないからな。
わりと早い段階で場所を変えて避難した後に千里眼で様子を見ていたが、ここまで酷い展開になるとは予想出来なかった。
こんな事になった元凶はどう考えているのか、直接聞いてみる事にする。

［計画通り、というところか、栗子Ｂ］
［んなわけねーべや！］

言い忘れたが栗子Ｂは本来の喋り方は何故だか知らないが津軽弁だ。まあそれは今は置いておこう。

［わの作戦だばなんやかんやで高橋達が松崎先生に謝ったりしてはっぴーえんどになる予定だったはんでな。あったのわの望んでだ展開じゃねーべや］

聞き取りずらいが何を言いたいかニュアンスで大体分かる。

[……栗子B、お前何か栗子（本人）に何か言われなかったか？]

[ん？んだな、確か[どうせやるなら本気で演技しろ]って言われだな。わとしてはわは何も言わねんで松崎先生の方から話しをする感じでいこうと思ってだんだけどな]

これではっきりした、本当の元凶は栗子（本人）のほうだった。

[なんというか、高橋君には悪りぃごどしてまったじゃ。今度謝んねばなあ]

[そう気に病む必要はないんじゃないか？そもそもの原因は高橋グループのせいなんだからな。自業自得というやつだ]

[そうがなあ？んでもなあ……]

納得のいっていない栗子Bを慰めながら帰路についた。

家につき栗子Bが栗子（本人）に状況説明をしたところ、

[高橋（カス）ざまぁ！]

と言い放ち悪い笑みを浮かべた。……こういってはなんだがお前はもうちょっと栗子Bを見習った方がいい。

第１４ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　２／３

原作　第７９ｘ　Ψ能を駆使せよ！鳥束モテ男計画
小説もどき　第１３ｘ―２　悪女？栗子Ａ（本人）

オレ、鳥束零太っていうモンっス。今までは寺生まれの霊能力者ってだけだったんスけどね、ムフフフ、今やモテモテのモテ魔神っス!!
いやー学園祭でやったライブが大成功してからは世界が一変したっスね～。
まさかあんだけ練習した（練習期間一日）バンドが失敗するとは思わなかったっスけどオレにはとっておきがあったのをしーんとする体育館に泣く寸前で思い出したんスよ。その名も、零能力、秘技「口寄せ」っス！。
前にこれでちょっとした失敗をしたっスけど、あれは相手が悪かっただけで他で使えばマジで神能力だったっス！
口寄せで呼び出した伝説のミュージシャンを憑依するとその演奏で女子のハートをキャッチ！今やモッテモッテのウッハウハ、いやーほんとまいっちゃうっスねー。ンフフ、顔がにやけちまったっス。
そんで今は学校が終わって女子を十数人引き連れてデート中。なんでこうなったか聞きたいっスよね？
いやこれがまたオレとデートしたいていう娘が多くて多くて、フヒッ、だからみんなまとめてデートしようって提案してみたらキャーキャー喜んじゃって。
これひょっとしてハーレムっやつじゃないっスか!?うーし、もうこうなったらここにいる全員口説き落としてその後は……もう想像するだけで興奮してきたっス!!

それでその…オレ今マジで幸せなんスよ、人生謳歌してんスよ。だから、勘弁してくださいよ、栗子さん…。
「駄目だな。前に言ったよな、私を含めた女子に妙な真似をしたら密室に連れ込んで圧迫祭（プレス機並みの圧迫）だとな」

最後の方聞き覚えないんスけど…。いや、まてよ…密室での圧迫祭…なんかエロくないっスか！……冗談ですって本気にしないで下さいよ!?

［いいんだぞ？やってやっても。圧迫プレス祭］

え、遠慮しときます。

ふーっマジでおっかねー…。

数分前に後ろからつい来てくれる女の子達を鼻を伸ばして眺めてたら、視界に例のあの人が入ってきたもんだからおもいっきりむせちまったぜ。オレと同じ、いやオレなんかとは比べ物にならねーほどの能力者、斉木栗子さんの姿が……。

栗子さんは見た目はもうばっちし可愛いんだ、ちょーっと鋭い目をしてっけどそれはそれでそそられるもんがあるだよな～。

そしてスレンダーな体付き。細い足に細い体、欲を言えばもっと胸があれば完璧なところ。女子高生としては普通の大きさなんだけどな。

オレが思うに［おい鳥束］胸は大きければいいってわけじゃないんだ。大きい胸は大好きだ興奮する、だが顔や体型のバランスが大事だと［おい！］考え、いや待てよ顔と体のアンバランスな［なめやがって、くそが］童顔巨乳もいいよな～。やっぱ胸はなるたけ大きい方が

ドゴン!!

大きな音と地震のような強い揺れに驚き振り向いたオレが見たものは、オレと同じく振り向こうとする半分の女の子達……不安そうな顔も可愛い、いやそれどころじゃねーな…それと唖然とした顔で驚くもう半分の女の子達……あ、あの子驚きすぎて尻もちついてる、あー前に回り込んでスカートの中を見てーな……なんていつものオレなら考えるんだけどそんな余裕はない。

なにより目を引くのは歩道を腕の力で破壊する超能力者。

「なにやってんスかあ
［十秒時戻し］
あ～～!!」
「わっ、びっくりした～。ねぇいきなりどうしたの鳥束君？」

一瞬にしてオレは元の進行方向に向き直っているのに気が付き、何が起きたか少し時間がいった。……こんな芸道が出来るのはオレの知ってる中じゃこの世に二人しか……って今はそんな事考えてるじゃねぇよな。

「あ、あーその、そう、映画！映画だよ。まだ何見るか決めてなかったな～ってさ～。ね、皆はどんなジャンルの映画が好き？」
「え～そんな事でおっきな声だしたの～？」
「面白～い！」
「うーん、わたしは恋愛物がいいかな～」

っぶねぇ、なんとか誤魔化せたか？
それにしても急に何してんスか栗子さん。
［鳥束ごときが私を無視した事にほんの少しだけイラッとしただけの事だ］
イラッとして物にあたるとかそんなん不良じゃないっスか……。
［誰が不良だ。見てみろ、お前も気付いているようだが周りの女子もその他の通行人も私のやった出来事は覚えていないし私が壊したアスファルトも元通り。つまり私は何もしていないんだ。ＯＫ？］
そーっすか別にいいっスけどー。なんかスミマセンっス、オレてっきり栗子さんが怒ったのは栗子さんの胸が小さくてもっとあった方がいいとか考えてたせいかと――
［面白いやつだ気に入った。殺すのは後にしてやろう。言っておくが私はやると言ったらやる女だ。楽しみにしておけ］
ひぃっ。ほんと栗子さんって見た目美人なのに性格ひでーっスね

！

［そう言えば鳥束、聞きたい事があるんだが］

まだ何かあるんスか……。

［大事な事だ。お前金はちゃんとあるんだろうな。当然ここにいる女子全員に奢るんだろ？結構な金額になると思うがどうなんだ］

へっへっへっ、だーいじょうぶっスよ栗子さん。今みたいなハーレムを夢見て常に財布の中身はぎっしりっすよ！

［ふむ、透視で見てみたが嘘はついていないようだな。本来ならネタバレと騒音の塊みたいな映画館なんて行かないが、タダなら話は別だからな。良かった良かった］

はあ、それは喜んでもらえてなにより…待てよ！そうだよなんで気が付かなかったんだ。へへっ、これってめちゃくちゃいい機会じゃねーか。

この期に栗子さんを落しちまえばいいんじゃねーか!?。

そうだよ栗子さんが彼女になるとか考えて見りゃあマジでさいこーなんじゃねーか!?見た目は充分綺麗だしあの性格でオレに甘えてきたらそのギャップは、いい、とてもいい。それになにより超能力で色々やって貰えそうじゃん。

うっしゃあ燃えてきた！栗子さんを含め全員落として最高最強のハーレムを作ってやるぜ！なんたってオレにはとっておきの「口寄せ」があるからんだからなー！やれる！やれる！やってやるぜー！

［全部聞こえてるからな。鳥束お前学習能力ないのな。馬鹿なの？あ、馬鹿だったか］

そう言ってられるのも今の内っスよ！オレの魅力見せてやります！

憑依！

助けて下さいよー栗子さーん!!
［はあぁ（深いため息）］

くそっ、なんでこうなっちまうんだよ！

「～♪～～♪～～。ああ、喉が震え、音の振動を耳だけじゃなく肌で感じる事が出来る……。生きてるって素晴らし～い♪」
『次はワシのばんやで～』
『いいやこの私に譲ってくれ！』

自分の体を霊に必要な時だけ貸し与えるのが「憑依」のはずなんスよ!?なのにこいつら体を返しやがらねえんスよぉ。さっきから返せって言っても全然だめで無理矢理追い出す事も出来なかったんスよ。

［ふーん］
聞いてるんスか!?
［一応、な。けど……］
けど……なんですか？
［人が霊に乗っ取られるところなんて中々見れるもんじゃないからな。気分がいい。この状況を録画したいくらいだ］
なにのんきな事言ってるんスかあー!!もうやだこの人ー!!

「ぼくばかり楽しむのは悪いかな。次いいよ～」
『では次は私だ』
シュン！

「素晴らしい！足が地面に着くという安定感。それに、」
ヒュヒュッヒュ！
「拳が空を切るこの感覚……たぎる、たぎるぞぉぉ!!」
「やっぱりヤバイよね」
「うん、カッコいいと思ったけど性格が普通じゃないって話ほんとだったんじゃない？」

ちくしょう、こいつら人の体だってのにっ。女の子達も完全に引いっちゃってるし……もうどうすりゃいいんだよ！
［霊達のリアクションは面白い。他にはいないのか］
なにを期待してんスかぁ！そんな事言わないで無敵の「超能力」でなんとかしてくださいよー！
［ほう……いいだろう］ニヤリ
ほっ、もー出来るなら最初からやってくださいよ。

「私と闘う強者はいないかー！血のたぎる決闘をしようではないかぁー!!」
「ほんともうヤバイよ逃げよう!?」
「うん！…あれ？誰か鳥束君に近付いてくよ」
「……え？あの子確か――」

それじゃ栗子さん。お願いしま――
「ん？」
［ドラァ！］
『ぐえぇ』
［！］

タゴス!!……いってえ急になにしやがるんスか……あれ？
「オレの体を動かせる！あいつら栗子さんに恐れをなして逃げてくぞ。やっ――」

［十五秒時戻し］
へ？
「血のたぎる決闘をしようではないかぁー！」
ザワザワ
あの～栗子さん？
［鳥束、お前が無敵の～なんてジョジョ四部ネタを使うもんだから私もつられてしまったじゃないか（半笑い）］
よくわかんねーんスけどそこじゃなくてですね、なんで時を戻したんスか！やり方はともかくとして憑依が解除してたんスよ？
［ここにいる女子の中に私のクラスのやつがいた。あのまま時を戻さずにいたら教室に私が強いという情報が流れ私が運動神経がいいという噂が流れ運動部に引っ張りだこになる可能性がある。私の目指す平穏な日常が壊れてしまう］
それくらいいいじゃないっスか。
［やだ。だがその代わり、他に鳥束の体から霊を追い出す方法を思い付いたぞ］
……なーんか期待できないんスけどー。
［まあ聞け。私がお前の顔面を殴った時に偶々極薄手袋が破けて一瞬だがサイコメトリー、つまりあの時のお前の状況を知る事になった］
……そもそもなんで顔面狙ったんスか。もっと他にもあるでしょうが。
［黙れ。私のサイコメトリーは記憶だけでなく感情も読み取れる。私が感じ取ったのは「恐怖」だ。それも鳥束、お前のだけでなく、お前の中にいる霊のもな］
！
［これは推測だが、憑依が解除されたのは恐怖によって霊の力が弱まったからなんじゃないか？鳥束も同様に恐怖していたとは言えやはり死者と生者の魂では後者の方が強いのだろう。鳥束、どう思う］

そうかもしれないっス。いやオレも修行中なんで霊に対して全てに理解がある訳じゃないんス。恥ずかしい話っスよね、ハハ。
［……その事を踏まえて憑依を解除する方法の本題に入るぞ。今霊達は「生」に強い喜びともっと生きたいという飢えを感じていると想定しているのだが、鳥束、お前はどうだ？お前はそんな霊達より更に強い「生」への執着や飢え、生きたいという強い意思はあるのか、ん？］
愚問っスねぇ！「性」への執着に飢えですって！あるに決まってんじゃないっスか!!イきたいという強い意思？イきたいしむしろイかせたいっスよ!!このオレほど「性」を愛し愛された男はいねえんスよ!!!イエェェェェイ!!!!!!
［なんか違うんだが。……まあいいか］

「誰かこの私と決闘を、！。なんだ!?」
なめないで下さいよぉ栗子さん!!おれには「性」への飢えは底なしなんスよ!!気高くそして飢えなければヤれない!!
「体が熱い……この熱さには……耐えられんっ」
うおおおぉぉぉ!!おっぱい！足！お尻！可愛い下着！乳首！唇！○○○！
「そうか零太……零太の意思の強さ、身に染めて分かった……！ありがとう、体を返すっ!!」ヒュウッ
ドサッ
「え、なに？どうしたの？」
「もう関わりたくない……けど、どうしよう」
「倒れたままにしておけないわ。大丈夫？聞こえる鳥束君」
「救急車呼ぶ!?」
（自主規制）！（自主規制）！（自主規制）！（自主規制）！
そして何よりも……
パチッ

「あ、目を覚ましたよ！」
「女の子と（自主規制）して（自主規制）してから（自主規制）、最後におもいっきり（自主規制）!!」
「「「「「……」」」」」
「あれ、体が動く！おっしゃあー!!……おほん、お騒がせしたね、気を取りなおして映画館にしゅっぱ――」
「死ね。マジで」
「カス、ゴミ、ヘドロ！」
「あー時間無駄にしたー」
「帰ろ帰ろ」
「ちょっ、ちょっと待って！」サッ
「触んなクズ！」
パシン！
……痛い。栗子さんの顔面パンチより痛くない筈なのに、くっそ痛い……。
なんでこんな事に…。……いや、分かってる霊に全部頼ろうとしたオレが悪いんだよな。はあぁ、……帰ろ。

［おい、どこに行こうとしている］
「あー！栗子さん。見て下さい、何故か霊達がオレの体からいなくなっんすよー。……それと女の子達も」
［一応私も女なんだが……まあそれはどうでもいいか。それより私に頼らずとも憑依の自力解除出来たじゃないか。お前にしてはよくやった方だ。褒めてやる］
「はあ、ありがとうございます……」

正直この人にすげぇ上からだけど褒められるとは思わなかったから少し驚いた。

［実際私の方が上だからな。私も能力が暴走した経験があるからな、その時は私の力のみで対処しなければならなかった。鳥束、お前も

同じ能力者として自分の能力を支配出来るようになれ。お前より上の能力者としてのアドバイスだ。それじゃそろそろ無駄話は終わりにして行くぞ」
「それってもしかして……！」
［もちろん映画館だ。私とだと不服か？］
「全然そんな事ないっスよ～。行きましょう！」

ハーレムは作れなかったし散々な目にあったけど、栗子さんとデートが出来るなら結果オーライ！

〔その後、映画館の暗闇の中で斉木栗子の体を触りにいった鳥束零太の手は複雑骨折するほど握り潰された〕
［本当に学習しない馬鹿だな］
〔すぐに時を戻し事なきを得たが鳥束零太のトラウマが増えた〕

第１４ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　３／３　前編

原作　第１３７ｘ　スイーツバイキングのΨ難
小説もどき　第１３ｘ―３　純粋！栗子Ｃ

僕の名前は斉木楠子、超能力者だ。……待て、言いたい事は分かるがとりあえず話を聞いてくれ。
分かってると思うが僕は新キャラとかではない。新しく増えた姉妹とかでもけっしてない。そういうのは栗子だけで十分だ。メタい発言だが気にしないでくれ。
僕の正体は斉木楠雄だ、さっき言った斉木楠子というのは女体化した僕を指す物だ。
変身能力については恐らくもうご存じだと思われるので説明を省かせてもらうが、今僕は女性に変身（トランスフォーメーション）している。見た目だけではなく、下は無く、上はある。何を言いたいかは察しろ。
髪は濃いピンクから薄ピンクになっている。制服も学ランからセーラー服を着ている。誤解しないで欲しいが今着ているセーラー服は栗子の物を盗んできたわけではない。それでは変態だ。このセーラー服は変身能力を使った際に僕の学ランが変化した物だ。意識してなったわけではない謎な現象だが便利と言えば便利となので深く考えないでおこう。

何故女体化したかその経緯なのだが、
テレコミ（口コミのテレパシー版）でも美味しいと噂のスイーツ店へＧＯ！
？
するとそこには「女性専用スイーツバイキング」の貼り紙が。ババーン！
？
なら女体化しかないな。ドーン！
とまあこんな感じだ。急に適当な説明になってしまい申し訳ない。

だが分かって欲しいのだが初めの挨拶時から僕の目の前にはすでにテーブルの上にスイーツが並びすぐにでも食べられる状態だったのだ。無駄に長い説明を早く終わらせてスイーツにありつきたい気持ちを察して欲しい。

では早速頂こう。

「すみませ～ん相席いいですかー、ってあれ……え？栗子……ちゃんだよ…ね……え、どういう事!?」

〔数十分前〕

［バイロケーション（分身能力）］

ボンッ！

［栗子様！何かご用ですか？］

［ああ、一つ頼みたい事がある］

［はい！頑張ります！］

［まだ内容を言っていない。落ち着け］

［す、すみません…］

ちょっとはりきりすぎちゃったかなぁ。でも折角お呼びしてくれたのですから栗子様のご期待に応えられるよう頑張らないと！

あ、自己紹介がまだでしたね！私（わたくし）の名前は斉木栗子…なのですが、私は栗子様の分身ですので正確には栗子Ｃと申します。

［確認するが今の現状は分かっているな？］

[はい！今から照橋さんと夢原さんと目良さんが訪ねて来られるようですね、テレパシーで先程聞こえてきました。美味しいスイーツがいただけるお店に行こうというお誘いのようですよ]
[その通りだ。さて、それで頼みと言うのはだな
私C、私の代わりに行ってきてくれないか？]
[へぃえええぇ!?]

あ、変な声出ちゃった…。恐る恐る栗子様の顔色を伺ってみますと普段と変りない無表情なご様子、まるで気にしてませんね、良かった…。

[栗子様は行かないんですか？スイーツですよ？スイーツ]
[強調しなくてもいい。確かに魅力的ではあるがこの前のミスドで改めて思ったんだ。スイーツもしくは食後のデザートか、を食べる時はなんかこう…孤独で、そして救われていなければならないのだと。そう、孤独に]
[栗子様も強調されてますよ]

あぁそうでした。この間の相トさんの奢りと言う事で行かれたミスドでは顔には出していませんでしたが不機嫌だったのを覚えています。
あの時栗子様は
(相トは終始テンション高くてウザイし夢原さんは恋愛トークフルスロットルだし目良さん早々とドーナッツ食い終わって私がドーナッツ食べる所を期待の目で見てくるし、一言で言い表すなら「最悪」だな)
と嘆かれていましたっけ。――――。

[えーと、それでしたらお誘いをお断りしたらいいのでは？]
[それでは好感度を大きく下げる可能性がある、別に彼女らと仲良くしたいと思わないが嫌われたいとも思わないからな。それよりも

大事なのはそのスイーツ店の場所を確認する事だ、後で一人で行って楽しみたい」

なんとも栗子様らしいお考えです！自分勝手でワガママでそれでいてほんの少し極々少量の優しさも持ち合わせている……そこにしびれる憧れます！

（こいつ、純粋な感情で毒を吐くんだよな……）

［？、どうかされましたか］

［いや、なんでもない。そろそろ来るぞ、後は頼んだ］

［何処か行かれるのですか？］

［ああ、イカゲーのマジマッチに熱中しすぎたからな、頭を冷やしにちょっと海底に］

［そうでしたか。いってらっしゃいませ！］

そして栗子様は自由に生きる事を望まれている。栗子様の望みを叶えるために私、分身の栗子Ｃは何時でも精一杯の事をやる覚悟です。

数分もしないで家のチャイムが鳴りました。私は栗子様として応対します。はい！出来る限り無愛想で無表情で何を考えているのか分からない系女子になりきって、です！

扉を開けると三人の可愛い女子高生がお出迎えです。

「やっほー！くりっちー！今暇ー？これからスイーツ食べに行くんだけどくりっちも来ない？」（あれ？くりっちイメチェンした？というかなんで家でサングラスつけてるんだろう…）

いつも元気な夢原さん、早速違和感を抱かれました。

ですがここは栗子様から学んだ［大抵の事は堂々としていればやり

過ごせる」を使う時ですね。
あ、そうでしたそうでした、言い忘れていました。私、栗子様と同じレベルの超能力を扱えるのですが、透視能力が駄目でして……いえ！使えないと言うわけでわないのです。その、人様の産まれたままの姿が見えてしまうのは、その、恥ずかしくて……更に見続けると内側まで見えてしまいますし……。ですのでサングラスを着けることによって目線を外せるようにしているのです。どうしても目立ってしまいますが……どうしようもないのです。

「栗子ちゃんも一緒に来てくれると嬉しいなー。それでなんだけど……お願い！私の分のケーキバイキングのお金奢って！三分の一だから！折半だから！ね！お願い！一週間何も食べてないの!!」

いつも腹ペコな目良さん、早速お金をせびり始めました。
あんなに必死に頼まれると断りにくいですね。目良さんの家は貧乏ですから久しぶりのスイーツをどうしても食べたいのでしょう。勿論お金は分けてあげますよ。栗子様も許して頂けるはずです。
……目良さんってよく食べるんですよね。貧乏だからよく食べるのかただ単に大食いなのか分からなくなる時があります。

「こんにちわ、栗子ちゃん。私もこの前みたいにお話ししたいなって思ってたの、どうかな？」（どうして玄関に出るのが栗子の方なのよ～！くにおはどうしたのよ～くにおは！「憧れの超絶美少女の照橋さんがわざわざぼくの家に!?おっふ」ってなるはずだったのに～！）

いつも綺麗な照橋さん、早速楠雄お兄様の事を考えています。
照橋さんって普段から完璧美少女ですが内心では黒い一面が見えますね。ですがそれはそれで人間として魅力があると思います。でも……でもどうして好きになる相手がよりによって楠雄お兄様なのですか！あんな、あんな危険な人！何されるか分かったものじゃないですよ！私がなんとかしないと…！

あらかじめ知っていたスイーツを食べに行こうというお誘いに対しまして頷き、栗子様を意識しながら「今すぐ準備する待っていて」のような事を申し上げました。早足で栗子様の部屋に向かいます。準備と言ってもお財布を取りに来ただけなので時間は掛かりません。

ふと、栗子様の部屋にある姿見鏡が目に入ります。……いけませんね、顔が綻んでしまっています。私は今は分身栗子Cではなく栗子様なのです。普通の女の子のように女子会に参加出来るからといってこのような顔ではいけません。気を引き締めなければいけません！

沸き立つ気持ちを抑え、落ち着いた所作で玄関から外へとでます。「待たせた。行こう」のような事をいつもの栗子様を意識しながらお三方に言葉を投げ掛けました。

おしゃべりをしながら楽しくスイーツ店まで歩きました。私は栗子様らしくクールな返答をします。

それにしてもこの時間は沢山の人が歩いてますね。……まさに進撃の裸人、目のやり場に困ります。人を見ないように視線をさ迷わせるのは疲れてしまいます。もう目を閉じて歩こうかな。

歩いているとスイーツ店が見えてきました。行列が出来ていますね、待つのは嫌ですがそれだけ人気があるという事、期待しちゃいますね。

・・・

やっと入れました！待っている間もお三方とお話していたので苦になりませんでした。お三方は友達ではありませんが友達っていいなって思いました！

やっぱり中は混んでいましたが幸い一席だけ空いてました。既に他のお一人様のお客さんがいるので相席を夢原さんがお願いしに……って、えええええ!!??

どうして栗子様がここに!?

〈後編へ続く〉

第１４ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　３／３　後編

……面倒な事になった。こうなってしまったのは罰が下ったのか、それとも栗子の呪いかなにかなのか。

まずは冷静に現状を把握するところから始めるとしよう。

僕、斉木楠子もとい斉木楠雄は今、完全な女であり僕の正体が斉木楠雄だと見破る者はまずいない。だが、一つ問題があった。斉木楠子は僕の双子の妹、斉木栗子と外見がほぼ一緒、いや完全に同一と言っていい。そんな状態で栗子を知る人間、もしくは栗子自身に出くわしたり……しても大丈夫だと確信していた。

例えばこの姿で夢原さんや照橋さんにばったり出会っても、その時は栗子の真似をすればいいだけだ。問題なし。

栗子本人に見つかったとしてもだ。確実に文句を言われるだろうがスイーツの料金を奢ってやるとでも言ってやればいい。現金な栗子の事だ、その言葉が聞きたかったとばかりに態度を変える事だろう。モーマンタイ。

問題は一つもない。……あの時の僕はそう考えていた。

（な、なんでくりっちが二人いるの!?）

（落ち着くのよ心美。超絶美少女は狼狽える時も美少女で在り続けるの）

（席の確保が済んだならすぐに行動、無駄な時間は許されない、時間は限られている。今は食べる事だけを考えなさい）

だからなのだろう。こんな「最悪の時間」を過ごさなければならないのは。

何が、問題は一つもない、だ。何が、モーマンタイ、だ。栗子の知人と栗子が一緒に現れる可能性を全く考慮していなかった。くそっ、過去の自分に文句の一つでも言いた…いや、駄目だバタフライエフェクトが起きる。

斉木栗子が何故か二人いるという通常では考えられない現状を食べる事しか頭にない目良さんを除いた二人に説明する、もしくは誤魔化さなければならないが……いや、普通に無理だろ。
自棄になってはいけないのは十分に分かってはいるのだが……。

（ぁぃぇぇぇぇーーー!?!?!
?!栗子様、栗子様なんで!?今頃海底に沈んでいる筈では!?）

照橋さん達と供にやって来たのが栗子は栗子でも分身の方だと予想外にも程があるだろ。それと今こいつが考えていたのを文面だけ見るとこいつが栗子を海に沈めたみたいに聞こえるな。怖。
沈めた云々は冗談として、しかしよりによって栗子Cとはな、厄介すぎる。まだ栗子本人や他の分身の栗子Bの方がまだマシだ。

（おお、おおおちつかなきゃぁあぁぁ。そ、そうです！こんな時は今よりもまずい状況を想像すれば少しは落ち着く筈です。……偶然出会ったのが栗子様ではなく楠雄お兄様だったりしたら……。あはは、ここは今男子禁制ですよ?ないない。……でももしここに楠雄お兄様がいたらスイーツ店を爆破して全速力で逃げますね。ふぅ、落ち着いた）

な、ヤバいだろ?
こんなあっさりした爆破予告は初めてだ。

栗子Cにとって僕、斉木楠雄はこの世の中でも一番危険な生物という認識らしい。まあ、僕にしてみたら一番危険な生物は何をしでかすか予想がつかなくなりつつある栗子なんだがな。

状況整理に二秒も使ってしまったか。そろそろ打開策を考えないとな。

［あ、あの栗子様、こんな時はどうしたらいいのでしょうか］
［……］

どうする……ここで応えるのは不味い。少しでも僕が偽栗子だと感付かれたら色々と終わる。焦ってテレパシーもでない、よしそんな感じで行こう。

（応えてくれない？……やっぱり栗子様にとっても不足の事態、私のテレパシーが聞こえない程に混乱なさっている。……私が、そう！私がやるしかありません！）

［栗子様、ここは私にお任せください。ただ、私にとって今からする事は過去に打ち勝つ為の『試練』となりそうです。見届けてください］

何をするつもりか知らないが、沈黙が続いて五秒、そろそろなにかアクションを起こさなければならない頃合いだ。ここは栗子Ｃに任せるしかない。

「ええっと、どういう事なの？」
「くりっち？」

頼むぞ栗子Ｃ。もし駄目なら面倒だがタイムリープを使って過去の僕をスイーツ店に行かせないように誘導するしかない。だがそれは成功する確率は低い、栗子Ｃの作戦がうまくいけばそんな博打に出なくてもいいのだ。

「て、テッテレー！ドッキリです！」
「へ？」

へ？

それは無理があるんじゃないか？栗子Ｃはサングラスで隠れているが目が泳ぎまくっている。

「実は私、栗子さ…ちゃんではなくてですね」

栗子Cがかけているサングラスを外しポケットに入れ恐らく同価値の眼鏡をアポートしそれをかけ直す。外している間はしっかりと目を閉じていた。

「私の名前は櫛子（くしこ）と申します。栗子ちゃんの従妹（いとこ）です！」

サングラスから眼鏡に変えてもそう変化がある訳ではない。栗子と比べて栗子C改め櫛子の方が目が大きい気がするな、微々たるものだが。とはいえ「斉木栗子分身説」よりかは「斉木栗子の従妹説」の方が現実的で納得出来るだろう。よくやった栗子C、褒めてやる。

自分の正体を白状（嘘）した櫛子は照橋さんと夢原さん、すでにスイーツをバクバク食ってる目良さんを見比べながらしたり顔を見せる。だがその心中は――

（うわー裸、うわー…ぐぅわぁぁあ内臓！内臓気持ち悪い！気持ち悪いいいい!!）

――穏やかではないようだ。

「えっ、じゃあ栗子ちゃんの家で会った時からずっと櫛子ちゃんだったの!?全然気が付かなかった！栗子ちゃんの家からずっと近くで見てたけど栗子ちゃんそのものって感じだったよ！」

「そうですか？そういって貰えると嬉しいです。栗子ちゃんとは大の仲良しで昔からよく遊んでいますので栗子ちゃんの真似は得意なんです！」

「私も驚き～！てっきりくりっちは忍者で分身の術が使えるのかと思っちゃった！」

「あはは、私も栗子ちゃんも木の葉の里出身の忍者とかじゃないです

よぉ。あ、目良さん、でよろしかったですよね、目良さんもよろしくお願いしますね」
「うん、よろしく。でもごめん今食べてるから話しかけないで」

少し前のどろっとした疑惑の空気から一転和やかなムードが流れる。見た目は。

（美少女レベル三・零、か。まあまあ高いけど私に比べればカスみたいなもんね。それにしても栗子に従妹なんていたのね。言わずもがなくにおにとっても従妹……はっ！小さい時から遊ぶ友達、でも成長していくと供に段々とくにおは櫛子が好きに、いいえむしろ両想い、もはやもう付き合っている!?だからこの私におっふしない!?なくはない!!）
（くりっちの従妹かー仲良くなれそう。そうだ！恋ばなしよ！）
（あはーおいしいなー幸せー。でもまだ腹一部にも満たないまだ食える）
（ぎぃえぇぇぇ肉体標本んんん!!眼球剥き出しぃぃ口閉じてても歯ぐきが見えてるぅぅ!!あ、それと聞き捨てならないのですが何があったとしても楠雄お兄様を好きになるなんてありえませせんんん駄目やっぱり別の事考えてもキツイものはキツイよぉぉおおぉぉ!!）

「混沌」それ以外の言葉が見つからない。
和やかな会話とカオスな心の声が耳障りな中、僕は出来る限り気にせずにスイーツを食べる事にする。これではあまり目良さんを悪く言えないな。だが僕の本来の目的は最初からスイーツを食す事ただ一つ、遠慮せず食べさせて頂こう。
ふむ、モンブランか、全くもって嫌いじゃないな。贅沢なほどたっぷりなクリーム、甘すぎず絶妙な塩梅だ。そして土台のクッキー生地はそのサクサク加減がとても心地いい。僕は好きなものを最後までとっておく派だ、最後にとっておいた甘く煮たタイプの栗を口に頬張る。口に栗独特の甘さが広がる……素晴らしい、ただただ素晴らし

い。
さて……。
［私Ｃまだいけそうか？］
［むーりぃ…グロ画像見ながらスイーツ食べるなんてむー、はっ！
い、いいえ全然大丈夫ですよ。栗子様はお気になさらずに――］
［そうか］
「ねぇ櫛子ちゃん。櫛子ちゃんは好きな人とかいるの？」
「あっ！私も気になる！教えて教えて！」
「え、えーっとぉ……」
僕、斉木楠子は目立つように立ち上がる。目良さん以外の視線を感じる中「櫛子、お前今日のＸ時に帰る予定だっただろ。もう時間過ぎている、急いで家に戻るぞ」のような事をハッキリとした口調で告げる。
［え？でも……］（栗子様はまだスイーツ食べたいんじゃないんですか？別に私は……）
と僕、偽栗子を気遣う栗子Ｃ。確かに十分にスイーツバイキングを堪能出来たとは言えないが、いつまでもこの環境にいるのはよろしくない。早めに切り上げてしまうのが得策だ。目良さんが居る時点で予知能力を使うまでもなくスイーツを食い尽くされる未来が見えるしな。
それと栗子Ｃの栗子に対する忠誠心は本物だ。その忠誠心を偽栗子に向け続けるのは間違っている。早い所なんとかしてやりたい。
渋る栗子Ｃの手を引いて引きずるように出入り口に向かう。こうなってしまってはどうも出来ないと察したのだろう。
「今日はお会い出来て嬉しかったです！またいつかお話ししましょう

！」

そう言って手を振りながら出入り口から出る。少し強引だが一つ問題は解決した。面倒事は一つずつ確実に解消していった方がいい。

さて、もう一つの問題はどうしたものか……。

［大丈夫そうか？］

［はい！出したらスッキリしました！胃液しか出ませんでしたけどね！］

［出したらとか胃液とか言う必要ないだろ］

［そ、そうですよね。すみません…］

僕達は今家のリビングにいる。

スイーツ店から出てすぐに［栗子様やっぱり駄目だったみたいで、すごい吐き気が、オェ…］と苦し気にしていたので急いで人気のない場所に行ってから瞬間移動で家に移動した。

［ほんとに、今日はもうほんっとうにすみませんでした！］

［……いや、謝るのはこっちの方だ。私があのスイーツ店に行かなければこんな事にはそもそもこんな事になっていなかったんだ］

改めて思うが一応僕は十何年も男として生きている、一人称を「私」にするのは少し慣れない。だが今は仕方がない。

［そういえば栗子様深海に休まれに行ったのではなかったでしたっけ？］

［やっぱりスイーツ食べたくなったんだ。何か問題あるか？］

ここは開き直っておこう。

［そうだったんですね！いえ、気にしないでください。栗子様今日は長時間のイカゲーをなされていてフラフラでしたしそれにＳ＋になった時なんてテレパシーを使わずに奇声をあげて喜び、その勢いでコントローラーを壊するところなんて私の目から見てもヤバい精神状態だなと思ったんですが大丈夫そうならなによりです］

なにやってんだ栗子……。栗子Ｃ、何故そんなやつを慕っている？訳が分からない。

暫く会話のない時間が続く。だがこちらから話しかけはしない。自分の正体がバレないようにするためというのもあるが、実は栗子Ｃの体調はまだ回復していないのか浮かない顔をしてうつむいている。真っ白に燃え尽きたボクサーみたいに。そのため気軽に話しかけるような空気ではない。

（やっぱり私が悪いのです。私が赤い肌や内臓に嫌悪感を抱かずにいられたら……それかそもそもサングラスを取る以外の方法があったんじゃないですか？いや今でも他の方法は思い付かないけど……あぁ、駄目！まるで栗子様のお役に立てていない……）

かなり自己嫌悪に陥ってるな。栗子の分身はＢもＣのいずれも責任感の強い性格のようで失敗に対する精神的ショックが大きい。

今の僕のベストな選択はこの隙に家から出てしまう事だ。それで今回の僕の災難は全て解決する。だが――

（もうマジむりリスカしよ。……あ、私の腕カッターナイフ通らないや）

今にも暗黒面に堕ちそうな人間を放って逃げるほど僕は冷酷な人間じゃない。

［さっきも言ったがな悪いのは私の方なんだ。そう落ち込む必要は

ない。次頑張ればいい]
[そうですよね……今回は頑張りが足りませんでしたよね。はぁ、これでは分身失格ですよ]
こいつもうめんどくさいな。分身失格ってなんだ、聞いた事ないぞ。
[取り合えず顔を上げろ。うつ向いてばかりいるから気分が暗くなるんだ]
[は、はいぃ！あっ…]
勢いよく顔を上げた栗子Cは僕の姿を見てすぐに目を背ける。やはり相当人の裸に抵抗があるのだろう。申し訳ない事をしてしまったか。
(え!?Dだったよね、おっぱい。Dカップおっぱい。いつの間におっぱいを大きくする超能力を手に入れたのですか!?それとも栗子様の頂いていたモンブランにおっぱい大きくする成分でもあるのでしょうか？なにそれ私も食べたい。……もう一つ可能性はあるけどだとしたら――)
しまっ――!。
(もう一回確認しなきゃ)[あれ、ぎりぎりC？いつもの大きさですね……]
[？。何の話をしている。……もしそれが胸の話なら私とはいえただじゃ済まさないが]
[す、すみません見間違いでした。……あの何度もすみません今日は――]
[そんなの知らん。私には関係ない。今興味あるのはこの間新しく買ってきたゲーム「髭おっさん世界旅行」だけだ]

［え、でも……］
［そうだ、このゲーム二人プレイ出来るんだ。私C、お前２Ｐのぼうし君やれ］
（……そうですよね、栗子様はそういう人ですもんね。ふふっ）［はい。私、頑張ります！］

割りと危なかったぞ、まさか女体化した僕の方が栗子より胸がでかい、そんなくだらない事で身バレするところだった。
間に合ってくれて助かった。
［よくやった。分身、楠雄Ｂ］
［ちょマジ大変だったんでぇ、報酬にヒーコーのリーゼーのほうを後でいいんでおなっしゃあっす］

やれやれ、僕の分身は出す度に性格や表情が違ってくるが今回のは性格が駄目だな。嫌なやつを思い出す。だが働きは素晴らしいものだった。
僕が分身能力（バイロケーション）を使ったのは栗子Ｃがトイレにこもっていた時だ。その隙に制御装置を外して分身を創り出し指示をする、［本物の栗子を探しだし家の前まで連れてこい。まずは――］指示を受けた分身の瞬間移動を見届け後は栗子として栗子Ｃの相手をしつつ果報を待った。

［それで？アイツなんか言ってたか］
［あ～それってぇ命（みこと）ちゃんの事っすよね～。ええっとお、諸々の事情説明したら深海にいる方の栗子ちゃんの具体的な居場所占ってくれたんすよぉ。頼られたって、喜んでたっすねぇ。あーそれからぁ命ちゃん報酬はデートがいいってぇ言ってたっすよぉ］
［……そうか、報告ご苦労。ほらよコーヒーゼリーだ。それ食ったら分身解除だからな］ポイッ
［あざーす］キャッチ

居場所の情報が「深海」しかない中で自力での探索は無理と判断した。念写では手がかりになりそうな物なんて写らないだろうからな。苦肉の策として相トを頼らざるを得なかった。報酬のデート？そんなの知らん。

これで晴れてミッションコンプリートだ。そう思うとどっと疲れを感じてしまうな。何か甘い物でも食べに行こう。今度は男性でも入れる所にな。そう思い歩き出そうとしたところで二人の栗子の会話が心の声として聞こえてきた。

（それで？女子会は楽しめたのか）
（ええっとその栗子様に迷惑をかけてしまって）
（私は関係ない（実際行ってないし）。私C、お前自身はどうなんだ？楽しめる要素は一つもないクソみたいなもんだっのか？）
（いいえそんな事はありません！照橋さんや夢原さんに目良さんとのお話しはとても楽しいものでした！）
（それなら良かった。この話は終わりだ、ほら2（ツー）コン持て）
（はい♪）

僕に災難をもたらした張本人の癖にいい気なもんだな。……だが何故か悪い気はしない。

（おい！ぼうし君の位置はそこじゃっ、あー落ちただろうが！）
（すみません！）
（一々謝るな！どうせ残気は無限なんだ次いくぞオラァ！）
（はいぃぃ！）

おい。

第１４ｘ　斉木栗子〝達〟のΨ難　３／３　分岐点

［私Ｃまだいけそうか？］
［むーりぃー……はっ！今のは何でもなくって、えーっとぉ……はい、そうです無理です嫌ですグロいです］

僕の双子の妹、斉木栗子その分身、栗子Ｃ、今は櫛子と名乗っているか。
栗子Ｃは栗子同様に超能力者なのだが極度の、いや普通の感覚で透視による人の皮膚の下の筋肉や脂肪、内蔵が見えてしまう事に嫌悪感を覚えてしまうようだ。確かに今の照橋さん、夢原さん、目良さん、それとおまけで僕、斉木楠雄もとい斉木楠子もとい偽栗子との顔を合わせての女子会は、見た目同じな肉体標本四体と会話をする奇妙な集まりになってしまう。食欲が失せるのを通り越して吐き気が込み上げてもおかしくはない。
栗子Ｃはもう限界そうだ。これ以上ここに居続けるべきではないだろう。

［そうか、なら――］
［そうですね…出来る事ならば私一人の力で困難を乗り越えたかったのですが、仕方がないですよね］

何だ、何を言っている。

（申し訳ありませんが後はよろしくお願いしますね――）

〔時は遡り斉木栗子（本人）が深海に沈む前〕

［それじゃ後は頼んだぞ、私Ｃ］

[はい！栗子様も深海でごゆっくりなされてきて下さいね！]
[ああ……あ？]
[ど、どうかされましたか？]
[……まあ私としてはどっちだっていいんだが。私Bが私Cについて行きたいんだそうだ]
[えー！なんでですか!?]
[……。私Bによるとだな、私Cがしんぱ…(何だ。それは言うな？めんどくさいな)あー違う単に私Bもスイーツを味わいたいだけらしい]
[そうなんですか？それなら構いませんが折角の栗子様からの任務ですのであまり余計な事はしないで下さいよ？]
[任務なんてそんな固いものでもないんだが……。別に何でもいいか。ほらっ]

そう言って栗子様は私に片手を差し出します。それを私は両手で包みます。

少し説明をさせて頂きます。飛ばして頂いて構いませんよ。
分身、つまり私や栗子Bさんのような存在は見た目は普通の人間ではありますがエネルギー(もしくはサイコパワーなんて呼び方も出来るでしょうか。まあ今回はエネルギーで通しますね)の塊なのです。私達が分身としての役割を終えると栗子様の中に帰還し、元のエネルギーへと戻ります。栗子様の中にいる間は自由に動く事は出来ませんが私達の自我はしっかり残ります。それだけでなく栗子様の感じる五感を感じる事が出来ます。栗子様がコーヒーゼリーを頂くと私もコーヒーゼリーの味を楽しめますし栗子様がテレビを見れば私もテレビを楽しむ事が出来るといったかんじですね。実はその逆、感覚をシャットアウトする事も出来ちゃいます。栗子様がブラックコーヒーを飲めば基本的に苦いのが嫌いな私は味覚を遮断してしまいますし、私が超能力の中で最も嫌いな透視をを視覚を遮断する事により人様のお裸やグロ映像を見ずに済みます。

えーっと長々とお話しをしてしまってすみません。こうしてお話しする自体あまりなくて楽しくてつい……。

実はここからが本題なんです。私のような分身がエネルギーの塊と言いましたね。ですが人間との、と言うより栗子様との体質的な差異は一切ありません。あ、失礼しましたちょっとはありますね、髪の長さとか目とか鼻とかが少し違うとかその程度はあります。それでですね、栗子様が私達分身をエネルギーに変換し体に吸収出来るように私達分身も仲間の分身を吸収する事が出来る、つまりそういうお話しでした。

飛ばした方はここから読んで頂けると助かります。

掴んだ栗子様の手からピシッといった静電気のような非常に軽い痛みのような感覚と共にエネルギー、Bさんが体の中に流れ込みます（普通の人であれば非常に強い電撃に打たれた感覚と共に抱えきれないエネルギーに耐えきれず死に至ります）。

［それじゃ深海行ってくる］

［はい！いってらっしゃいませ。……Bさん念を押すようですが余計な事はしないで下さいね。アドバイスなんていらないんですからね］

【わがってらってー。だーいじょーぶだーいじょーぶ。わのことはきにしないでたのしんでおいで
こどはきにすないで楽しんでこいへ】

Bさんは人の事を想って行動出来る方です。私の事が心配で付いてくる事くらい私にだって分かるんです。ほとんど栗子様が口を滑らしましたしね。でも私は栗子様に一人でもやれるんだって、役に立てるんだって証明したいのです。

絶対にお役目を果たしてみせます！

〔現在に戻る〕

（お役目を果たす事は出来ませんでしたよ……）

それやめろ。何がとは言わないがやめろ。

（……そうですよね。分身同士助け合うというのも大事ですよね。ありがとうございます。あのそろそろいいですか？このままだと講習の面前で吐いちゃいそうで……）

今までの言葉から察するに栗子Ｃがやろうとしている事に大体の予想はつくが……。

（いきますよ！交代!!……んだばあどは任せへ）

見た目はほぼ変わっていない。いや違う、ちょっとした変化だが少し長かった髪が短くなり目付きがなんとなく穏やかな気がする。栗子Ｃから栗子Ｂへと切り替わったのか……切り替えなんて能力僕は今の今まで知らなかった。

［要らねど思うばって しー も 十 分 けっぱったはんで 悪 く思わねえでねくりちゃん］

［あ、あぁそれは問題ない］

［ふふっ、んだか。照橋さんだぢのあ〃いではわがするはんでくりちゃんはそんまますいーつけじゃあ。なんか問題あっが？ねえべ？］

［あぁ、すまないな助かる］

読みづらっ。

助かるなんて言ったものの早く帰りたいというのが本音だ。（目の前のスイーツが視界の中に入る）……まったく、やれやれだ。パクッ

モキュモキュ

もうちょっとだけ堪能していこうか。

（あ、栗子ちゃんすごい美味しそうに食べてる。ウフフ、やっぱり双子ね。くにおにそっくり）

……なんか恥ずかしいんですけど。

……そうだ、照橋さんや夢原さん、後ついでに目良さんも、分身栗子がCからBに変わった事に違和感を感じなかっただろうか。よくよく考えてみれば結構これって重要じゃないか。意識をスイーツからほんの少しだけ対面に座る女子三人へと向ける。

（あれ？くりっち雰囲気変わったような……気のせい？髪が少し短くなった気がするし目付き少し穏やかな感じするし……えっ、なにこの違和感）

悪い予感は結構当たるな。夢原さんの勘の良さは恐ろしいものがあるな。今すぐ問題が出てくる訳ではないが違和感が確信に変わるのも時間の問題だな。

やはりここは無理にでも店から出るべきか……。

そう考え始めた時だろうか僕の膝をつついてくる存在に気付いた。栗子Bだ。

［わに任せへ］

僕に軽く微笑むと前を向きテレパシーを使わずに口で言葉を発する。

「そういえばお二人って彼氏さんっていらっしゃるんですか？」

「え!?」

「あ、急にすみません。でも気になってしまって…お二人ともとても可愛らしいお方ですので」

「えぇ!?心美は間違いなく可愛いけど、わ、私も!?お世辞とかじゃないよね？本気でそう言ってる？」
「？。何故そんなに疑われるのか私には分かりかねますが、夢原さんはとても可愛らしいお方ですよ」

横目で覗いて栗子Ｂの表情を見たが穏やかで優しい笑顔を浮かべていた。そんな顔本物の栗子は絶対にしないだろう。

「やーん嬉しー！あーあ今の台詞カッコイイ男子に言って貰えたらなぁ」
「ふふ、夢原さんは今は付き合ってる人はいないんですね」
「はっ！バレた！ていうか今笑ったでしょ！もー」
「すみません悪気は一切ないんですよ。うふふ、やっぱり夢原さんは可愛いです。すぐに格好いい人と付き合えますよ」

夢原さんと楽しげに会話をする栗子Ｂ。なるほどな、会話をする事で考える隙を失わせたのか。

（この話の流れなら切りだしてもいいかしらね）
「ねぇ櫛子ちゃん。櫛子ちゃんは好きな人とかいるの？」
「私も気になる！教えて教えて！」
「うふふ、いいですよ」

超能力者に生まれて好きな人が出来るわけないだろ……っているのか!?

「くりっちも知らないの？ますます気になるー！ねーどんな人ー？イケメン？背は高い？外国人？」

外国人どこから来た。

「そうですねー……うふふ、日本人ですよ」
「うんたぶんそうだと思った。他は？」（櫛子がくにおを好きかどうかハッキリさせなきゃね。でもあれね、櫛子がくにおを好きになるなんてないでしょうね。あんな冴えなくてクラスでも目立たないようなモブみたいな男に惚れる女の子なんていないものね）

散々な言われようだが、それなら普段から僕に付きまとわないで欲しいものだがな。
照橋さんはどこか落ち着きがない。頭では可能性が低いと分かっているようだが。

「伸長は私と同じくらいで、イケメンかどうかといわれたら、そうですね私はイケメンだと思いますよ、周りからは冴えないなんて言われがちですけどね。うふふ、多分皆さんが知ってる人ですよ」
「えっ？えええぇぇ!?えっとそそそれってだっ誰なの？」
「その条件の男子っていったらもしかして……！」

おい、まさか……悪ふざけにも限度ってものがあるぞ！
［おい馬鹿止めろ！］
「うふふふふ、私の好きな人は私の従兄、斉木楠雄――」
（……）
（あっちゃーやっぱそうかー……ってヤッバ！心美が壊れちゃった……！）

おいどうするんだこの状況。……いや大丈夫そうだ。この状況を思わしくないと考えている人物がもう一人いた。

「――ていうのは冗談です！テッテレー！また騙されましたね！私の好きな人はさっき言った条件と同じで伸長は私と同じくらい周りからは冴えないなんて言われちゃう有名人、ピーナッツ上田さんなんですよ！えへっえへへへ」アセアセ

頼りになる救世主となると勝手に思い込んでいたが、これは酷い。テンパり過ぎてまるで嘘臭い。

「え、えーそーなんだー（棒読み）。ピーナッツ上田なんて以外～櫛子ちゃんって結構年上好きなんだねー」

「えへへ、そうなんですよねー。昔から年上が好きでお兄さんっていうよりおじさんってくらいの人が好きなんですよね～」（やっぱり駄目です。少し休憩したくらいじゃ気持ち悪さが収まりそうにありません。またグロ映像なんて見たら即吐いちゃう）

そう考えている栗子Cは何度も瞬きをしながら目をさ迷わせている。そんな様子では何を言ってもまるで説得力がない。

「へーそうなんだ」（絶対違うじゃん！絶対くにおが好きなんじゃん！ピーナッツ上田なんて絶対好きじゃないじゃん！あんな何処にでもいるようなやつが好きな人なんて私以外にいないと思ってたのにぃ～～!!あーもう何なのこの気持ちは～～!!っていうかくにおじゃなくて楠雄だったのねもう間違わないわ……！）

照橋さんがさっきから動揺を隠しきれていない。正直こんな照橋さんは見たくなかった。

しかしなんだこの修羅場になりそうでなる要素が足りずに冷戦化したような現場は。落ち着いてスイーツを食べるような環境ではない。食べるといえば今のところ何も発言していない目良さんはどうしているのだろうか。

「お客様困ります！当店はスイーツバイキングですのでいくらお召し上がりしていただいて結構ですが、スイーツは一度テーブルに戻ってからお召し上がりください！」

「フゴッンゴッンー！（いちいちテーブルに戻っていたら時間が勿体

ないでしょー！）」

見なかった事にしよう。

その後目良さんがスイーツを食いつくすまでの間「楠雄お兄様が好きなんて冗談ですからほんとはあんな人好きでもなんでもないですから！」と弁解するも、本当は好きだけど照橋さんの様子から気を使っているかツンデレか何かと思われたため残念ながら栗子Ｃの努力は無駄に終わった。

「あ、あのよろしかったらまたお話ししましょうね」

「ええ、私もまた櫛子ちゃんとお喋りしたいな」（斉木櫛子……名前忘れないわ。絶対あなたに楠雄を渡さないから。これからはもっと楠雄に私の美少女っぷりを見せつけなきゃね……）

「うん！私もー！」（心美には悪いけどなんかドラマみたいで面白かったなー）

「あ、その時は私も誘ってね。もしよかったらでいいんだけどその時も奢ってね！ね？」

スイーツ店を後にしてすぐに帰る用事がある事を告げ、女子三人と別れ帰路につく事が出来た。スイーツ店にいた時間はそれほど長くなかった筈なのだが二か月半くらい居た気分だ。スイーツを十分食べられたが堪能出来たのは始めだけで後半のあの空気には折角のスイーツも台無しになってしまった。

（何であんな事言ったんですか！さっきから笑ってないで説明してくださいよ！……面白かったでしょ、ですって!?何処が面白いんですか！何処が!!私があの危険生物を好きになる筈ないじゃないですか！もう…照橋さんと会いづらくもなってしまいましたよ……はぁ……）

隣でちゃっかり眼鏡をサングラスに戻した栗子Ｃが栗子Ｂと脳内

？体内？喧嘩をしている。正直栗子Ｃに僕を危険生物呼ばわりするのは止めて欲しいのだが僕が直接言っても怯えさせるだけなのでどうしようもない。

そろそろ喧嘩を止めに入った方がいいだろうか。

［気持ちは分からないでもないが一旦落ち着け］

［でも……］

［私Ｂと替われ。私が話をつける］

［はい、分かりました…栗子様がそうおっしゃるなら……はいよぉなんだべくりちゃん］

ＣからＢへ替わったか……やれやれ。

［何がくりちゃんだ。もう気が付いているんだろ、僕が斉木楠雄だって事くらい］

［ふふ、まぁばれるべなどはおも〃（だろうな思）ってだけどね］

テレパシーがあれば栗子Ｂが僕の正体に気付いていると気付くのは容易だ。僕が栗子ではないと確信を持つには二つの理由があったようだ。

・栗子Ｂは僕、偽栗子に「くりちゃん」と呼び掛けに何も反応しなかったが、本物の栗子は「くりちゃん」呼びは快く思っていないらしく言葉の最後に「それとくりちゃんは止めろ」を付けるのが恒例だったらしい。そこで確かな違和感を感じたようだ。

・途中、栗子Ｂが僕の膝をつついてきたがあの時サイコメトリーを使い僕の感情を読まれていた。そこで確たる自信を持ったらしい。

面倒を避けるため極力バレたくはなかったんだがな。とはいえ別にこれが問題な訳ではない。

［単刀直入に聞くぞ。何故あの時斉木楠雄が好きなんて言った。そんな事言う必要性はなかった筈だが？］

［んふふ～］

栗子Ｂは愉快そうに笑いながらサングラスから眼鏡にかけ直す。

［あの〃どぎののくすおのにっちゃの戸惑った姿おもしれがった～］

［質問に答えろ］

［ふふ、すまねな。うーんんだねえ、敷いて言うなら照橋ちゃんの恋を応援するため、かな］

［……詳しく説明しろ］

［くすおのにっちゃも聞いだべ？わがくすおのにっちゃを好きっつったあどの照橋ちゃんの心の声ばさあ。わあみてーなやつに対して嫉妬心なんか持っちまってや、めんこいべ？わは前々からもっど照橋ちゃんにはもっど積極的にあたっくして欲しいなど思ってたんずや］

［……やってくれたな］

恐らく僕が照橋さんに付きまとわれてうんざりしているのを知っていながらの行動だろう。つまりはあの発言は僕に対する単なる嫌がらせか。

［お前はマシなやつかと思っていたが…考えを改める必要がありそうだな］

［んふふ～♪］

憎たらしいほど上機嫌な栗子Ｂを尻目に帰路につく。これからの照橋さんに、より警戒しなければならないと思うと自然とため息がでてしまうのだった。

〔数十分後、斉木栗子（本物）帰宅。事後報告をした後に斉木栗子（本物）の体に帰還したその後の話〕

【すこしはおぢづいだが？】

【あ、はい。取り乱してすみませんでした】

【なんもさ】

【それにしてもスイーツ店で出会った栗子様が実は楠雄お兄様だったのには本当に驚きました】

【うんだ、しーちゃんが叫びまくるから気でも失うんじゃねぇがって心配したんだがら】

【だってそうじゃないですか！あの危険人物が自分に不都合な結果を残した私たちに報復でもするんじゃないかと思うととても生きた心地がしませんでしたよ】

【でも実際報復もなんもしなかったべ】

【それは、そうですけど……】

【んだがら前から言ってるべ、確かにくすおのにっちゃはわだぢにとって唯一無二の天敵って言えるがも知れねぇけどな、人に危害を加えるような人じゃねぇべ、ってな】

【そう、なんでしょうか？まだ信頼出来そうにありません】

【ま、ゆっくり見極めていげばいいべ】

第15ｘ―1　Ψ上級フィレ肉よりもスイーツを焼き肉編

ジュージュー
〔省略〕
「うまい！……あれ？僕の迫真のメシをかっ食らうシーンは？」

父さんの食事シーンは私の独自判断で時を消し飛ばした。それをやっていい中年は孤独な古物商だけだ。
私は今家族揃って焼き肉を食べに来ている（二つ上の兄？あれは家族に該当しない）。
焼き肉は嫌いじゃない、別に特段好きというわけでもないが普通に美味しい。私としては主役の肉も当然美味いが肉と一緒に焼く野菜や肉に巻いて食べるような野菜なんかが肉以上に美味しく感じられる。肉ばかりでは口が脂まみれになるがそこに野菜を放りこむ事で野菜の美味しさが際立つ。それだけでなく口の中がさっぱりする事でまた肉を美味しく食べる事が出来る。うおおおーん、今の私は肉と野菜の永久機関……何を考えているんだ私は。
ふと、網の端に黒い物体がある事に気付いた。それはもはや肉とは言えない何か、炭だ。私は割りと食べ物を粗末にするのは割と許せない方だ。
私は炭を指差しながら父さんを睨む。

［食え］
「は!?。いやいやいや、それもう食べれないよね!?」
［自分で食べられない状態まで放置したんだろ。食べられないと言うのならこの肉に反省を込めて焼き土下座しろ］
「そこまでしなけゃ駄目なの!?厳しすぎない!?そもそもそれぼくが焼いた肉じゃないし！楠雄だし！ちょっ、楠雄さっさとそのまっくろくろ○けどかしてよ！」

[……]

?。反応がない。高校生にもなって反抗期だろうか。

斉木楠雄、彼の様子をちらりと覗いてみるに先程から騒がしい連中が気になるらしい。視線の先は……会話の内容からしてうちの学校の野球部か。奴らが店の中に団体で入ってきたのはついさっきの事だ。私としては別に気にする事でもないため私は気にせずに焼き肉を食べていたが、彼が肉を放置してしまう程の何かが奴らにあるのだろうか。

[……まさかとは思うが野球部に入りたいのか?この作品を青春スポーツ物にでもするつもりか]

[僕がスポーツなんてやろうものなら頭に「超次元」を付ける必要が出てしまうだろうな。別に野球に興味があるわけじゃない]

[じゃあなんであんな面白みもない野球部の食事シーンなんてアホみたいに眺めている]

[誰がアホだ。分からないか?あのベタにベタを重ねたベッタベタなｔｈｅ．スポーツ漫画なあいつらの行動が]

……確かに思い返してみると野球部の連中はベタだった。しかも今なんて他校の野球部と偶然の再開からの焼き肉大食い勝負……これ「テニ○の王子○」筆頭にジャンプスポーツ漫画でよくやるやつじゃないか?確か焼き肉だけなら「アイ○ールド２１」とか「ハ○キュー」でもやってなかっただろうか。うーん「スラム○ンク」…ではやってない、よな?やっぱ「テニ○の王子○」からだろうか。

いやそれはそれとして。

[それは分かった。だが、それの何が面白いんだ]

[分からないか、残念だな中々に面白いのだが]

何がどう残念なのか一つも理解出来そうにないんだが。彼の感性

はどこかおかしい。

［……まあベタ野球部連中はオマケみたいなものだ。僕が気になっているのは、彼だ］

彼（斉木楠雄）がこっそりと指差す彼なる人物を探すのだが彼（斉木楠雄）が気になるような人物を発見出来ない。

［……どれの事を言っている］

［ふっ、そうだろうな、彼を一発で探し当てるのは至難だろうよ］

［何故お前がドヤる。どういうやつなのか具体的に言え］

［それは難しいな。彼はこれといって特徴がない、目立つ事のない存在。素晴らしいだろ？僕の理想とする人物だ］

［え？お前ホモだったのか（ドン引き）］

［断じて違う］

［冗談だ、ムキなるなよ］

［僕はずっと平常心を保ったままなんだが。話を戻すが、彼のような〝普通〟のどこにでもいるような人間は僕にとって羨ましく見える。お前も僕と同じ超能力者なら多少は理解出来るだろう？］

［知るか（即答）］

［イラッとした］

［そこは平常心保てないのかよ］

彼の言葉に素直に首肯くのは癪だったから知るかなんて言ってしまったが、本当は気持ちが分からないでもない。

超能力なんてものを使えてしまうと通常であればなんでもないものでも困難に感じられるものは多々ある。例えば普通に映画館で映画を楽しむのは不可能だったり、本来なら知り得ない人の本音が聞こえるせいでまともに人と会話が出来なかったりと色々ある。まあ、慣れだな。

とにかく普通とは真逆に位置する彼（ちなみに「普通」の対義語は

希少、奇抜、異常、特別……と、複数存在するが、彼を異常者と呼ぶのは流石にひどいので止めておく）が普通に執着しても別に可笑しい話ではない。
私はどうなのかって？私の反応から分かって貰えると思うが実は少し違う……詳しくは後日話すとしよう。
今はそれより先にする事があるからな。

［それよりこれを見ろ］
［なんだこの黒いの］
［お前が今から食べる晩飯だ。おっと捨てるなんて言うなよ、肉をこんなにしてしまったのはお前の責任だからな。お残しは許しまへんで］
［食堂のおばちゃんか］

今なにより優先されるのは彼が苦味の塊を口に入れる様を眺める事だ。彼に嫌がらせをするチャンスは逃しはしない。

［さあ、ほら早く食えよ。あ、なんならお前のコップに水でも注いできてやろうか。水で流し込むように飲み込んでみたらどうだ？（悪い笑み）］
［復元、肉を焼く前の状態に戻す］カッ
ジュージュー
［焼き直しだな。そうだ、水を注いでくれるんだよな。ほら］コップを差し出す。
［ファッ○ュー］

私は苦い顔をしながら彼のコップに水を注いでやった。溢れさせてやろうとしたが超能力で水の流れを止められた。クソったれ。

第15ｘ―2　Ψ点結果、気になる？　テスト編

廊下に人集り、私もその一人として混ざりに行く。皆の視線の先には二学年全員の名前とテストの総合点と順位が書かれた横に長い紙。ある者は安堵し、ある者は点が上がった事に喜びを表し、ある者は次回のテストは頑張ろうと決意する者もいる。人それぞれの反応を眺めているとなんだか面白い。そんな中、特に面白いのは――

「てめぇなんでオレより順位上なんだゴラァ！どうせアレだろカンニングだろ、カンニングなんだろ！あ〝あ〝！？」

「落ち着け亜蓮！本来のこいつはカンニングペーパーを作る事すら出来ないはずだ！馬鹿だからな！」

「かんにんぐってなんだ？お？んなもんは使ってねーけどよーこの父ちゃんの形見のえんぴつなら使ったぜぇ」〔書く方の反対にア、イ、ウ、エ、オと書かれた鉛筆を見せつける〕

「イカサマじゃ……！……今、親父の形見つったか？……おう、そうか……うん」

「と、とりあえずこの話はやめようぜ！そ、そうだ斉木は何位だったんだ？……あっ」

へ、平均点をプッ、狙って出した結果プッフフ、思考する事さえろくに出来ない馬鹿なやつに――

［燃堂に点数負けてやんのぉぉ！うひひひ、ひゃーひゃっひゃっぶひゃひゃひゃー！］

［真顔でブサイクに笑うな、っていうかわざとブサイクに笑おうとしてないか？いや、狙い通りの順位だからいいんだ、佐藤くんと同順だしな。それよりお前その点数は……］

［あ？何か文句あんの］

［……いや、お前がそれでいいなら僕から何も言う事はない］

彼は何を一丁前に心配しているんだか。私が学年テスト一位だからか？

前にも話したが高校二年生が習う勉強の範囲は全て頭に入っている。なんなら三年生の範囲も予習が大体終わり大学受験に向けて頑張って行こうなんて考えている所だ。

もしかしたら私の学力について疑問を呈する人もいるかもしないな、「は？どうせテレパシーとか透視でカンニングしとんのやろ？あほくさ」みたいな感じで。

これぱかりは完全に白とは言えない。超能力者である限り仕方のない事だ、受け入れるしかない。だがテストをある程度公平に受ける方法ならある。簡単な話だ、テストの問題の最後から始めればいい。少なくとも半分以上は私の実力と胸を張って言える。後半は他人の解答がテレパシーで聞こえてしまうが出来る限り無視するようにしている。

これで納得して欲しいのだが……まあ納得出来ないなんて言われてもどうしようもないんだがな。納得しろ、いいな。

もう一度言うが私は学年順位一位だ。どうしたって目立つ存在になる、

だがそれがなんだって言うんだ？

私の人生設計上、高学歴は必須だ。目立ちたくないという理由だけで内申点を下げる気にはなれない。言い方は気に食わないだろうが周りの人間と比べて私は出来る人間なんだ、それを隠しながら一般的ではあるが低収入な仕事になんぞ就きたくなどない。

私は金が欲しいんだ。超能力を使えば簡単に手に入る紙切れではあるが、私はテストの件でもそうだがズルは嫌いだ。

父から少額なお小遣いを貰い（ぶんどり）、少ない金で食べるお手頃で美味しいスイーツも悪くはないが、ぐる○イで食べてるような高級レストランの高級スイーツだとか五十五ｇ三千円のコーヒーゼリーを毎日のように食べる、それが未来の私の姿だ。

将来の話はここまでにして今の高校生活の話に戻そう。

当然だが私の頭脳明晰っぷりはクラスに広まっている。それによってテスト前に勉強を教えて欲しいと人が集まりはするが、それほど問題はない。

私は勉強を教えて欲しいとやってくるやつを拒んだりはしない。なんなら分かりやすく丁寧に教えてやるさ。クラスの皆の学力向上は望んでやらなくもない。ただし勉強以外の話はとことん乗ってやらない。

例えばクラスのとある女子の場合は、

「ねえねえ栗子さん、ここってこうやるとこうなるらしいけどどうしてこうなるの？よく分かんなくてさ。あ、そうだ！テスト期間中早く帰れるじゃん？カラオケ行こうよ～」

彼女の疑問に答えてやった後、テスト期間中は遊ぶ為ではなく勉強をする時間に当てるべきだよ、と耳がいたくなる言葉を付け加える（余談だが私はテスト期間中ずっとスペランカーしてた）。彼女は「あ、うん、そだね」となんとも言えない顔をしてからは勉強以外の話はしなくなった。作戦通り。

他には、とある男子だと、

「栗子さん！オレ頭悪くてさ用語を覚えられないんだ。だからさもし良かったらオレと放課後勉強しない？テスト期間中だから放課後時間はたっぷりあるしさ。あっ、そうなるとその間二人っき――」

こいつの台詞が終わる前にテスト範囲の用語をまとめ、更に覚えやすいように分かりやすい解説を付け加えた紙を渡してやった。「お、おう、ありがとな」と言う男子は何か言いたげだったが無視して教室から出てやった。私にはその男子に時間を割く時間なんぞないからな（スペランカーをする時間はある）。

勉強に関して話はするもののそれ以外の話には乗ってこない冷たい人だけど勉強を教えてもらっているので悪くは言えない、それがク

ラスの私の位置づけだ。悪くないだろ？

しかし当然ながら好感度メーター（人の好感度を数値化して見ることの出来る能力）はどうでもいいやつを表す五十とはならない。だがそれでも別に構わないと考えている。どうせ初めからそんなの無理だと諦めてるからな。

忘れているかもしれないが私は女だ。好感度メーターを五十にするには最低でもある程度の女子としての普通の行動が出来なければならない。

女子の普通とは何かを今一度考えて見て欲しい。普通の女子、それって夢原さんのような人なんじゃないかと私は思う。基本的に同じくらいの年の子とのお喋りが好きで恋愛やファッション、占いなんかに一喜一憂する。これは個人的なイメージであり悪く言うつもりは全くない……のだが、

私はやだ、そんな女子っぽいのやだ。

お喋りなんて極力したくないし恋愛もファッションも占いも全くといって興味がない。

斉木楠雄、彼は「普通」に憧れを持つようだが私は「普通」に憧れを持てない。

私は私らしく、超能力者として「自由」で、そして「平穏」に生きて行きたい。

双子だから考え方も似ているんじゃないかなんて思われたりもするが、

私は彼とは違うのだ。

勘違いして欲しくはないのだが、私は女性らしく生きるのが嫌なだけで人としての普通の行動はするからな。

第１６ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女
その１

はぁ～人生って本当に簡単だわ～。私の人生はＥＡＳＹモード。
ただ廊下を歩くだけで男子達は私に注目の的。気分は当然最高だけどただ視線を集めるだけじゃ終わらないの。

「ね、ねぇ君！どこ行くの!?よかったら僕が案な、いって!!」
〔横から肩に〕ドン！
「お・ま・た・せ！喉が渇いたって言ってたから売店でイチゴ牛乳買ってきたよー♥」

困っていればすぐ誰か来てくれるし欲しいものは何だって手に入る。

「アてめなにぶつかってんコラー！スッゾコラー！」
「アァ!?てめこそ何用コラー！」
「ザッケンナコラー！」
「スッゾコラー！」

私を巡っての争いは日常茶飯事。美しいって罪よネ。

「チョッマテコラ！……はーいイチゴ牛乳、あ・げ・るよ☆」
「ありがとネ♥」
「へへ……」
「チッ、てめ調子こいてんじゃねっゾコラー!!」
「んだコラー！ナニサマだコラー！」
「イヤー！」
「グワー！」
「おお、なんというマッポーか！コワイ！」

世界は私を中心に廻っている……何故か、ですって？フフッそれはもちろん……

私、梨歩田依舞はスーパー美少女だから、ヨ♥

Ψ　Ψ　Ψ

はぁ、それにしても超能力を使えたとしても人生簡単にはいかないものだな。チートを使っているのにＨＡＲＤな歯ごたえだ。

普通に廊下を歩いていると男共に注目されていると嫌でも気が付く。気分？いいはずがない。とはいえただ注目されるだけならまだよかったかもしれない。

「あ、あの斉木先輩！今日って暇な時間ってありますか？よかったらぼくとお話しでも……え、あ、ちょっ、ちょっ待って、え？」

〔肩に手を〕トン

コソコソ「バカお前、栗子さんが俺達みたいなのに構ってる時間はないんだよ！」

困った事に私の貴重な時間を邪魔してくる邪魔な邪魔者が増えてきている。とにかく邪魔。

「でもぼく、斉木先輩とお近づきになりたいんだ。無理かも知れないけどもう一回行くぞ！ワンモアセッ――」

「この情報弱者が！何回行ったって同じだ。いいか？栗子さんにはな、――ってな具合にやるんだよ。二年生の間じゃもはや常識だぜ？ほら行ってこいよ、グッドラック」

「あ、あの栗子さん、数学で解らないところがあるんですけど教えて頂けないでしょうか？あ、タダでってわけじゃなくてですね、こ、このコーヒーゼリーを差し上げます！だから…」

コクリ

「いいんですか!?ありがとうございます!!」（あぁっ幸せだ！普段からクールな斉木先輩の笑顔が見られるなんて！ギャップがすごい、すごくいい、すごいい！）

やっべ、コーヒーゼリーを見ていたら口元が緩んだ。

本当なら世界の片隅でひっそりと生きるように学校でも生活していきたいんだ。何故かって？

私、斉木栗子は私の平穏と自由を一番に望む超能力者だからだ。

☆　☆　☆

……なーんてね、ちょっと言い過ぎカナ。テヘペロ

私がスーパー美少女なのは紛れもない事実なんデスけど。でもデスよ、世界は私を中心に廻ってるーなんて今にしてみれば恥ずかしいくらいデスよ。……どうしてって？それはもちろん…！

だって世界は照橋心美先パイの為に廻っているんデスから（断言）！

あぁ、なんて美しくて優しくていい香りがして神々しいオーラがあって、まだまだ語り尽くせないほど素敵な人……！産まれてから初めて私の美貌が負けたんだって思い知らされましたけど、別にいいの！だって私は照橋先パイが大大だ～い好きなんだもん！

でもそんな大好きな照橋先パイをたぶらかす不届き者がいるの。

そいつの名前は斉木クズ雄。本当はクズ雄じゃなくて楠雄なんですけどクズ雄でいいんデスよあんなやつ！

？クズ雄は一見するとどこにでもいる平凡眼鏡で真面目そうな感じの人なんデスけど。それは溢れ出そうなほどのクズっぷりを隠すための仮面でしかないんデス。

あいつは片っ端から×れそうな女を見かけては甘い言葉で声をかけては×するような最低最悪のスケコマシのクズ野郎…！

しかも見るからに×で×で×そうな彼女がいて、呆れた事に付き合って三日やそこらで×なんてヨユーでして×どころか×までいっちゃてる上に×にまで手を出すような、正に下衆の極み。きっと×

あんなクズ雄の家族もクズなんだわ、そうじゃなきゃあんなクズに育つはずないデスから！

このスーパー美少女の私もクズ雄に

「君、可愛いね。正にスーパー美少女だね…。照橋よりお前の方が可愛いぜ…これマジでそう心から思ってかっら…」

なんて言われて騙そうとしてきたましたケド私は初めからこいつはクセー、ゲロ以下の臭いぷんぷんするクズ野郎だって見抜いてました！だから騙されたりなんていませんヨ！〔？のマークからここまで梨歩田依舞の誤解〕

そんなクズ雄を照橋先パイは好きだと言っていマスが、これ絶対騙されてマスよ！クズ雄となんて付き合ったりなんて絶対駄目！確実な不幸な結末が待ってるに決まっているわ！

照橋先パイの幸せを応援したい…！でも無理に出てもらった合コンでも照橋先パイのお眼鏡に叶う人はいませんでしたし……あぁ、どこかに照橋先パイを幸せに出来るカッコいい人いないカナ？

Ψ　Ψ　Ψ

……なーんでこんな面倒な事になってしまったんだ。ヤレヤレ

……いや理由は分かっているんだ、うちのクラスだけでなく他のクラス、今や一年どころか三年のやつまで、わざわざ私に勉強を教えてくれと頼みに来るその理由が。

やつらは私を女性として魅力を感じているからだ（断言）。

やつら曰く、綺麗で知的で切れ長の目がクールでミステリアスな雰囲気がそそる……はぁ、何一つ同意出来やしないしただただ不可解で仕方ない。何故私なんだろうか公園に置いてある銅像とかじゃダメなんだろうか。

私のもとへ変な期待をしながらやってくる男共に顔を近づけてこう言ってやりたい、よく見てみろ今お前の目の前にいる女はただの陰キャ眼鏡だぞ、とな。まぁ言うつもりは全くないがな。

だが幸いにもこの些細な問題を解決してくれる都合のいい人物がいる。

その人の名は照橋心美。最初に断っておくが照橋さんは知り合いではあるが友達ではないぞ。
照橋さんは私と同じクラスの人で知り合いと言うこともあって廊下なんかで会うと気軽に話し掛けてくるのだが、その間周りの男子の感心はほぼ照橋さんに向き私への感心は薄くなるだけでなく、元々私に用事（勉強を教えて欲しいという名目で私に近づく事）があった男子も照橋さんを見る事が出来たという満足感から私への用事なんぞどうでもよくなったりと、とても助かっている。……ただ私へ渡すはずだったコーヒーゼリーを照橋さんに渡すのはなんというか……いや、なんでもない。
照橋さん的には、
（ごめんね栗子ちゃん。でもね世界は私を中心に廻っている、ううん、世界だけじゃなくこの世の全ては私に味方をしてくれるように出来ているの。だから貴女を好きになってしまった男の子を奪ってしまうのは仕方のない事なの。ほんとごめんね♥）
などと考えているが、とんでもない！大助かりだ。その調子で私の事が気になるなんて錯覚を覚えた男共の目を覚まさせてやってくれ。……でもコーヒーゼリーは惜しい……はぁ、私も目を覚ますべきか？

☆　☆　☆

ある日の登校中、私見ちゃったんデス…。偶然お見かけした照橋先パイが天使のような、というか天使そのものの笑顔で、ある女に声をかけるそんなシーンを。一目で分かりました、
その女はあの斉木クズ雄の身内だって。
〔後編へ続く〕

第１６ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女　その２

「おはよ栗子ちゃん、今日もいい天気ね。あれ？今日は斉木君と一緒じゃないのね」

ああ、斉木楠雄、彼なら君が来るのが分かっていたからいないぞ。彼からしたら照橋さんと共に行動するのはデメリットが大きいらしいからな。私はそうじゃないが。

「ふーん今日は用事があるから先に学校に行っている……そう。ふーん……」（なによ栗子が見えたから登校中はいつも一緒にいるくにおもいると思ったのに！朝早くから完璧美少女の私に会える幸せからおっふ十連発は固かったはずなのにー！）

そればっかだな君は。

「それじゃ早く教室に行こっか。あ、知ってる？大豆と枝豆って同じ品種なの。魚のブリとワラサもね」

くっそどうでもいい。

照橋さんの話す内容は無難な内容か、わりとどうでもいい知識か、彼についての情報収集かの三択だな、まったく。

ただ別にそれがうっとうしいとまでは思わない。適当な相づちさえうっていれば取り合えず満足してくれているようだしな。……本音を言えば正直それすら面倒くさい、だがそれくらいはしなければならないだろう。前回話した通り照橋さんが近くにいるだけで私にとって十分メリットがあるのだ。せめて話しくらいはちゃんと聞く姿勢でいなければな。

照橋さんがやって来てすぐに、いや照橋さんがやって来る前からすでに周りの男共は道を空け、いつもの謎の声を出している。

「おっふ！」

「オッフ……！て、照橋さんだ……！」

「……!!おっふ……（あまりの衝撃で一瞬声の出し方を忘れちゃった

……。あの人が噂で聞いた照橋先輩あんなに綺麗な人は見た事がないよ……。お近づきになりたい)」
「オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!オッフ!(朝早くからを照橋さんを見れた幸せからおっふ十連発出ちまったぜ)」
マジでするやついるんだな、軽く引いた。
と、まあ今の奴らを見れば分かるように、照橋さんがいるおかげで周りからの注目はほぼ全て照橋さんがかっさらってくれている。
だから隣の冴えない眼鏡女なんぞに注目する奇特な人間なんて極々僅かだし、いても〝照橋さんとそのおまけ〟という認識、普通の女子なら「ぐぬぬ」と声が漏れ出てしまうような屈辱感を覚えるだろうポジションだがひたすら脚光を浴びたくないと常日頃から思っている私にしてみればスーパーベストマッチだ。
さて、教室に着くまでもうしばらく照橋さんの話しに付き合わないとな。フフ、もし照橋さんの隣にいるのが私ではなく男子、もっと言うならあの照橋さんが恋心を抱いている冴えない眼鏡男なら周りの男共の反応もまた違うんだろうのだろうけど、プフフ、女の私が照橋さんと仲良さげに話しているところを見て敵意を抱く男なんていやしないのだから気楽なものだ。
(あの女ぁなーにあこがれの心美先パイと仲良さげに話してるんデスか!マジで身の程知らずなんですケド!!)
……訂正しよう、敵意を抱く男はいないが敵意を抱く女ならいるようだ。

☆　☆　☆

別に心美先パイが私以外の女子と楽しそうに歩いているのが憎たらしいとかそういうんじゃないんですヨ?
心美先パイってなんか美人すぎて女の子からしたら近寄り難い存在じゃないデスか。だからカナ、あの日の合コンで心美先パイの友達の……えーっと、名前なんでしたっけ?……確か最初は、ゆ、で始ま

る名前だったような？あ！そうそう弓原先パイだ！まあ名前なんてどうでもいいデスけど友達がちゃんといて安心したんですヨ！
私なんかが心配するのもおこがましいかもしれないデスけど、心美先パイには幸せになって欲しいですから！
だから心美先パイが楽しそうにお友達とお喋りしてる微笑ましい光景が見られてとってもハッピー☆……その友達がクズ雄に激似の女じゃなければね!!!

Ψ　Ψ　Ψ

なんか急にキレだしたんだけど。
後ろで（心の中で）騒いでる一年女子は照橋さんのために何をそんなにキレているんだか。それにしても照橋さんを慕う女子か……。
隣の、女子からも好かれる美少女の顔をなんとなしにちらりと覗いてみる。
ニコニコ（普段物静かな女の子と分け隔てなく楽しくお喋りする私尊可愛い）
こう言っちゃなんだがこんな女を慕う女がいるなんて意外だな。
〔完璧なブーメランである（小説もどき第１４ｘ３／３後編参照）〕

……は？なんだ今の声。

「これは一年の子にも話して驚かれたんだけどね、なんとホワイトアスパラガスとグリーンアスパラガスも同じ品種なのよ、栗子ちゃん」
そんなどうでもいい情報をドヤ顔で話しているのにも驚きなんだが、さっきのあの声ほんとなんなんだったんだ？そっちの方が驚きなんだんだが。

☆　☆　☆

あああ、心美先パイが私の話題を出してる（恍惚）……ハッ、しっかりしなさい依舞！あれくらいで一々感動するなんてチョロイン

（ちょろいヒロイン）みたいじゃない！
心美先パイのあの時のお話しは正直どうでもいいなってつい思っちゃってとっさに驚いた振りをしましケド（ドヤ顔する心美先パイ可愛い）。なーにあの女困った顔してるんデスか！心美先パイのお話しは確かにつまらないケドそれでも慈悲深い心で聞いてあげるべきでしょ!?常識的に考えて！
やっぱりあの女が心美先パイの近くにいるのを見てるといてもたってもいられない。
まだ確かな情報は何一つないけどあの女は危険、だってクズ雄に激似なんだモン！きっとあの女は心美先パイとその気もないのに仲良くして心美先パイによって来る男子を奪おうって魂胆なんだわ！心美先パイ狙いでやってくる男子をどう奪うかは予想も出来ないけどあの女は見るからに頭がいいわ、眼鏡かけてるし、恐らくあのすました表情の下で悪どい事を考えてるに違いないわ！絶対にそう！

Ψ　Ψ　Ψ

確かな情報が一つもないのによくそこまで考えられるものだな。……ただ、的を射ていたり的はずれではあるが別の的に当てている部分があるあたり恐ろしいがな。

☆　☆　☆

あの女、いやあのクズ女を心美先パイから一刻も早く引き剥がさなきゃ！
でも情報が一つもないのは不味いですヨね。作戦を立てるためにもあのクズ女の事を調べるのよ依舞。難しい事は何一つないわ、だって私は美少女なんだもの！
「おっふ！て、照橋さん。いつ見ても綺麗だぁ。あ、栗子さんも一緒なんだ……ってオイオイオイオイオイオイあの栗子ちゃんが人の話に耳を貸すどころか返事までしちゃってるぜおい。おれが話しかけてもいつも無視なのによぉ」

「それは違うぞ。栗子さんと話しているのはあの照橋さん様です。照橋さん様はただの人ではなく女神ですからね、栗子さんの凍てついた心をも溶かす、そんな御人なのです」
　ふーんあのクズ女、栗子って名前なんだ。
「はあ～朝から照橋さんと斉木さんが並んでるシーンを見られるなんてなー！神に感謝だぜ！」
「完全に同意。照橋さん一人でも完璧な美しさを更に知的でクールな斉木さんが隣にいるのはまさにベストマッチ、双方の美しさを引き立てるそれはさながらアマ○ミの学園のマドンナ森○はるかとそのクール系の親友○原響の如く素晴らしい関係であると言えるであろう」
「その例えが適切かどうかちょっとわっかんねーけどさー、照橋さんと斉木さんが並ぶ光景は最高だよな～」
「ちょ～っといいですかぁ先パイ、あのね聞きたいんですけどぉ～」
「ごめん後にしてくれる？」
　何こいつ一切私の方を見ずに断わりやがったんですけど…そりゃ今は心美先パイの方が大事だって私でも分かるけど……傷つくわぁ……。

〔時は流れ昼休み時間〕

　バッチリ調べてやったわ！
　フフン！私だって心美先パイに比べればほんのちょこっとだけ魅力が足りないカモですけどちょ～っとだけ男子に色目を使えばなんだって調べてきて貰えるんだから！
　うーんそれにしても思ってたよりあのクズ女について知ってる人が多かった……ううんそんなの気にしていても仕方ないわ。
　斉木栗子、やっぱりあの斉木クズ雄の兄妹で二年生。つまり双子って事ですネ、双子ならやっぱり考え方とか価値観とか似るはずだからクズ女なのはまず間違いないわ。
　その他にもいつも無口だとか二年の学年順位一位だとか何考えて

るのか分からないところがミステリアスで興味を惹かれるだとか使える情報もムカつく情報も色々と知れたわ。
その中の一つに、斉木栗子は図書委員で図書委員の仕事のない日でも本を読みに図書室に頻繁に行っている、らしいじゃないですか。これは使える情報よね。本当は教室に乗り込みたいところデスけどそれだと心美先パイに迷惑をかけちゃう。だから図書室にあのクズ女が一人で行ったところを狙うべきそしてそれは今！あのクズ女にガツンと言ってやるわ！待っていなさい！

Ψ　Ψ　Ψ

うん、そうか、じゃあ待ってる。図書室で。
梨歩田依舞、君の考えている事は全て私に筒抜けなんだ。彼の事はともかく私をクズ呼ばわりした事も一時期世界は自分を中心に廻ってるとか考えてイキっていた事も彼を短い期間ではあるが好きになっていた事すら把握している（あのまま「斉木楠雄の♀難」を加速させていれば良かったのに）。

「――ここに代入した後に公式を当てはめて――」

梨歩田がこちらに向かっているのもすでに知っている。面倒になるのは目に見えているが逃げたりはしない。彼女はそれなりに執念深いようだし今日が駄目でもまた明日そのまた明日とやってくるだろう。それならば迎えうってやるまでだ。

「――ｓｉｎθ、ｃｏｓθ、ｔａｎθの値や三角比をしっかり押さえつつ――」

梨歩田から逃げるために昼の休み図書室を過ごせなくなるというのは馬鹿らしい。
図書室は学校の中で最も時間を潰すのに適した場所だ。馬鹿な学生が多い中無駄に思える程豊富な文書、そして図書室では静かにしな

ければならないという絶対的なルールを好む人々が集う場所であるという事もとても良い。ああ、それとこれはオマケみたいな理由だが私に勉強を見て貰いたい人間をあしらうのにも都合がいいという理由もついでにあるな。

「――絶対値に絶対関数、絶対係数に絶対零度――ありがとうございました！分からなかった部分が分かってスッキリしました！」

うるさい。

今読んでいる本（知名度零のミステリー小説）から目を離さずに私の口元に人差指を添えて「黙れ、静かにしろ」のポーズをする。

（うわぁその仕草すごい様になっていて美しいや）「あ、す、すみません。このメモ用紙に書いてくれた数学の解説が分かりやすくて、つい、これ大事にしますね。あの今度また別の教科も教えて頂たいんですが、いいですか？」

勝手にすればいい。また今度私に勉強を見て貰いに来るのも、これから今朝見かけて一目惚れした照橋さんを探しに行くのも全部お前の好きにすればいい。

そんな中、バンッ！と音を立てて勢いよくドアを開けた黄色の髪を主張の強いアクセサリーがついたゴムでツインテールにしたタレ目の女子が堂々と登場した。

「斉木栗子先パイって今いる!!??」

くっそうるせぇ。

〔次回に続く〕

第１６ｘ　かませ美少女ＶＳミステリアスΨ女その３

「斉木栗子先パイって今いる!!??」

うふふ、突然の美少女の登場にビックリさせちゃったカナ？図書室にいた辛気臭い顔した地味メン達が私を見て目を丸くさせちゃってるわ。

……っていうかこの学校の図書室って初めて来たけど結構広いし人もそれなりにいるのね。ま、図書室なんていう根暗の集る場所なんて知らなくて当然なんですけどネ。

「斉木ならここにいるよ」（うるせーししかもタメ口かよ…可愛いから許すけどブスならガン無視きめてたわマジで）

「わぁありがとうございますぅ先パイ☆」

「お、おう」（付き合いたい）

情報に間違いなかったようね。さーてどこにいやがるのかしらねーあのクズ女はー。

クズ女がここにいるって教えてくれた顎のすごい図書委員から顔を反らして部屋の中を見渡してあのクズ女を探――

「ってうおわあぁ!!」

振り向いてすぐ目の前!?いつの間にっていうか足音とかしなかったけど!?

私が後ろに倒れそうなくらい動揺してるってのに、目の前のクズ女はそんな可哀想な美少女に対してなんの感情もないような顔して見下ろしてるくるなんて！この美少女に向かってなんて態度なの!?

「ちょっとなん――」

ちょっとなんなんですか！そう言ってやりたかったのに、その途中で右手の平を私に見せつけて「待て」とジェスチャーで伝えてきたか

らつい言葉を呑み込んじゃったわ。
こっちはイライラしてるってのになんなの!?しかもなんでジェスチャー?口で言いなさいよ!!
イラついた感情を無理やり押さえ込んでいると、クズ女は私の気持ちなどお構いなしにゆっくりとした動作で手の平を見せていたその右手を今度は壁に向けて伸ばし何処かを指差したわ。ほんとなんなのこの女、なんて思いながら渋々それを目で追うと壁に画鋲で止められた一枚の紙……っあ、あーそっかそうゆーこと。
「あ、すみませーん、うるさかったですよね……」
その紙は〝図書室内では静かに〟って一番上に書いてある図書室を利用するためのルール、いやそんな小学生でも常識的なの当然知ってますし!うっかりしてただけ!人間ならよくある事ですから!
表情変わんないから分かんないけど怒らせたら今から話し合いするのにやりずらくなりますからネ、一応形だけでも謝っておきマスか。
……あーでも形だけって言ってもクズ女に謝罪とかホントは嫌だなー。だってこの図書室にいるのクズ女以外全員男子だしこの美少女の私がちょーっと騒ぐくらい大目に見てくれてるに決まってるのに、なのにあのクズ女!さもここにいる全員を代表して注意してるみたいでちょームカつくんですけど。
この私の謝罪に対してノーコメントノーリアクションで私の横を通りすぎるクズ女。もうホントなんなの!
振り返ると私を待つように出口前に立って、目が合うと手で「おいでおいで」してからそのまま出口から出て行く、って、だ・か・ら、口で言えやこのクズ女が!

Ψ　Ψ　Ψ

いい加減私の事クズ女って呼ぶのやめてくれない?
私にとってのクズは高橋(クズ)を指す言葉なんだ。高橋(クズ)野郎と同等な感じがして非常に気分を害するんだが。
それにしても随分嫌われたものだな。ヘイトを買っているとはい

え私の一挙手一投足に文句を言われるとは流石に思いもしなかった。
さっきだって呼ばれたから彼女の近くまで行っただけだし、図書室にいたやつらが満場一致で思った事を私が代弁して注意してやっただけだ。
それから話があるなら場所を変えようと先に出口に向かったが、梨歩田が振り向きこっちを見た時の顔は普段のタレ目が更にタレて軽くピクピク動き口元はなんとか笑っているがひくついていた。ここまで感情を抑えられないなら清純美少女路線は無理があるように思えてならないな。
さて、図書室から少し先の人通りの少ない廊下まで歩いてきたわけだが。ここまで来るのに三十秒もかからなかったがその間にも私に対するアンチコメントが止まらなかった。こんなんでまともに話し合いが出来るのだろうか。
私は足を止め後ろについて来ている梨歩田へと振り変える。一瞬ドスの効いた目であからさまに睨んでいるように見えたがすぐに笑顔を見せる。誤魔化したつもりか？
何を話し出すのだろうか。まぁ大体予想はつくが。

☆　☆　☆

うおぉう、びびったぁ～。クズ女を急に振り向くから憎しみ込めて睨んでたのバレた!?……大丈夫、うんなんか大丈夫そうだし、いっか。
……やっぱり事前情報として知ってたとはいえまあまあの美人ね、大人っぽさだけなら照橋先パイよりも……って違う！なんでこんなクズ女を誉めてんのよ！フ、フン！トータルで見れば私の方が美人なんだから！

「突然呼び出したりしてすみません。私、梨歩田依舞っていいます。それであの、斉木先パイに聞きたい事があってですね」
よーし、かましてやるわ！そのムカつく仏頂面歪ましてやるわ！
「ぶっちゃけ照橋先パイの事どう思ってます？」
はっ、わざわざ人のいない場所を選んだのは間違いだったようねク

ズ女！ここなら気兼ねなく話せるわ。
「照橋先パイって本当に美人ですよねーそれに性格もいいし、先パイもそう思いますよね？そんな照橋先パイを世の男性が放っておくわけない、実際いつも学校で照橋先パイの周りには男子がいっぱいですよね」
　そしてその中にあのクズ雄もいると思うとほんと腹立たしいわ。
「そんな中で、もし、これはもしもの話ですよ？性格の悪いア××クソビ××が照橋先パイを利用するために接近したりしたら先パイはどう思いますか？」
　どう思うのかしらねぇ？クズ女、あんたの事だからね？
　少しでも見に覚えがあれば顔に出るはず、それは確かな証拠よね、あんたがクズ雄と同類のクズだって事のね！さぁ正体を見せなさい!!
「もしそのビチクソクズビ××が人類史上最も美しいと名高い照橋先パイをだしにあれやこれやして万が一にも照橋先パイが不幸になるような事があったら、
　先パイはどう思うか知りませんが、私は許せません」
　私をあまく見ない事ね。だって私は美少女、涙ながらに男の人を頼ればあんたなんかただじゃすまないんだから！

Ψ　Ψ　Ψ

　今の現状を説明しようか。表情だけ笑顔の後輩がワンインチ距離で凄んでいる。ここみんず（照橋心美ファンクラブの俗称）に目をつられている彼もこんな気持ちなのかもしれない。といってもチワワに吠えられてるのと大差ないがな。
（リアクションゼロ!?何の反応もないだなんて……何こいつ兄妹そろって表情筋死んでるんじゃないの!?）
　それにしても予想していたにしろ散々に言ってくれたな。だが概ね作戦通りに進んでいる。
　梨歩田がキャンキャンと一方的に吠えたところで私にダメージはない。

（うーんクズ女は照橋先パイにどうこうするつもりはない……いやいやいやそんなはずはないわ！今は諦めて別の作戦を考えなきゃね）
いつでも何度でも来るがいい、私にはダメージが通る事はないだろうがな。
今日まで数日間に渡って梨歩田依夢という人間を観察してきて分かったが、彼女の感情に任せた計画性の薄い行動が上手い事運んだ試しがないように思える。
そこで待つ事にした。時間が経ち次第にどうでもよくなる自己鎮火。もしくは無理な行動をした結果の自滅。それを待つ。
ああ、それに誰かに助けを求めようとしても無意味だ。テレパシーによって梨歩田が行動を開始するその前に助けを求める相手に〝虫の知らせ〟をして手を打てばいいだけだからな。助けを求めた後でも対処方は今思い付く限りで二十はある。ゆえに私としては助けを呼ぶのはおすすめ出来ない、リアルに「だが誰も助けに現れなかった」を身をもって味わう羽目になるぞ。
基本的には私は余計な行動をする必要はない。精々お前の望む展開に持ち込めるように無駄な努力を続けるがいい。
（……でも確かな成果はあったわ）
……何？
（あれだけ言ったのに照橋先パイを心配する素振りも見せない所を見せないあたりクズ女の友情なんてその程度の薄情な人間だって事ははっきりしたわ。十分な収穫ね）
……ふん。

「言いたい事はこれで全部です。無理に答えをもらう気はありません。それでは失礼しま――」
「私から一言だけ」
「え、何、ですか？」（喋ったあああぁぁぁ!!え？斉木兄妹は終止無言を貫くって聞いたけど、ガセなの!?）
斉木が喋ったらいけないというタブーは解かれたんだ、知らなかっ

たのか？
私は梨歩田の目を真っ直ぐ見る。
「私も友達……を含めた知り合いが傷付き悲しむ姿は見たくない。それだけだ、もう行っていいぞ」
勘違いするなよ、私に友達なんてものはいない。友達零人を含めた知り合いがというのが正解だ。
正直完全に余計な一言だったと認めざるを得ない。何も言わずやり過ごすはずが梨歩田ごときに薄情だなんだと色々言われた挙げ句にあんな発言をしてしまった。感情に任せた行動は駄目だと自分で言っておきながらこのざまだ。自制心が足りないと痛感する。
数秒間の静寂。さてどうしたものか。
〔〝最後の時は〟ときとして何の前触れもなく――〕
!?。またあの謎の声か！こんな時に……。
〔いつもの日常に突然訪れる――〕
「先パイ私からも一言言わせてください――」
くそっ、謎の声は何が言いたいんだ。梨歩田のやつも何か言いかけているが謎の声が何か言いかけてるから黙って欲しい。
〔全ての生物に〝寿命〟があり――〕
「普通に話せるなら最初からそうしなさいよ！」
ピシッ
何!?私のメガネが――
カララン…

〔それは生物に限らず〝物〟にだってある〕
「このク……」

まずい！五秒時戻し！

ドーーーーｚ――――ン

突然の出来事の連続で申し訳ない。だが今の出来事について説明の時間を設けさせて頂きたい。

まず始めに話さなければならないのは私の「目」についてだ。裸眼で見たものを石にする「石化」の能力……は残念ながら双子の兄の斉木楠雄、彼の超能力だ。私の目の超能力は彼よりもっと酷い。

私の裸眼を見た〝生物〟は私を魅力的に見える暗示にかかってしまう。能力名をつけるならば「魅了」だろうか。

なんたるクソ能力。これを欲しがる人間もいるだろうが私には全く不要だ。利用する気にもならない捨てたい超能力Ｎｏ．１。

普段地味な女がメガネを外したら美人になるなどといった乙女向け漫画でありがちな設定をこの私が体現する羽目になるとはな。全くもって嬉しくない。

実はこの「魅了」という能力のクソさ加減はこれで収まらないのだが今は置いておく。

さて、次の説明に入ろうか。

いままでの話を読んでくれた読者ならこう考えるんじゃないだろうか「何かやらかしても時戻しがあるじゃん」、と。

私の超能力「時戻し」正確には「合計一分限定時戻し」はその名の通り一日に合計で一分まで時を戻す事の出来る超能力。破いた紙だろうと誤って起爆してしまった爆破装置だろうとうっかり石化させてしまった人間だろうと一分以内であればやり直しがきく能力。

一分というかなり短い制限があるかわりに、私を除く人類を含めた

全生物は時間を戻した際の記憶を覚えていないというメリットがあり、付け加えて指定した人物の記憶を残す事も可能だ。
これだけ聞けばかなり便利で有用な超能力だろう。実際私もこの能力は重宝している。だが後になって些細だが重大な欠陥が判明した。
時戻しによって消えた記憶は微かにだが残る。
ただその残った記憶は本当に微かで、どれほどインパクトの大きい記憶であったとしても時戻し後は大抵の場合誰も気に止めない。
さて、また長い事説明をしてしまったわけだがこれらの説明から私が何を伝えたいのか勘のいい読者はもう察しがついているかもしれない。

「先パイ私からも一言だけ言わせてください――
大好き!!」

時間を戻すのが遅すぎた。謎の声が伝えたかった内容を察してメガネが壊れる前に時を戻せればこんな結果にはならなかった。

☆　☆　☆

あんなに大嫌いだったのにあんなにクズな女だと思ってたのに、クズ女、ううん、栗子先パイは私なんかじゃ到底敵わないカッコいい人だった！
どうして早く気が付かなかったの!?いいえ栗子先パイという人をよく知りもしなかったんだから当然なのかも。
普段は寡黙で何を考えているか分からないミステリアスな人。でも私に語りかけたあの言葉。
『私も友達……を含めた知り合いが傷付き悲しむ姿は見たくない』
「友達」、これは照橋先パイを指しているのは誰にでも分かるわ。それだけでも栗子先パイが友達想いな人だって判明しましたが、それだけに収まらず「知り合い」も付け加えてくれている。これ、間違いなく

私を指してますよね!?こんな敵対心バリバリだった私にまで気にかけてくれるなんて、なんて器の大きい人なの!!
そう思うと無表情なお顔もすごく凛々しく見えてくるわ。あ、ヤバい顔が熱くなってきちゃった。ほんとにヤバいこのままじゃ恋しちゃうかも、こんなカッコいい人なら騙されてあれかこれやされても、ってヤバいそれはほんとにヤバいって!私には照橋先パイという人が、っていやいやいやだからまずいって!このままじゃこのままじゃ!違う世界にいっちゃうぅぅ~!!

Ψ　Ψ　Ψ

やめろ、いくな、帰って来い。
わりと本気でヤバいスイッチを押してしまった気がしてならない、どうしよう、いや、どうしようもない。
何故時を戻し後でも「魅了」の効果が消えないのか……それについてはすでに判明している。はぁ、これこそが最大のクソポイントだ。「魅了」が私を魅力的に見せる超能力、それは説明した通りだが問題はその効果の出方にある。私の目を見て「魅了」された人間（生物）は一気に私を好きになるのではなく一定まで〝増幅〟されるのだ。それの何が問題なのかと聞くのは察しが悪いとしか言いようがないぞ。何故わざわざ「時戻し」の性質を説明したと思っている。
そうだ、時戻しでは記憶は微かに残る。ゆえに私の目を見た記憶も微かに残り、その微かな記憶から「魅了」は増幅されてしまう。……これもう呪いじゃないか。

（あーもう好き!カッコ良くて頼りがいのある先パイ。私も勉強見てもらいたい!。あーでも頼るばっかじゃなくて頼られもしたいデスね……そうだ!栗子先パイにぴったりな男性を紹介すればいいんだ!）

ありがたさを微塵も感じない迷惑な事考えてないでいい加減離れろ。梨歩田が「大好き」と言ったあたりからずっと抱き締められてい

る状態だ。片手は壊れる予定のメガネを抑えているため自由なのはもう片腕しかない。無理矢理片手で引き剥がしてもいいが怪我させるわけにもいかないし……くそっ！

「そろそろ離してくれないか」

「ハッ！あ、すみません」パッ（なんでメガネ抑えっぱなしなんだろ？でもそんな姿も美しくしいわ）

散々な日だ。また厄介なやつが増えるわ日に何度も口を開けて発言をするわで本当に散々だ。

いやもう開き直ろう。ここまでひどい目に遭ったんだ。これ以上に悪い事なんて起こらないはずだ。起こってたまるか。

（偶然ここを通ったが……斉木栗子、あいつあんなに美人だったか？）

おい、嘘だろ。

第―ｘ　プロフィール　斉木栗子　改定第一版

ＰＲＯＦＩＬＥ　ＤＥＴＡ：Ｘ
斉木栗子（さいきくりこ）

身長：１６７ｃｍ（可変済み：理由，斉木楠雄に見下されたくないから）
体重：４２ｋｇ（可変済み：理由，特に深い理由なし）
誕生日：８月１６日
血液型：不明
好きな食べ物：コーヒーゼリー、スイーツ、コーヒー

◎外見
髪：ピンク色のショートヘアー
頭：制御装置付き
目元：レンズが緑色の安物めがね。鋭い眼光
顔：※クール系の美人。一部の人間が惚れるレベルの美少女
・※ただしその一部の人間は照橋心美にほとんどの場合鞍替えします。
胸：Ｂ寄りのＣカップ（可変不能）
・※真にエロい人間のみがＣカップと見破る事が出来るようです。
体型：モデルのような痩せ型
○外見は女体化状態の斉木楠雄と見分けがつきません。〈女体化状態の斉木楠雄の方が胸のサイズは上です〉

◎備考
・超能力者
・〈基本世界（原作）では斉木楠雄の女体化、斉木楠子（偽名：斉木栗子）として登場〉
・〈この平行世界（小説もどき）の〉斉木栗子は斉木楠雄の双子の妹

・あらすじで斉木楠雄と仲が悪いとあるが実はそれほど悪くない。だが栗子本人に「お兄さんと仲がいいの？」と聞かれると１００％首を横に振る。
・生後1日までは男。以後トランスフォーメーション（変身能力）で女として現在まで生きている（裏話：両親共に女の子も一人欲しかったとテレパシーで分かったから自分が女になった）。今では完全に女になったと立証済み。
・※父、斉木國春は調子にのって斉木栗子に対し「オカマ」と発言した後に一遍地獄を見ました。
・元が男だからか、男口調。だが第一人称だけは「私」
・ファッションに興味なし。男物の服でも平気で着る。
・※動きやすい軽装が好き。
・斉木楠雄と比べると頭が悪い
・※普通に頭はいい方。学年順位一位。
・わりと短気な性格をしているので実は斉木楠雄と比べて危険性が高い。冷めやすいので正気になると時戻しで無かった事にする事が多い。
・動物も嫌いではない
・巨乳に憧れのような感情を持つが、自身では否定している。
・〈斉木楠雄と同じ性格、同じ力を持つが、「全く一緒だとつまらない」という投稿者の意図で色々と変えたり足したり無くしたりした結果、ほとんど別人になりつつある。〉
・※斉木楠雄の心の声が聞こえない〈斉木楠雄は斉木栗子の心の声が聞こえる〉
・※一卵性の双子か二卵性の双子かについては機械の謎の不調により不明
・※平穏と自由をなによりも望んでいます。〈平穏を望んでいるのは斉木楠雄と同様ですが、斉木楠雄は超能力を邪魔なものと考え、常人のような普通の生活を平穏と考えるのに対し〉斉木栗子は超能力を使ってでも平穏に生活したいと考えています。
・※斉木栗子をポケ〇ンで言うなら、エスパー・あくタイプでしょ

うか。むしタイプの攻撃は無条件で十二倍ダメージで気絶します。

◎※過去の簡単な遍歴

零歳。双子の弟として誕生。生後一日で妹になる。

零歳〜四歳。双子の兄斉木楠雄と仲が良く（超能力を使って）よく遊んでいた。

四歳。斉木楠雄とのプリンを巡ってケンカをして引き分ける〈負けたとは思っていません〉。その結果ある無人島を地図上から消えます。

このケンカ以降十五歳まで斉木楠雄との会話をしていません〈テレパシーで会話が出来ない状態でしたがそもそも話しかけようともしなかった斉木栗子には知るよしもありません〉。

このケンカで超能力が嫌になります。

四歳〜十一歳。斉木楠雄に勝ちたい兄の斉木空助に超能力の研究を協力します。この間斉木空助に協力する以外の超能力の使用は積極的ではありませんでした。

十一歳。目を覚ますと体に爆弾をくくりつけられているという事件発生、犯人は斉木空助。徐々にアップする指定される速度より速く走らないと爆発すると説明を受け十時間に渡って世界中を走り回る。

斉木空助に殺意が湧く。

十五歳。斉木楠雄に自分のコーヒーゼリーを食べられる事件発生。〈四歳から続く不和に決着をつけるために〉斉木楠雄は頭を下げて謝罪、これを見て斉木楠雄の見方が変わり一応の仲直りをする。

それでも斉木楠雄を警戒心は残り、それを打ち消すためにお互い危害を加える事を禁ずる契約を持ちかけ〈斉木楠雄も斉木栗子の警戒心を払拭（ふっしょく）する目的で〉斉木楠雄はそれを受け入れる。

十六歳。特に何もない素晴らしい高校一年だった。

◎※特筆すべき超能力

○時戻し

・正確には「合計一分限定時戻し」です。
・その名の通り時間を戻す超能力です。時間を戻す時間は一日の合計で一分（六十秒）までです。
・使用した斉木栗子以外の全生物は消えた時間を認識出来ず記憶にも残りません。斉木栗子が指定した人物（生物）の記憶を残す事も可能です。
・時を戻した時間の記憶はほとんど消えますが微かに残ります。が、それを気にする者はいません。
・この超能力は「ジョジョの奇妙な冒険第七部スティール・ボール・ラン」のスタンド能力、「マンダム」を参考にしています。

○創造
・何もない空間から物体を作り出す超能力です。
・現在作り出せるのは四つの刃に真ん中が丸く穴の空いた手裏剣と制御装置を外した時のみ作り出せる知恵の輪の二つだけです。
・手裏剣は一つだけしか作り出せません。
・知恵の輪は無限に作り出せます。
・時はウシミツアワー、一人の非ニンジャの女超能力者が突如手元にスリケン創造しそれを投擲！さきほどまで口許をいやらしくニヤつかせた敵ニンジャは驚愕するものの一瞬の状況判断により回避を選択。敵ニンジャのニンジャ動体視力は通常ではありえぬほどの異常な回転数を見せるスリケンをしっかり視認していたのだ。もしセオリー通り指二本でスリケンをキャッチし投げ返すといった行動を取っていればその二本指がケジメされるどころかズタズタに引き裂かれネギトロめいた惨状となっていたであろう。敵ニンジャは体を後方に倒しブリッジで回避を「グワー！」出来なかった!?敵ニンジャがブリッジ回避をし体の上空を通り過ぎるはずのスリケンは突如として急降下、敵ニンジャの心臓を破壊！一体何故急にこんな軌道を見せたのか？超能力の一つ、念動力がその答えだ。非ニンジャの女超能力者はテレパシーによって敵ニンジャの思考が手に取るように完全掌握しているため敵ニンジャがブリッジ回避を取ると確信し念動力

によって凄まじい回転数と速度をそのままに心臓を貫いて見せたのだ。ワザマエ！「グワー！」心臓を貫いたスリケンは体内に留まり間髪入れずその他の臓器をも破壊！「サヨナラ！」これにはニンジャ耐久力を持ってしても耐えられず爆発四散。非ニンジャの女超能力者、クリコは事の始まりから最後まで顔色を変えず既にいない相手にテレパシーを送る［私にかかればニンジャを破壊するなんてのは造作もな――］――――ここで目を覚ました斉木栗子はスリケンを使わない事を強く心に決めました。

○硬化

・対象の硬度を上げる超能力です。

・硬度を上げればただの服も鎧になり、トイレットペーパーでこよりを作れば壁に穴を開ける事も可能です。

○時間加速（ヘイスト）

・対象の時間を加速する超能力です。

・対象に触れ続ける事で超能力を発動出来ます。物体に流れる時間を加速させる事が出来ます。

・この超能力に制限はなく最低で一・一倍速から十倍速、百倍速、千倍速～といくらでも時間を進められます。

・この超能力を使っても速く動く事は出来ません。あくまで対象の経過時間を早くするだけです。

・この超能力を生物に使用するのは推奨されません。例えば千倍速で植物に時間加速したとします。植物は花を咲かせるどころか直ぐ様枯れてしまう事でしょう。流れた時間は必要とするエネルギー消費も加速させてしまうからです。この事から時間加速を動物に使用するのは更に推奨されません。少し加減を間違うだけで対象を骨と皮だけにしてしまう恐れがあります。

・ヘイストはファイナルファンタジーから勝手に名前を借りました。

○魅了（チャーム）

・斉木栗子の裸眼を見た生物（人物）は斉木栗子をとても魅力的に見せる暗示をかける超能力です。

・この超能力は遮るもの（メガネなど）があれば効果を発揮しません。

・魅了された生物は一定までその効果が増加されます。一定とはその対象が思う魅力的な異性（もしくは同性）の十倍の魅力です。

・魅了された生物は時戻しによる記憶の消滅では効果が薄く魅了を解くのは不可能です。

・この能力は視覚を有する全ての生物が対象であり、人以外の動物や魚や鳥類、虫もその対象になりえます。

・魅了の効果が切れ始めるのは恐らく魅了されてから約一年後だと思われますが確証はありません。

・斉木栗子はこの超能力を利用する気はありません。

○位置交換

・センスのないネーミング

・超能力者が二人（斉木楠雄もしくは斉木栗子、又はその分身）いる前提の能力で、寸分の誤差なくお互いの位置を交換する超能力です。

・瞬間移動とアポートの併せ技による能力で、基本的にはアポートなので瞬間移動使用によるインターバルは必要とせず、そして手に何か持っていてもは一緒に移動は出来ません。

・使いどころはほぼほぼないと言えます。

○分身能力（バイロケーション）

・自分の分身を造り出す超能力です。

・分身は造り出した人物と同様に超能力を使用出来ます。

・〈斉木楠雄がこの超能力を使用するには制御装置を外す必要があり、造り出した分身は毎回性格と外見が少し違います。更に分身が必要な場合は造り出した分身が分身能力を使う必要があります〉

・分身を造り出すには制御装置を外す必要があり、造り出した分身は性格と顔のパーツが少し違います。
・造り出した分身は消す事は出来ません。造り出した分身はエネルギーとして吸収する事が可能です。分身が分身を吸収する事も可能ですが分身が斉木栗子（本人）を吸収する事は出来ません。
・吸収した後も分身は意思を保ち続きます。分身は斉木栗子の五感を借りる事が出来ます。この時斉木栗子（本人）の心の声を聞くことも出来ます。
・分身を出した時の髪の長さは一定です。切っても吸収してまた出たら切る前の長さに戻ります。
・一度造り出した分身を出す際に制御装置を外す必要はありません。また、分身として外で活動中は斉木栗子（本人）の心の声を聞く事は出来なくなります。
・分身は平穏に行動するのであれば自由を認められています。どこか自分の行きたい場所ややりたい事があるのなら斉木栗子（本人）から許可を得て、場合によっては催眠能力で顔を変えてから外出可能です。
・分身は性格がそれぞれ違うものの、斉木栗子（本人）の中ですごすのは［実家のような安心感］、［個室で自分の時間を楽しんでいる時のような穏やかさ］、［母親の胸の中で寝ているような抱擁感］、［住みよい］など一貫して悪い意見はないようです。
・斉木栗子（本人）によると分身は［全て私だ］だそうです。
◎分身能力（バイロケーション）によって造り出した分身の詳細

○栗子B
身長、体重、血液型：栗子（本人）と一緒
好きな食べ物：りんご、その次にスイーツ、ブラックコーヒー
髪：ピンク色のショートヘアー、髪の後ろをゴムでとめている
目元：栗子（本人）と同じめがね、暖かい目つき
※もう一つの名前：凛子（栗子Cが状況的に偽名を言った時に［そんじゃ、わも（わたし）］とばかりに名前を考えてみた。りんごとかかってい

る）

特徴

・栗子（本人）の命令には絶対遵守します。

・何故か津軽弁を使います。（がっつり津軽弁ではない）

・どことなく田舎っぽい雰囲気です。

・斉木楠雄に対する警戒心は零ですが、周りにいる人に対する羞恥心も零（裸で外を歩けるレベル）です。

※

・一言で言えば善意の人です。

・楽天的で掴みどころのない人物で、人助けが栗子（本人）の命令の次に優先し、頼まれた事は喜んでやるような人です。そんな栗子Ｂは人に安心感を与えます。

・ですがその善意はかなり独善的で栗子Ｂの善意の行動によって周りが迷惑するのはよくあります。

・栗子Ｂの善意の作戦が失敗すると思い通りにならなかった事に凹みますがその楽天さからすぐに復活します。善意の作戦が思い通りになるとその作戦の被害に目を向ける事なく満足感に包まれます。

・〈イメージは「よく分かんない姉」です〉

・斉木楠雄にかなりの信頼を寄せているようです。

○栗子Ｃ

身長、体重、血液型：栗子（本人）と一緒

好きな食べ物：スイーツ、紅茶、苦くないコーヒー

髪：ピンク色のセミロングヘアー

目元：レンズが緑色の高そうなめがね、ぱっちりとした目

※もう一つの名前：櫛子（くしこ）（適当に思いつきで言った名前だけど後になって気に入りだした。くＣ（しー）子）

特徴

・栗子（本人）の命令を基本的に聞きますが、恥ずかしいと思った内容は嫌がります。

・丁寧語の女の子口調です
・どことなくお嬢様っぽい雰囲気です
・斉木楠雄に対する警戒心がｍａｘです。
※
・普通の女の子の感性を持った人です。
・同じくらいの年の女の子とお喋りするのが好きです。その他にも（恋愛以外の）普通の女の子が好みそうなものに興味をひかれます。
・おっちょこちょいで凡ミスをたまにしますが、その純粋でがんばり屋な性格から人に悪い印象を与えません。
・人（動物）を透視するのがとにかく嫌い、目をそらすのに必死です。人を透視し続けていると吐き気を催してしまいます。
・栗子（本人）を尊敬しています。［あの自信に満ち溢れた堂々とした姿には痺れる憧れるーって感じですね］とのこと。栗子（本人）に頼りにされたいという願望を持っていて栗子（本人）から頼み事をされると大変喜び、その頼み事を完遂出来なかったりしたら病的なまでに悲哀に満ちます。
・斉木楠雄以外には恐怖心が湧かず、どんな危険生物にも平常心を保ちます。それは虫とて例外ではないようで家に斉木栗子しかいない日にＧ（その虫の名称を明記するのを避けさせて頂きます）と遭遇し斉木栗子が当然のごとく気絶した後、自分の意思で外に出てティッシュを数枚サイコキネシスで浮かせ、ティッシュでＧをキャッチしたのち窓から外へと放出しました。この出来事を後から聞いた斉木栗子は感動し、栗子Ｃに「対虫専属サイドキック」の役割を与えられましたが栗子Ｃは特に喜んでいる様子はありませんでした。

○栗子Ｄ
本編未登場のため、詳細を秘匿させて頂きます。

○栗子Ｅ
本編未登場のため、詳細を秘匿させて頂きます。

○栗子F
プロフィールデータの作製が趣味です。以上です。

○栗子G
栗子Gを名乗りたい分身がいないため空白です。

以下、栗子H～は栗子D、栗子Eと同様に詳細を秘匿させて頂きます。

以上が斉木栗子のプロフィールです。今後の展開や投稿者の思い付きで内容が増えたりする可能性あります。

〈〈〉付けされた個所は斉木栗子とその分身が知り得ない情報です〉

第１７ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　前編

僕の名前は斉木楠雄、超能力者だ。
ちゃんとした自己紹介は久々だな。

現在の時刻は七時を過ぎ、日が完全に落ちはしたものの、少しの明るさが残る夜空に、一般的な家庭では家族が食卓に集まり夕ごはんを食べ始める、そんな時間帯。今は僕たちの家族もそんな一般的な家族の例に漏れず夕ごはん中である。
ただ、今日はいつもと少し様子が違う。それも良くない方でだ。
いつもなら、

『どう？あなた。今日はいつもより愛情を込めてご飯を作ったの。おいしい？』
『ああ！もちろんだよ、ママ！。あぁ僕はこの世で一番の幸せ者だなぁ』
『あなた、今の発言は聞き捨てならないわ。この世で一番幸せなのは私よ！だって愛する夫が幸せそうなだと私はもっと幸せなんですもの♥』
『愛する妻がこんなにも嬉しい事を言ってくれるなんて……僕ぁ感動の涙が出てきたよ！』
『泣かないでパパ、泣いたら私まで涙が……』

と昨日のようにまるで新婚みたいにベタベタと愛を語る結婚十数年目の両親だが（余談だが昨日は最終的に抱き合いながら二人して号泣、落ち着いた頃には料理が冷めているといった家ではよくある展開に落ち着いた）、今日はそんな甘ったるいムードはない。かといって夫婦喧嘩中というわけでもない。

「よがっだ、本当(ぼんどう)によがっだよー！僕のお金、いや日頃の靴舐めの結晶が帰って来てさーっ！」

何故汚く言い直した。

昨日とは違う理由で号泣する父。確かに目障りではあるがこれが原因というわけではない。

「ごめんなさい、本当に駄目な、母親で」

謎の五、七、五。どうやら狙って言った訳ではないようだ。

かたや歓喜全開ではしゃぎ、かたや申し訳なさそうに俯いている。どちらも相手にしたら疲れるといった点は共通している。

元々両親は喜怒哀楽のハッキリとした性格でこれくらいの盛り上がり盛り下がりも日常茶飯事ではあるものの、似たもの夫婦の両親は笑う時も怒る時も二人一緒というパターンが常であるため、今の現状は少し様子が違うのである。……いや、そうでもないか。割と日常的な光景なような気もする。

ただ、僕の双子の妹、栗子は僕の隣で我関せずと言わんばかりに夕ごはんを口に運ぶ。その姿だけは昨日も今日も変わりがない。

そもそも何があったのか、簡単に語っておこう。今回やらかしたのは母である。

母（三十七歳）はとにかく純粋で、疑う事を知らない少女のような性格をしている。後ついでに見た目も少女のように若い。肌年齢は実年齢より若く、精神年齢は肌年齢よりも若い、というより幼い。

そんな母はとにかく騙されやすい。疑う事を知らないというレベルではない、「疑う」という単語すら知らないのではないかと疑ってしまうほどだ。

そんな母が訪問販売、それも質の悪いのに当たってしまったらどうなるか。それはもう買う。買ってしまう。

どんな胡散臭い代物だろうと全て訪問販売員に丸め込まれて財布

の中を空にするだけでは止まらず銀行に走るほどに買わされてしまう。というより買わされてしまった、というべきか。
その後、僕と栗子、それと父が帰宅してまず目に入ったのは満足そうな母と玄関周りに山のようにつまさった戦利品ならぬ戦〝害〟品。
僕達の様子を見てやっと〝やってしまった〟事に気が付いた母はぽつりと被害額を口にすると父はどさりと膝から崩れ落ちた。
そんな悲壮感に包まれた両親を放っておくわけにもいかないので僕の超能力、アポート（対象と同価値の遠くにある物をテレポートで交換する超能力）で戦害品と現金を交換、つまりクーリングオフした。多少強引な気もするが我が家（パーク）の危機なのだ、致し方ない。
全ての戦害品をクーリングオフ……出来ていれば良かったのだが、母は僕達が帰るまでの時間に晩ごはんの用意を済ませた後のようで、その時に「全自動卵割り機」なる○平が嬉々として買ってきそうな商品を箱から開けて使用してしまったため、これだけはクーリングオフ出来なかったが……それ以外の全ての戦害品に支払ったお金が帰って来て父はウザいくらいに大喜び、とこういった経緯で今に至る。
……そういえばその時栗子は何をしていただろうか……まあ、いいか。

軽く話すつもりがつい長く話し込んでしてまったな。
だがその間に落ち込む母に父が「家族を想っての行動なんでしょ？その気持ちが嬉しいよ、ママ」と、ドヤ顔きめながら金が戻って来たからこそ平静を持って言えるセリフを吐いたお陰かいつものラブラブ夫婦モードに戻っていた。これはこれでウザったい。

「やっぱり私が頑張って訪問販売の人を追い返せるようにならないと駄目よね……」
「一人で頑張ろうとしないでよ。僕がいるじゃないか！一緒にセールスなんか追っ払おう！」
「パパ♥」
「ママ♥」

［いい感じのところ悪いがそれじゃ駄目だ］
「どうして〈だよ！楠雄／なの？くーちゃん〉」
［とてもお似合いで素敵な夫婦ですね、なんておだてられても平気なら……ほら見ろ］

夫婦そろって照れ笑いを浮かべる姿には呆れるしかない。
が、母さんの初めの意見には同意する。母さん本人が買わない意思を見せるのが一番だ。

「じゃ、じゃあこういうのは？楠雄か栗子が全部ブッ潰してくればいいんだよ！セールスに来る会社を片っぱしから！」

父の考えなしな発言には呆れてしまうな。やれやれ、短期間でどれだけ呆れさせてくれるのやら。

［やれや――］
［それだ。ふむ、いいアイデアだな、流石はこの私の父。靴を舐めるしか能のない駄目中年だと思っていたが……見直した、誉めてやる］
［なっ!?］
これには呆れを通り越してただただ驚愕するしかない。
「えーこれ僕喜べばいいの？悲しめばいいの？それとも親に対してすごい上からの発言に怒ればいいの？ものすっごい複雑！」

この際いいアイデアと言われて最初は喜び、すぐに辛辣な言葉が襲いかかり微妙な顔をする父は放置するとしよう。
それよりも今まで黙ってご飯を食っていた栗子の唐突な発言に待ったをかけなければ。

［お前気は確かか？いいかよく聞け、こういったセールスは他会社と提携し情報を共有しているものなんだ。母さんが今日だけであれだけの商品を買ってしまったのも複数人の、それもそれぞれ違う会社

の人間が来たからだろう。おそらく母さんがいいカモだってのはもはやその手の業界じゃ共通の認識なんだろう」
「うっ、ごめんなさい。今日だけじゃなくて前々から訪問販売の人からよく商品を買ってたの……」（私ってば本当に、馬鹿……）
「えー！そうだったのかい!?」（おいおいそうなると被害金額は百万どころじゃないんじゃないってことに……我が家は既に終わっていた？）

夫婦そろって頭を項垂れて意気消沈な様子を見せる。悪い事を言ってしまったな。
だが、そもそも過去に母さんがセールスで買った商品はその都度僕が独自にクーリングオフをして戻って来たお金を母さんの財布に入れて戻しておいたのだ。
なので父が心配しているそれは全く問題がないのだが、それを説明するのは後にしよう。

［今や我が家を標的とする会社は十や二十じゃ利かないだろうし、その中には普通の会社や有名大手も含まれている。それらを全部潰していったらどうなる？日本経済が一気に傾くぞ］

そ、それはまずいな…と立案した帳本人が呟く。会社勤めの中年には色々と思うところがあるのだろう。

［もっと簡単にこの問題を解決するいい案がある。母さんが訪問販売員に対し「買わない意志」を見せつければいい。僕が少しだが手を貸そう。絶対に上手くいく］
「私一人じゃ不安だけど、くーちゃんが手伝ってくれるならきっとなんとかなるわよね！」
「ああ、大丈夫さ！楠雄がそう言うんだから問題ないさ。やっぱり持つべきは超能力者の息子だな～、うん」

これで両親の了承は取り付けた。残るは後一人。栗子は自分の案、いや正確には父の案に乗っかったわけだが、それを否定されたんだ。ここは慎重に行こう。

［そういう事だ。お前も分かってくれるな］

［……お前に任せれば解決するんだな？］

［ああ、そうだ。今回の件、僕に任せて欲しい。いいよな？］

［だが断る］

こいつ本気（マジ）か。

こればっかりは頭を額に手を当てて特大の溜息が出てしまっても許されるはずだ。

誰しもが何か言いたい中で誰よりも早く言葉を発する、いやテレパシーを送る栗子。まるで文句は言わせないと言わんばかりに視線を誰の顔にも合わせず虚空をぼんやり見つめていた。

［確かに楠雄に任せておけば丸く収まるんだろうさ。だがそれじゃ私は納得しない。それじゃ私の気が収まらない］

栗子の顔はいつもの無表情だ。が、何だろう、栗子の周りの空気が歪んでいるような……。

［おい、少し冷静になれ］

［冷静になれ？ああそうだな、私もこれは不味いと思い、感情を圧し殺していたんだが、もう抑えきれそうにない。だってそうだろう、うちの家族（もん）にどっかの馬鹿野郎が手を出して泣かせたんだ。……けじめをつけさせる。そうでもしなきゃ気が収まらない］

どこのヤクザだ。……と少しでもおちょくる発言をしようものなら火に油どころではない。ガソリンスタンドにもうスピードで横転したバイクを突っ込ませるより危険だ。

そんな栗子の文字通り爆発しかねない爆弾発言に母は――

「あひゅう～、くりちゃんが私のために怒ってくれてる～。家族想いな子に育って嬉しいわ～」

――呑気に涙を流して感動していた。　そんな母の姿に呆気に取られたのか空気の歪みが消え少し狼狽した様子を見せる栗子だが、それは一瞬の出来事でありすぐにまた空気を歪ませる。恐らく泣いている母を見て数分前の後悔の涙を流す母を思いだして怒りを再燃させたのだろう。

表情も態度も落ち着いた様子でゆっくりとした動作で食器を流しに運ぶ栗子だが、そんな様子とは正反対に空気の歪みは酷くなり更にはバチバチという静電気に似たをだす始末。誰の目からもヤバイと分かる（母以外は）その様相に父は母とは違った意味の涙が見え、少し震えている。

止めなければならない。だが止められるだろうか？

僕は最後の説得をするため流しに食器を置く栗子の背後から肩に手を置く。

［お前にだけは伝えておこう］

僕が何か言う前に栗子から話し掛けてきた。お前にだけ、と言うあたりこのテレパシーは母にも父にも聞こえていないんだろう。

僕が何だと返事をする前に言葉を続ける栗子。

［お前が商品をクーリングオフしている最中の話だ。私はその時に興味本意で黄金（ゴールデンウォーター）水なんて人を馬鹿にしたネーミングの水の入ったペットボトルをサイコメトリーを使い過去を見たんだ。その結果ペットボトルの中身がただの水道水だと分かったが、それ以上に私の逆鱗に触れたのはそれを売り捌いていたあのクソセールスマンだ。あいつは母さんを侮辱する発言を……思いだしたら感情が昂ってきた、もう我慢出来そうにない。……この話は母さんに絶対に言うなよ］

そう僕にテレパシーを送る栗子。そんな栗子の表情を肩に手を置いたまま横に周り込んで覗き見た。何故僕はそんな真似をしてし

まったのだろう。好奇心、だろうか……。
その時の栗子の表情はそれはまるで、
怒りに狂う般若。
あまりの恐……謎のエネルギーを感じ肩から手を離してしまった。
それと同時に一瞬にして姿が消える。瞬間移動か、まずいな。
やれやれ、最初から嫌な予感というか〝少し違う〟雰囲気を感じていたが、まさかこんな転回になるとは……。
僕は最初、〝少し違う〟理由は父と母のせいだと勘違いしていた。だがそれは違うと気が付くまで遅すぎた。
栗子の心の声が聞こえなかったのだ。
半径二百メートルの中にいる人間の心の声がうるさいほどに聞こえる中でたった一人の心の声が聞こえてこない。その〝少し違う〟違和感に気が付いてさえいれば……。
あの時栗子は、
――冷静になれ？そうだな、私もこれは不味いと思い、感情を圧し殺していたのだが――
と、こう言っていた。これは予想に過ぎないが栗子は強い怒りを覚えると無意識に心の声を隠す、のか？まだ確かな確証はないしまだ何かあるのかもしれない。
とにかく消えた栗子をすぐに追いかけなければ。今の栗子は何をしでかすか分からない。
栗子の心の声が聞こえなかった。何処に向かったのかは予想するしかない。……栗子が向かった先は黄金水を売っていた会社、集英健康食品だろう。勘でしかないが確信を持てる。
栗子が瞬間移動してから一、二秒経過したか、急ごう。僕は覚悟を抱いて瞬間移動をする。そう、栗子との契約、お互いに危害を加えない約束、それを最悪の場合は破ってでも栗子の暴走を止めなければならない。覚悟を出来ている……。

「だ、大丈夫かな？」
「心配いらないわ、あなた。だって私達の子供達ですもの」
「そ、そうだよ、ね。ああ！そうさ僕達の子だもんな！きっと大丈夫に違いないさ！」

〈数ヶ月後。集英健康食品本社跡地にローソ○が建った〉
〈後編に続く〉

第17ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　中編

〔前回のあらすじ　斉木栗子は怒り狂う般若〕

僕はぶちギレた栗子が向かうであろう場所付近のビルの屋上に瞬間移動した。

そこで見たもの、それは集英健康食品本社だと思われる残骸とそれを見下ろす栗子の背中だった。

遅かった……。めのまえがまっくらになっ――

僕はぶちギレた栗子が向かうであろう場所付近のビルの屋上に瞬間移動した。

そこで見たものは、集英健康食品本社と書かれた看板を掲げた小さめの建物とそれを見上げる栗子の背中だった。

キレた栗子は何をするか分からない。だがまだ大惨事になっていないようで一先ず胸を撫で下ろしたのだった。

……いや、おかしい、本当にそうだろうか？何かひっかかる、妙な違和感が拭えない。腑に落ちないのだ、あの見るもの全て食い？しそうな猛獣と化した栗子が本当に何もやらかさないなんてあり得るのだろうか……。

（三秒時戻し完了。ふぅ、スッとした。やはり腹に据えかねる怒りは何処かにぶつけるのが一番だな）

思った通り、こいつ、やらかした後だ。

栗子の傍若無人さには頭が痛くなる。もっと穏やかに生きられやしないものだろうか。

だが栗子の激情が緩和されたからなのか、通常通り心の声が聞こえるようになっている。これで大分監視しやすくなるな。

僕は気を取り直し再び今いるビルの屋上から遠くにいるせいで小さく見える栗子を見下ろす。僕が監視している事に気付いた様子はないが念のため気配を消しておくとしよう。

（さて、気分もある程度だがスッキリした事だし始めるとしようか）

ん？会社（集英健康食品）の中に入っていたか。堂々と玄関口から入っていったがこの会社の警備がザルなのか栗子があっさりセキュリティを突破しているのか。

やれやれ、ともあれこれは完全な不法侵入だな。それはまぁいい、いやよくはないのだが。侵入ってのは何か用があってするもんだからな。……もしや内部から滅茶苦茶にするつもりか？可能性は、あるな。いやあるどころじゃない九分九厘そうだよし止めに

（あった、これが見たかったんだ。……よし、もうこんな所にようはない）ヒュン！

違った。それと瞬間移動（逃げら）された。

栗子が瞬間移動する前に何を見ていたのかは千里眼で見ていた。栗子がそれを見て何をしようとしているかについてはおおよその予想がついている。僕の予想があっていれば……あっている、だろうか？

最近になって栗子の行動や考えといったものが今まで把握してい

たものとは違って来ている事に気が付いた。
本当にあっているか自信なくなってきた。よし、ここはもう確実にそうだと言いきれるまでもう少し栗子を追跡して――
痛っ
頭が痛い、いや何行か前の〝頭が痛い〟とはまた別の意味で普通に頭が痛みが走った。痛みと共に頭に映像が過るこの現象、予知か。
ふむ、こうなるのか、少し意外だな。さて、このまま放置したら予知で視た展開になるが、僕が対処する事で変える事も出来るはずだ。さてどうしたものか。
やれやれ面倒な事をしてくれるな栗子は、まったく。

〈一週間後〉

夕刻を当に過ぎ日が完全に沈む頃、僕達家族は晩ご飯を丁度食べ終えテレビでも見ながらゆったりとした時間をすごしている。普段なら自分の子供の前で平然といちゃつきだす両親を視界から外すため早々に二階にある僕の部屋に移動しているところだが、今日は一階のリビングで適当な漫画でも読んで時間を潰す事にする。
栗子は自分の部屋でスペランカーしている。いい加減飽きていい頃なんだがな。
「楠雄、ここ最近一階にいる事が多いね。なにか理由とか、いや全然いいんだけどね！」（楠雄がいるとママとイチャイチャしずら……くなんか全然ない！むしろ燃える！）
どういう神経してんの？なんてツッコミを入れるのは今日は止めておこう。
［気にしないでくれ］
なんて荒波立てない返しでもしておこう。
「んー、まぁいっか。楠雄が何を考えてるか分かんないのはいつもの事だからなぁ」
なんか癪に触るが、まあそれでいいや。

「それよりも、ママ！今日も美味しいをご飯ありがとう！愛してるよ！」
「うふふ、私もよあなた♥今日の献立は何が一番美味しかった？愛するあなたのためにまた作ってあげたいの」
「全部美味しかったよ。けど強いて言うなら一番は煮卵かな。醤油がしっかり染みててさ！」
「まあ！二日前に味付けした醤油に茹で卵を浸けたんだけど上手い具合いに味が付いてたか心配だったんだけど、あなたにそう言って貰えて良かったわ～♥」
「本当に美味しかったよ、毎日食べたいくらい！……って言いたいところだけど、茹で卵の殻を剥くのって地味に大変だし無理しなくて大丈夫だよ」
「あらそんな事ないわ。この間買ってきた『全自動卵割り機』を使えばね！」
「『全自動卵割り機』だって!?あれに茹で卵を剥く機能があったてのかい？」
「そうなの～♥『全自動卵割り機』の卵型の頭に茹で卵を入れてからスイッチを入れるとね、揺れたり震えたりしていい感じに卵にヒビが入るの。後は普通に殻を剥くんだけどスルスル殻が剥けるし、中の卵もツルツルで傷がないのよ～」
「おいおい僕はてっきり生卵を割るだけの手でやった方が早いだろっ言われるだけに生まれた道具なだけだと思い込んでいたけど、僕の勘違いのようだね！ＨＡＨＡＨＡ！　うーんでもそんな便利な道具だとやっぱり高かったんじゃないの？」
「そうでもないの。税抜き千五百円よ」
「そいつは安い！明日にでも編集長におすすめしてみるよ！」

ショッピングチャンネルか！
このまま、ご注文の際はこちらの番号まで！、とか言い出すんじゃないかとヒヤヒヤしたぞ。後、それで千五百円って安くはないんじゃないか？

……いや正直驚いているんだ。あんな馬鹿みたいなものでも確かに母は大助かりしている。実際茹で卵の殻を剥くなんて事にいちいち超能力は使いたくはない。今まで頭ごなしにセールスの商品を否定してきたが、少しだけ考えを改める必要がありそうだ。

セールス、か。やはり思い起こされるのは丁度一週間前のあの出来事。集英健康食品のセールスマンが明確な悪意を持って母を陥れようとした結果それが栗子の逆鱗に触れたあの日だ。

あの後どうなったのか、あの日予知で視たニュース番組で確めるとしよう。

『

「次のニュースです。本日○○時にて集英健康食品の倒産が決定しました。集英健康食品は六日前にて集英健康食品が独自に作られた全ての商品が偽装された悪質な物と判明され世に反感を買いました」

〔街頭インタビュー　集英健康食品についてどう思われましたか？〕

〔三十代女性〕「最低ですよね。今まで平気な顔してあんなしょぼいくせに無駄に高くて結果なにも健康にいい影響を与えないどうしようもないふざけたものを平然と売ってたと思うとすごく腹が立ちます」

〔二十代男性と三十代男性〕「俺は前から前から集英は駄目だと思ってたんすよね～～」

「おいおい集英じゃなくて集英健康食品な。これ大事だから二度と間違えるなよ。あ、でもわたしもあの会社のやった事が許せないのは同感ですよ」

〔十代男性　（顔出しＮＧのためモザイク編集をしています）〕「家に来た集英健康食品のセールスが家族の健康のために買った方がいいなんて言うから百万円ぽんと出したんです。ええ、僕の大事なココミのためならそのくらい安いですから。後から集英健康食品の商品が悪質なものだって知ったんです。憤りはありますが可愛いココミに僕の愛情は十分に伝わったはずなので後悔はしていませんね」

などなど様々な意見がありましたが、集英健康食品を責める声が圧倒的に多く、倒産が決まった現在もなお怒りが収まらない住民から集英健康食品本社の取り壊しを望む声が上がっています」

『
インタビューを受けていた最後の十代男性だが、サングラスとマスクを付けた上でモザイクまで入れるとはよっぽど顔バレしたくないらしい。……顔はほとんどわからないはずなんだがどうにも最近何処かで見た気がする。気のせい、であって欲しいところだ。
それはさておき、あの日予知で視えた映像――一階のテレビに映るニュース番組、アナウンサーとその下に書かれた『集英健康食品の倒産。取り壊しの声相次ぐ』の文字――の通りになったか。

ここまでの話では全容が伝わらなかったと思う。
なのでシンプルに分かりやすさ重視で今回の「悪徳セールス撲滅事件」を栗子が一体何をしでかしたのかを明記しつつ振り返ろうと思う。ダ○ガ○ロ○パで言うところの苗○君が「これが事件の真相だよ！」と決め台詞を吐いてからやるアレをイメージしてくれると助かる。
事件は僕の母がセールスの商品を衝動買いするところから始まるがここは割愛する。詳しくは前回を読んで欲しい。
話は飛んで栗子が集英健康食品本社に侵入したところから語っていこう。まず栗子が侵入した目的、これは様々な会社で提携して拡散している情報源〝顧客名簿〟を調べるために他ならない。
顧客名簿を盗み見見た栗子は次の行動に移す。顧客名簿を基に集英健康食品の消費者の家を一件一件周り〝虫の知らせ〟を使ってまわった。その内容は、
――黄金（ゴールデンウォーター）水はただの水道水の可能性大――
――集英健康食品に金を騙し取られているー―
――集英健康食品は最低で外道でこすずるい悪党、とにかく滅ぶべし――
等々、集英健康食品に疑惑と嫌悪を植え付けた。
〝評判を地に落とす〟それこそが栗子の〝復讐〟だった。

突然降って湧いて生まれた集英健康食品への猜疑心や不信感に消費者は多少動揺するものの、差異はあれど「あれ？考えてみれば買ったこれってどうなんだろ」と疑惑の心が芽生えたのは確かだ。

スマホは持ってないしパソコンなんかはあまり触らない僕には馴染みが薄くあまりぴんとこないが、現代は簡単にネットで知ったり伝えたりが簡単な時代だ。集英健康食品について悪評の伝搬や、被害者の会が結束して訴えを起こすのも然程時間はかからない。集団による行動力は時に超能力者よりも強力だな。

そんなこんなで最終的に先程見た今日のニュースの通り、集英健康食品の倒産＆取り壊し（予定）という結末になったのだった。そうこれが事件の全貌だ、と言いたいところだがこの僕が何をしていたかを語らせて欲しい。

話は栗子が〝顧客名簿〟を覗いてから瞬間移動で消えた後からになる。残された僕は、栗子を追いかけて監視でも続けようとした寸前で予知を視たのだ。予知の内容は〝集英健康食品の倒産＆取り壊し〟。その未来を知り栗子がやろうとしている事に完全な予測がついたのだった。

ああ、これは余談だが僕が予知を視たのは合計二回だ。二回目の予知では〝集英健康食品跡地と思われる場所に新しく出来たロー○ン〟が視えた。……これは忘れてくれて構わないし、僕自信も気に掛けるべき内容ではないと即判断した。

話を戻すが一つ目の予知を視た僕には二つの選択を迫られる。栗子を好きなようにさせて予知通りの結末を見届けるか、それとも栗子を強引にでも止めて未来を変えるかの二択だ。

未来を変える、つまり悪徳企業の集英健康食品を野放するという意味だ。「悪を見逃すって言うのか？」と言いたげな栗子と同じような直情的な読者のそこのあなた、ちょっと待って頂きたい。僕は確かに〝悪徳企業〟と言ったがそれは〝今〟の僕だから言える事であって〝一週間前〟の僕にはそう判断出来るほどの〝証拠〟がなかったのだ。

可能性でものを見ればもしかしたら家に来たセールスマンの〝独

断〟で詐欺を行っていたかもしれないし、集英健康食品のごく一部の部署がクズの集まりでそれを除けば普通の企業だったなんて事もあるかもしれない。その場合〝有罪〟ではあるが予知の通りに〝死刑（倒産）〟を宣告するのはやりすぎだろう。

とはいえ可能性と言うなら集英健康食品が普通の会社に見せかけた詐欺グループと言う最悪の可能性も十分に考えられるのだが。

真意を確めるため、栗子に続いて僕もまた集英健康食品本社へと侵入した。僕に対して隠し事も隠蔽も不可能だ。隠したい内容の書類をシュレッダーにかけようが〝復元〟し、重厚な金庫に隠そうと〝透視〟し、証拠が無かろうと〝サイコメトリー〟で何をしていたかがまる分かりだ。

まあ結果は普通に〝クロ〟。水道水を山の天然水と偽って売っていただけでなく他にもスーパーで買った食品やら調味料を別の袋や容器に移しかえてなんやかんや文句をつけて本来の値段の五倍近い値段で売っていたりもした。ついでに勤めている上から下まで揃いも揃って皆騙す気満々の〝クロ〟、正真正銘の詐欺グループ。

死刑！一ミリも救いようがねーじゃねーか。少しでも信じようとした僕がバカだった。くたばれクソ会社が。

……まあそんなわけで、予知通りの未来を迎えるために僕はあえてＲＰＧ（ロールプレイングゲーム）のコマンドにあったら基本的に使う機会がなさそうな〝なにもしない〟を実行、これ以上の集英健康食品への干渉を絶ったわけだ。

そして今日予知通りになった事をテレビで〝確認〟したのだった。

これにて事件は本当の終末を迎えたのだ。

まあ総合で見れば悪くはない結果だったんじゃないか？この町に根付いた悪がまた一つ成敗されたわけだし、栗子もまだ全てが悪と決まったわけじゃない会社（実際完全悪のクソ会社だったが）を潰そうとはしたものの、あの時の怒りのままに人を？し尽くしそうな様相だった栗子が死者は当たり前として怪我人も出さなかったのは十分

に褒められた話だ。（時を戻したとはいえ本社を破壊したりしていたようだが）よく我慢した方だと思うぞ。
……評価が甘い？確かにそうかもな。だが僕自身も小二の頃に我を忘れるほどの怒りに任せて当時のクラスメイトに怪我をさせた過去があるからな。その負い目がある僕にはあまりきつく栗子を責められないところがあるのだ。仕方がない。

これで僕の話は終わりだ。長話に付き合わせてしまい申し訳ないな。

予知の確認も終わった事だしもう一階に用はない。さっきまで読んでいた漫画を本棚に戻し、イチャつき始めた両親を尻目に部屋を出て二階にある自分の部屋へと向かう。その最中、

ピンポ～ン♪

家のインターホンが鳴り響く。

「あら？こんな時間に誰かしら」
［僕が出る］
「まあ！ありがとぉくーちゃん」

まぁ今一番玄関の近くにいるのは僕だからな。……それに今玄関戸の奥にいる人物を母さんが見たら悲鳴に近い叫び声を上げそうな気がするからな。
僕は嫌々ながらも戸を開ける。
「やあ、こんばんわ斉木楠雄君。おや、どうしたのかな？ああ、この前一度会ったけどこのサングラスとマスクじゃ誰か分からないか」
いや今日に限ってはその姿の方が記憶に新しい、モザイク付きでテ

レビで見たからな。後、今日はもうダルいから帰ってくんない？

〔後編へ続く〕

第17ｘ　クーリングオフしたい！Ψ愛の妹を想う変態兄　後編

「お茶どうぞぉ」コトッ
「ありがとうございます。今日は斉木君と学校行事の実行委員として少し話しておきたい箇所がありましてお邪魔した次第です。それが済みしだいすぐにお暇(いとま)しますので。なるべく早く済ませますのでご安心ください」
「あらそうなの？全然ゆっくりしていっていいのよ。あ、なんなら泊まってってもいいんだから！」
「いえ遠慮致しておきます。ご好意は嬉しいんですが」
　僕の目の前にいる〝人の家に上がってなおサングラスとマスクを外さない明らかに怪しい男〟に対して疑う事を知らない母は笑顔で応対し笑顔のまま僕の部屋から出ていった。
　……まぁ母さんだからな、仕方ないな。
「フッフッフッ。これがこの俺、売れっ子名俳優の六神通様の実力ってやつだ。とっさに学校の先輩役をやってのけるなんてどうってことはねーくらいにはなぁ」
　いや相手がうちの母だから疑われなかっただけだけどな。それとお前はもっと自分の不審さを自覚した方がいい。
　目の前の男、（一応）有名俳優の六神通は丁寧だった口調を崩して荒々しい口振りを見せる。これが演技ではない素である事は心の声と照らし合わせて断言出来る。六神が一つ歳が上の人間とはいえこの態度は正直気に食わない。
　というかほんと何でサングラスとマスクまだ外さないの？マスクのせいで少しフガフガいってるぞ。
「今日はメガネ君に言いたい事があって来てやったんだぜ」
　メガネ君？
「この前の休日、映画館で会っただろ？その事でちょっとな」
　ああ、あの日か。あの日から日も浅い上にあれほどの災難な一日を

忘れる方が難しい。
〝あの日〟に何があったの？とお思いの読者のために〔回想〕を用意したので読んでいって欲しい。

〔回想〕
やれやれ今日は母さんがセールスで衝動買いした日だぞまったくやれやれ。
この商品らをアポートでクーリングオフをしないとな。……ん？これは運気が上がる的な指輪か。さあこれもクーリングオフだ。サワッ（指輪を触る音）、こ、これはテレパシーを遮断する素材!?（見ただけではそれがゲルマニウムだとは流石に気づけない）
テレパシー能力の消失！そんなすてきなアイテムの発見が僕の錆び付いた好奇心を刺激し行動させた。さあ、長年の夢を叶える時！いざ映画館へ!!……いやいや待て待て時間的な都合もあるし楽しみは次の休日までとっておこう。楽しみだな。
〔この時ゲルマニウムリングを触っていた事に加えてテレパシーが消えた喜びで周りが見えなかった斉木楠雄は、すぐ横で双子の妹の斉木栗子が黄金（ゴールデンウォーター）水をサイコメトリーで過去を読み取っていた事も、その内容からすぐにでも暴れたいほどの衝動を無理矢理押さえ付けようとする葛藤も知るよしもない〕
〔次の休日。ゲルマニウムリングを指に付けた斉木楠雄は映画館に入っていった〕
……道中周りの人間が燃堂の顔に見えだした。自分ではそれほど気が付かなかったが相当気が滅入っているらしい。急激な環境の変化が自分でも気が付かない内にストレスがたまっていたのかも知れない。
ゲルマニウムリングはすぐにでも外すべきだ。将来的にこれを付けて生活をして行きたいが、そう焦る事はないんだ。少しずつ慣らしていくに越したことはない。
だがせめて映画だけでも見てやるぞ。長年の夢だったんだ、燃堂（の幻覚）ごときに邪魔はさせん……！例え映画の登場人物全員が燃

堂に差し替えられる可能性があるとしてもだ。
顔だけ燃堂の女性の受付にお金を支払い映画を観賞するのに一番いい場所を指定する。ポップコーンとコーラをそれぞれ持ち、周りの人間なぞ気にせず（恐らく顔は燃堂）沸き立つ気持ちを抑えながら指定席へと座る。
座ってしまえばもう邪魔するものは――。

「え、斉木君?!」

燃堂!?
いや違う、顔以外から察するに照橋さんか。
テレパシーがあれば事前に対処は出来たのだが……。いや将来的にゲルマニウムリングを付けて生活をするのならば照橋さんの神に愛された運命操作も受け入れねば……少しだが決心が揺らいでしまった。今は保留という事にしておこう。
念のため隣を窺うと何やらオロオロと落ち着かない様子。なんだ、一体何を考えている。テレパシーさえあれば……。
いやいい、照橋さんは常識はある方だし映画鑑賞の邪魔はしないだろう。僕は静かに映画を見れればそれで――。

「おいお前、なに俺の心美の隣席に平然と座ってる！心美の隣は俺だけのもんだ。ほらどっか行け！」

燃堂!?
いや違う、こいつは……誰だ。いやもうこの際誰だっていい、もうこいつ燃堂でいいだろ。邪魔するな燃堂、僕は映画を楽しみたいだけなんだ。お前に構ってやる時間はない。

「やめてよ。斉木君は偶々――」
「斉木、君、だと？心美こいつと顔見知りなのか？おい、てめぇ俺の心美とどういう関係だ!?」

燃堂（もどき）はサングラスを取った。

〈回想終了〉

「いやぁ軽率だったよ。この俺、六神通主演の映画会場で変装を解くなんてさぁ。パニックになって当然だよなー。けどあの騒ぎ中で心美に怪我がなかったのは不幸中の幸いだったけどな！」

何が不幸中の、だ。お前が勝手にやらかしただけだろうが。巻き込まれた照橋さんや僕の方がよっぽど不幸だ。

僕に至っては騒ぎのせいで映画は中止になるは、突然の事でゲルマニウムリングを外す前に人の波に飲まれて燃堂顔に囲まれるはめになるはで不幸中の幸いどころか不幸しかなかったんだぞ。

「ま、そんな訳で一々騒ぎを起こすのもあれだからな、変装する時は油断しないようにしてんだぜ。これが結構大変でなぁ。おっと、一般人のメガネ君にはこんな一生縁のない悩みを話したところで仕方がないよなぁ。すまん、すまん」

なるほどな。でも個室でサングラスとマスクは不自然なんだけどな。……この指摘、流石にもうしつこいか。

「話が逸れたな。それでメガネ君に言いたい事ってのは心美と俺の関係について行っておきたくてな」

ああ、それなら既に把握している。照橋さんと兄妹なんだろ？そしてお前は重度のシスコン変態お兄ちゃん。映画館での騒動の真只中ゲルマニウムリングを外したらすぐに分かった。

「心美とは兄妹なんだ。よくカップルに間違われるんだけど……いやそうじゃない……うん、正確には心美とは兄妹でカップルだ！そう、もはやカップル、交際しているようなものじゃないか！そうさ心美が産まれてから十六年、同じ家に住み、ずっと見守ってきた。そして何より俺は心美を愛してる！心美はそんな俺の気持ちに気が付いている！なんたって俺が毎日心美に愛の告白をしているからな！毎回断られるが照れているだけで相思相愛に決まってる！あぁ、心美、心

美ぃ！愛しているぞぉ!!」
　想定していたより末期、それも手遅れのようだ。
　だがなんというか、さっきから、というよりも初めから妙な違和感があるんだが……。
「あぁ心美、君は正に絶世の美少女……！芸能人として世間的に美人と言われている女優だとかモデルなんかと仕事をしたが、心美と比べたら月とすっぽん、ダイアモンドと石ころ、金銀財宝の山と砂の山、満貫全席とウン○……！」
　おい最後の下品すぎるぞ。流石にそこまでの差はない。
　しかしなんだこの気持ちの悪さは……いやこいつが気持ち悪いのもあるがそうではなくて。
「だからこそだ、樹液に集まるカブトムシだとか収穫時期の畑を狙う猿みてぇにどこの誰とも知れねぇ釣り合う筈のないクズ男がこぞって寄って集って心美を狙いに来やがる。何度追っ払ってもへらへらしながら下心全開で身の程知らずにも心美に近付いてきやがる。お兄ちゃんはな、心配なんだよ！このままじゃ心美が汚されちまう！だからそうならない為にもこの俺が心美のすぐそばで守るのさ、お兄ちゃんとしてだけじゃなく恋人としてもなぁ!!」
　一々例えるんじゃない。なんで今度の例えは田舎っぽいんだよ。

　今の発言も十分に病的で許容出来るものではない……と言いたいところなんだが、悲しいかな多少は納得出来てしまった。
　これでも一応僕も兄だ。双子で同い年、産まれた瞬間が数秒違うといっても〝兄〟という立場に変わりがない。妹の栗子とはケンカもしたしあまりに生意気で憎たらしく、何かと面倒をかけるようなやつだとしてもだ。家族の一員として彼女の幸せを願わずにはいられないんだよ。
　そうだ栗子だけじゃない、天然でおっちょこちょいな母も、頭が足らない馬鹿だが立派に仕事をして家族を守っている父も、この前久々に会いに行った祖父や祖母も皆幸せに生きて欲しい。あぁ、ついでに我が家の変態お兄ちゃん（斉木空助）もな。嫌いだけど。

ま、こんな恥ずかしい台詞家族だろうと言えないけどな。
そんな風に考えてしまう僕にはいくら変態で病的なシスコンお兄ちゃんであろうと一概に否定は出来やしないのだ。
照橋さんは確かに美人だし多くの男に言い寄られているのは事実だ。まぁ実際は不特定多数の男性を意図的に魅了して弄んでいるような可愛いげのない人ではあるのだが。そんな妹を兄として心配になる気持ちは分からないでもない。といっても家族愛が強すぎるあまり恋人として一緒にいようとするのは流石に精神科に行く事をオススメしたい所ではあるが。
それに会って二回目のほぼ他人の僕にいくら愛して止まないからといっても自分の妹自慢ははっきり言って迷惑……は？おいこいつ今何を考え……、おいおいこれで合点がいったぞ。何故こいつが尊大な態度を取りつつも照橋さんに近付いた僕に敵意というものがなかったのかがな……！

「な、メガネ君もそう思うだろ。俺と同じ〝妹を愛する同志〟だもんな！」

妹を愛する同志、だと……!?この僕をよりにもよってシスコン呼ばわりするつもりか!?ふざけるな！
一体どこでそんな根も葉もない噂が流れたんだ、心当たりがないが……。
「そう不安そうにすんなって。心美にも内緒にしてって約束したんだからな。誰にも話したりしねぇからさ。あぁ心美、心美のお願いなら何でも聞くよぉ」
照橋さんかよ！つーかてめぇも照橋さんとの約束平気で破っておいて何惚けてんだよクソが！
確かに一時期僕がおっふしない理由の一つに〝妹の栗子を愛するシスコンだから〟と考えていたのは知っているが、だからといってそれは可能性の一つとして本気でそう思っている訳じゃなかった筈だぞ。分からない、照橋さんが何を考えているのか全く分からない。

「十数年間一緒にいる妹に恋の一つや二つ普通にあるもんだからな。もっと胸をはって世間に妹を愛してるっていいと思うぞ。俺なら言えるぜ」
何が普通だ、お前の歪んだ価値観じゃねぇかふざけんな！僕はお前みたいな頭のおかしい人間じゃないんだよ！
「心美ほどじゃないのは確かだが心美が認める美人だそうじゃないか。悪い男に騙されないようにずっと一緒にいてやれよ？」
むしろあいつに近付いた男が殺されないか心配、ってそうじゃない、ああ調子が狂う……！
もう帰れよ、早く。
「お、長い事話してもういい時間じゃねぇか。あー最後にこれだけ言わせてくれ。昨日映画館で怒鳴って悪かったな。心美の隣の席に座って恋人気分を味わう変態だと勘違いしたんだが、メガネ君のような妹を愛する同志なら心美に変な真似をする筈がないのにな。ほんと悪かったよ、反省している、この通りだ」ぺこり
立ち上り僕に頭を下げる照橋信。正直複雑だ。
ここでふと気付く。もしかして照橋さん、これを狙って……？もしそうだとしても正直迷惑なんだが。
「言いたい事言ってスッキリしたよ。ま、心美の美しさは語っても語りきれないんだけどな！うん、それじゃまたなメガネ君、お互い妹は大切に、そして愛しつくそうぜ！」
そう言ってムカつくほど爽やかに僕の部屋から出ていく照橋信。下の階で母と変態が「また来てねー」だとか「お邪魔しましたー」だとかそんな耳から聞こえる声が遠くに聞こえる程に疲れ果ててしまった。なんかもうどうでもいい今日はもう寝――
[お前、私をそんな風に思っていたのか？ふうん、キモいからもう私の近付くなよ]
[誤解だ！僕がよりにもよってシスコンな筈がないだろう]
[ほんとかなぁ？]
[疑心暗鬼ゴロ○の真似は止めろ]
クソっ、そりゃ隣の部屋にいる栗子には全部（僕の心の声以外）聞

こえているに決まってるじゃないか！あーもう最悪だ……！
（あー面白。このネタで暫くからかうとしようかな。フフフ）
……ほんっとクソ生意気だよこいつは。

〔オマケ1　災難の後日　斉木栗子とゲルマニウムリング〕

［それで？何のようだ］
僕の部屋に呼び出した僕の双子の妹、栗子は機嫌の悪さを前面に出しながらそう尋ねる。
［お前をここに呼んだ理由はだな――］
そう前置きをしてからズボンのポケットからある物を取り出し机の上に置く。そのある物に触れている間少し不安になってしまう静けさを味わい、その効果を再確認する。
［これをくれてやろうと思ってな］
［指輪？　……。］
［心配しなくても結婚の意図はないし異性を意識してのプレゼントなんて事は当然だがない。だから安心しろ］
［正直ほっとしたよ。あんな犯罪レベルのシスコン野郎のキモい声を聞いた次の日だからな］（もし斉木楠雄、彼もそうだっていうんなら一か八か賭けになるが暗殺でもしていたんだがな）
物騒な心の声はスルー。
（まぁ要らぬ心配ってやつだな。彼の普段の様子から見てそれはありえない）
恐らく栗子独自の能力が暴走でもしているのか、栗子の心の声は僕には聞こえ、そして僕の心の声は栗子には聞こえない。そして栗子は僕も栗子の心の声が聞こえない、そう思い込んでいる。
それを伝えるつもりはない。今はまだ、な。
［じゃあなんだ？妹にアクセサリーのプレゼントでもしてやろう、とかか？お前はそんなやつじゃないだろ。何のつもりだ、言え。言えないなら話は終わりだ］

［説明してやるから落ち着け。この指輪は超能力に影響を与える材質で出来ている。ゲルマニウムという素材だそうだ。発見の経緯は偶々だ、偶々触ったら影響を受けた］
（彼は意味もなく嘘をつかない男だ。そこは信用しているが……）［具体的に影響とはなんだ］
［悪影響ではないぞ、僕もさっき触って見せただろ？別に死ぬってわけじゃない。そこは安心して欲しい］
悪影響はない、あくまで僕個人としては舞い上がるほど嬉しい効果なんだから嘘は言っていない。
［それはいいが具体的な影響は何って聞いてるんだ。一体どんな影響があるというんだよ］
［さぁな。試しに触ってみたら分かるんじゃないか？］
フフ、いつもいつもお前には振り回されてばかりだからな。チャンスがあればやり返す、お互い様だろ？
［……。］（こいつ私を試すつもりか？そうなってくると彼を完全に信用するわけにはいかないな。超能力者に影響を与える素材ってのがそもそもが嘘臭いが……いや彼はそんな下らない冗談は言わないだろう。だが〝悪影響を与えない〟ってのはかなり怪しい。しかし彼は指輪を触っているところを見るに……いや、だが頑なにどんな影響を与えるのか語らないし――）
悩んでるな。とはいえ栗子の性格からして最終的には触るだろう。ここで触らなければ僕に負けを認めるのと同意だからな。家（うち）の変人お兄ちゃん（斉木空助）程ではないが僕に勝ちたがっているきらいがあるからな。だが時間が勿体ない、さっさと決断して貰おうか。
軽く挑発してみる。
［お前って案外ビビりで怖がりのか弱い女なんだな（半笑い）］
プッツン［私をナメるんじゃあないぞ!!やってやろうじゃねぇか!!］
激昂した栗子はガッという擬音が聞こえそうなほどの勢いで指輪、ゲルマニウムリングに左腕を伸ばし握り込んだ。チョロい。
栗子はどうだとばかりに僕を睨み付ける。ウザいくらいのしたり

顔。
……。落ち付きを取り戻し始めた様子の栗子は次第に表情が曇り出し顔を俯けた。心なしか震えているようにも見える。ちらちらとこちらを伺うように見てくるが何も聞こえてこない。［大丈夫か］とテレパシーを送ってみたが返事はないし反応もない。
……。なんか可哀想になってきたので栗子がゲルマニウムリングを握り締める方の手を指差し、あまり気は進まないが、口を開けて発話して伝える事にする。
「そ（ゲルマニウムリング）れから手を離せば効果は消えるんだが」
「……！」
投げ捨てるように慌ててゲルマニウムリングから手を離す栗子。
［あ、あーこれは聞こえてる？］
［ああ］
［よかっ……う、うん（控えめの咳ばらい音）、ゲルマニウムの効果は大体理解した］
［そのようだな］
［で、このゲルマニウム製の指輪を私にくれるんだっけか］
［そうだ］
［悪いが、私には必要がない物のようだ］
［そうだろうな］
［……ちっ（クソデカ舌打ち音）。もう用はないだろ、私の部屋に帰るからな］
栗子は不満を隠しもせず部屋から出ていった。部屋から出る際にも顔を横にして警戒の視線の視線は緩めない。そんな栗子に苦笑してしまう。
今回意図せず判明したのだが、ゲルマニウムリングは心の声が聞く（聞こえる）能力だけでなく相手の頭の中に言葉を送る能力も消えるようだ。つまりゲルマニウムにはテレパシー能力全般が完全に使えなくする作用があった。いや栗子を使って実験するつもりはなかったんだがな。
一息ついて気付いた。やれやれ、栗子のやつゲルマニウムリングを

投げ捨てたまま出ていきやがったな。仕方なく拾い上げる。当然またテレパシーが使えなくなる、がそれに慣れる為にも少しの間このままでいてみる事にした。

静寂。人の心の声が聞こえない今だ慣れぬ静けさ。

常人にはこれが普通なのだろうがやはり不安だ。自分の部屋にいて誰も襲ってくる筈はないのが分かっていても……待てよ、ニンジャならどうだろうか。突然後ろからのアンブッシュが！……考えすぎだ、そもそもニンジャなんて現在に存在しないのだから。勿論新手のスタンド使いも現れやしない。分かっているのに不安感が襲う。

この静けさによる不安に慣れるまで何年掛かるだろうか。いや何年掛かろうが関係ない。どんな災難が起きようとそれを受け入れる屈強な精神とテレパシーを必要としない普通の人間への渇望さえあればいずれ……！

……意気込んでみたが、暇だな。本でも読むか？だがしかし読書に熱中しすぎてなにかしら大事が起きた時に対処が……。分かっている、大事なぞそうそう起きやしない、考えすぎだと。それでも出来る限り精神的に無防備な姿勢にはなりたくはない。

……

……

……暫く静かな世界に身を置き、不意に頭に浮かんできたのはつい数分前の栗子の姿だった。

先程も言ったように栗子は僕の考えている内容、つまり心の声は聞こえていない。それなのに栗子は特に僕と割りと普通に接しているように見える。

現在でも警戒はしているものの、三年くらい前までは今以上にあからさまにそして異常な程に警戒の目を向けていたな。その様子を音で表すなら「ガルルルル」と言ったところだろうか。

だから意外だったのだ。ゲルマニウムリングを触った（握った）栗子があんなにもしおらしくなるなんて予想外だった。予想では強い不安感に襲われるものの、持ち前の強きな性格で「お前らなんか怖かねぇ！」なんて叫びながら過剰な全方位警戒体制に入るかと思ってい

たのだが。そんなビビリまくった栗子を笑ってやろうと考えていたのだが……怯えたんじゃ笑うに笑えないじゃないか。
テレパシーが使えなくなっていた時の栗子が何を考えていたかは分からない。分からないが僕に助けを求めていた、ように見えた。普段から僕を唯一無二の天敵と言って目の敵にしているあの栗子が、だ。
そういえばゲルマニウムリングを触る触らないの問答をしていた時に栗子はこんな事を考えていたな。

（彼は意味もなく嘘をつかない男だ。そこは信用しているが……）

この事から分かるように栗子からある程度の信用を得ている。こんないい方をするのは偉そうだし少し自意識過剰な感じがするがこれは確かな事実。
こんな風に相手を勝手に見透かしてしまうのもテレパシーのデメリットと言えるだろう。改めてテレパシーのクソ能力っぷりには辟易してしまう。
まあ、あくまで〝信用〟であって〝信頼〟ではないが、それはそれだ。
ただその信用がテレパシーでの心の探りもなくただの観察による客観的評価によって得られたものだというのならば、
僕はそれに応えなければならないだろう。人として、兄として、な。

〔ゲルマニウムリングを触り眺めながら物思いに耽る斉木楠雄は気付かない。背後からニヤつきながら忍び寄り〝ワッ〟をしようとする斉木栗子のその姿に〕

（チャンスがあればやり返す、お互い様だよな？）

〔オマケ2　災難の前日　妄想する照橋さん〕

〔映画館での災難が起きたその日の夜。照橋心美は自分部屋で自己勉強に勤しんでいた。しかし今日の映画館での出来事が頭を過るせいで勉強に身が入らないでいた〕

（う～ん……、今日は不味い所を見られちゃったわ。まさか映画館で斉木くにおに会うなんて……。

これが私一人なら絶好のおっふチャンスだったのに……。お兄ちゃんが全部お金は払うから一緒に行こうなんて言わなければこんな事にはならなかったのに！もう全部お兄ちゃんが悪いんだからね！）

〔そもそも照橋信（お兄ちゃん）が誘わなければ好きでもないアニメの実写映画なんて見に行っていない照橋さんであった〕

（はぁ……絶対誤解したに決まってるわ。完璧美少女の私が説明すれは誤解だって分かって貰えるに決まってるけど……。例えばそこらのイケメン程度ならただの友達って言えば、

「そっかーただの知り合いかぁ。あー良かったぁ。そもそもあんな男照橋さんと釣り合ってないもんね。付き合ってるなんてそもそも有り得なかったのさ、ハハハ」

で済むけど、それが六神通の場合になると、

「そ、そっかただの知り合い……。照橋さんが言うなら間違いなくそうなんだよな。そうに、決まってるのに……有名俳優の六神通さんでも照橋さんと付き合える筈が、がが、ああ、ああああ、想像出来てしま、ぐはー！」

そう、六神通だとまあまあ釣り合ってしまうのよ。私と付き合う六神通を想像して絶望のあまり口から泡を吹いて倒れてしまうかも。私の口から説明するにしても慎重にいかないと……！）

〔過去に兄である照橋信（六神通）と恋人関係にあると勘違いをした男性が吐血し生命の危機に陥った実例を思い返し、斉木楠雄に対しては過度な心配をする照橋さんであった〕

（でもこれってある意味チャンスなんじゃないかしら。

今斉木くにおは憧れの私に彼氏がいると思い込んで落ち込んでいる、絶対そう違いないわ。

そこに朗報が伝えられる、あれは彼氏じゃなくてお兄ちゃんだって。そう知らされた斉木くにおは絶対泣いて喜ぶわ。

斉木くにおが完璧美少女の私に今以上に意識した所で偶然私が通りかかるの。斉木くにおは飼い犬がご主人様に尻尾を振っているような、そんな風に喜びを隠せないでいるの。そんな様子を見て察した私はこう言うのよ。

「斉木君、この前はお兄ちゃんがごめんね。あんなお兄ちゃんだけど悪い人じゃないから許してあげて欲しいの〔優しさアピール〕。あーあ、あんな騒ぎになっちゃったせいで結局映画も観れなかったなー……。わぁ！誘ってくれるの!?ありがとう斉木君！〔斉木楠雄に誘われない可能性を一ミリも想定しない照橋さん〕」

超絶美少女の私と映画を観に行くって決まっただけでもおっふは固いけど、まだ私のアタックは終了しないわ。

映画に行く具体的な日時を話し終わった後、これでこの私との幸せな会話が終わってしまうとしょんぼりする斉木くにおに女神そのものの私がそっと距離を詰めて、これだけでもおっふするわ、耳もとで聞こえるか聞こえないかくらいの声でこう言うの。

ボソッ「私まだ誰のものでもないけれど、斉木君なら……」

はいドーン！ちょっと積極的すぎるけどこれなら老若男女問わずおっふ確定よ♥

……。いや、ちょっと待って、やっぱ無理。よくよく考えてみたらやっぱ実際に最後の台詞を言うのは恥ずかしすぎるかなーって。

それにこの作戦の前提が誰かが映画館での彼氏っぽいあれが私の

お兄ちゃんだって伝える所から始まるのだけれど、それが出来るのが当人のお兄ちゃんだけじゃない。……作戦の練り直しね）

〔照橋信への信頼がほぼ零の照橋さんであった。暫くどうすれば誤解が解けるのか、解いた上でどうすればおふるかを考えていた照橋さんであったがしっくりくる妙案は生まれなかった。

一先ず勉強に戻ろうかとノートに目を向けたところで、ふと疑問が頭を過った照橋さん〕

（……そういえば斉木くにおと栗子ちゃんって家ではどんな風にしているのかしら。学校ではいつも無口で何考えてるか分かんない双子だけど。

私が思うにあの双子は二人揃って人間不信なんだわ。人前で自分を出すのが怖い、そんな感じ？だから斉木くにおは私におっふするのを我慢しているのかも。

そういえばこの前栗子ちゃんに好きな男の子とかいる？って聞いてみた時に静かに首を横に振ってたけど、もしかして昔悪い男と付き合って以来男性不信になってそのまま人間不信になっちゃったとかかも？

はっ!?もしかして斉木くにおにも似たような経験があるのかも。ありえるわ……！そんな可哀想な傷付いた心を癒してこそ完璧美少女だわ。待ってなさい、斉木くにお！

……あー、栗子ちゃんには申し訳ないけど私にはどうする事は出来ないの。女の子だし。でも栗子ちゃんって普通に美人だしまあまあのイケメンくらい簡単にゲット出来そうだし、いっか）

〔斉木栗子に寄ってくる男子を片っ端から奪っている事を都合よく忘れる照橋さんであった〕

（ちょっと脱線しちゃったけど斉木兄妹の家での様子よ。私の予想だと〝家弁慶〟なんて言葉もあるくらいだし内弁慶とは違うけど家にいる間はまるっきり性格が変わるんじゃないかしら。学校にいる間はお互いツンツンしている二人、でも――

〔以下、照橋さんの妄想〕

ガチャ「ただいまー」

「あ、お兄ちゃんおかえりー。遅かったね、あれその手に持ってるのって……！」
「ああ、栗子が前に食べたいって言ってた人気スイーツ店の期間限定ケーキさ。この前栗子が買ってきてくれた美味しいコーヒーゼリーのお返しだよ」
「え、これ食べていいの？」
「もちろん。その為に買ってきたんだからいいに決まってるさ」
「やったー！一緒に食べよう！」
「いや、僕の分は買ってきてないから栗子一人で食べていいよ」
「えー、やだー。そうだ、半分こしよう！それなら一緒に食べれるでしょー？」
「やれやれ、栗子は本当にいい子でお兄ちゃん嬉しいな」
「よーし、それじゃあ」
「いっただっきまーす！」
　こんな風に仲良し兄妹なのかも知れないわね。これに関しては本当にただの想像に過ぎないけれど、あの双子にもこんな微笑ましい一面があったらいいと思うの）
「はぁ……」
（栗子ちゃんは斉木くにおの妹なんだもの、いつも一緒にいるのは当たり前。それは分かってはいるんだけど……）

　ボソッ「栗子ちゃんが羨ましいな」
「誰だよ栗子って」
　ビクッ「ちょっ、ちょっとお兄ちゃん!?いつから、っていうか何で私のベットで寝てるのよ！」
「いやー心美に悩みがあるんじゃないかなーと思って相談に乗ろうと来たんだが、ノックしても返事はないし部屋の中を覗いてみたら勉強に集中してるみたいだから時間を改めてまた来ようと思ったんだけど眠くなってね。つい」
「だからって何の断りもなく私のベット使わないでよ！もー」
（怒ってる心美も可愛いな）「ハッハッハ。それはそうと栗子って子は

学校の友達か？」
「うん。斉木栗子ちゃん」
「斉木……？ふぅん、で？その子を羨ましがる要素はどこなんだ？心美の美しさに敵う人間なんていやしないぞ。お兄ちゃんが保証する」
（当たり前でしょ。なんなら女神より美しいわ）「そんなんじゃないってば。羨ましいって言ったのは、（本当の理由を言うわけにもいかないし、ここは適当に）栗子ちゃんってテストの点数が学年トップ取るくらい頭がいいの。それが羨ましいなって」
「へー、でも心美は頭もいいからすぐに追い越せるさ。あ、だから勉強頑張ってたのか！あちゃー邪魔しちゃったかな。うん、また今度ゆっくり話そうか。それじゃ」
「お兄ちゃん、ちょっと待って!!」
「え？心美の頼みならちょっとどころか永遠に待つぞー。心美のすぐ側で、なんちゃって、はは」

（このままお兄ちゃんを行かせちゃ駄目、きっと、ううん、絶対に変な真似をするに決まってる。そう例えば〝斉木君に私に近づくな脅しにい行く〟とか。
そう思ったのは主に三つの理由から。一つは私に悩みがあると見抜かれている事。お兄ちゃんにバレる悩みは今日のあれしかない。二つ目は明らかに〝斉木〟に反応している事。多分敵意のような感情を抱いていると思う。
そして何よりお兄ちゃんは私の虜だもの、私の為なら何だってするわ。だって私は世界一の美少女、お兄ちゃんであろうと私に恋をするのは当然ね。私ってほんと罪な女よね。
お兄ちゃんが何かやるかもっていうのはまだ憶測に過ぎないけれど、斉木君に迷惑が掛かってからじゃ遅いわ！その為には……そうだ！）
「お兄ちゃんに話しておきたい事があるの。今日偶然会った斉木君の事よ」

ピクッ「あいつがなんだって？言ってごらん」
「もしかしたらだけど、お兄ちゃんは斉木君が私に気があるんじゃないかのかって心配してるんじゃないかと思ったの」
「あぁ実はその通りだよ心美俺が思うにああいうタイプの男は」「黙って。私の話しを最後まで聞いて」「アッハイ」
「でもそんな心配する必要一切ないの。だって――」

（実際これがお兄ちゃんを騙す〝嘘〟ではあるんだけど――）

「斉木君は俗に言う〝シスコン〟なんだもの！自分の双子の妹、さっき話した斉木栗子ちゃんを愛してしまっているの。可愛いし頭もいい子だから実の兄である斉木君も心を奪われてしまうのも可笑しな話じゃないわ。斉木君の目には栗子ちゃんしか映らない。これは本当よ、だって栗子ちゃんがこっそり教えてくれたんだから。ついでに言うと栗子ちゃんもブラコンよ。だからお兄ちゃんの心配するような事には絶対にならないの。分かった？後これ内緒だからね！誰にも言っちゃ駄目なんだからね！」

（――これが事実である可能性も捨てきれないのよね……。ま、もしそうであっても私の魅力に気付かせる事が出来ればそれでいいの。待ってなさい斉木くにお！必ずおっふさせてみせるわ！）

〔愛する妹の照橋さんの言う事なら基本的になんでも信じると決めている照橋信はどこか嬉しそうに納得した。その様子を見てこれでお兄ちゃんが斉木君に迷惑を掛ける事はないと一安心した照橋さんであった〕